

訓練所における
協力隊講座

第1集

日本青年海外協力隊事務局

訓練所における
協力隊講座

第1集

JICA LIBRARY



1018798[7]

日本青年海外協力隊事務局

国際協力事業団	
受入 月日 84.5.24	000
登録No. 07452	36
	JV

まえがき

協力隊は、事務局職員および隊員の自己啓発、努力なくしては前進しえない。

確かに、より実りある成果をあげるには、国民一般の海外協力に対する深い理解と支持が不可欠であり、協力隊が国民的基盤に立って協力活動を推進しなければならないことはいうをまたない。海外協力に対する認識が国民一般の中に浸透するには、学校教育における、特に教科書の上での欧米偏重主義が是正され、「アジア」「アフリカ」「ラテン・アメリカ」の地理、歴史や南北問題のことが正當に取り扱われることなどが必要である。

しかし、協力隊事務局としては、それを待つばかりはいられない。日進月歩派遣前訓練の内容を充実していかなければならないし、募集の段階でも応募者の判断や意思決定に資するための資料を整備していかなければならない。かねてより恰好な「海外協力隊読本」といったものがあれば好都合であると痛感されてきた所以である。

しかしながら、一挙にこの種のものを作り上げることは困難でもあり適切でもない。今回はひとまず事務局職員と隊員に教材としての適否を問うために、これまで「若い力」に掲載されたものの中から有益と思われる記事を選んで編纂するという形をとった。内容について忌憚のない批判と提言を頂ければ幸である。

なお、編纂にあたっては、フィリピンシニア隊員、富永勝広君のご協力を得たことを記しておきたい。

昭和四十九年三月一日

日本青年海外協力隊事務局

目次

まえがき

隊員とともに、幸福とは何か？を考える	伴正一	7
人間性に対する信頼	柏谷甲一	12
常識	丸山静雄	21
お雇い外人の記録	平川祐弘	24
技術協力に先立つもの	高橋 彰	49
経済発展と人間の原点	深海博明	70

“現地” 適応について	中根千枝	95
援助の仕組み	伴 正一	109
一 援助の哲学		109
二 資金協力について		130
三 技術協力について		155
日本の進路と協力隊	衛藤 滝吉	190
執筆者紹介・収録記事発表時期		206

アジアの路地

序 詩

その一

アジアの路地
路地に
無尽のあかりが
射してくるとき
わが思いは終る

その二

わたしは路地が好きだ
始めて訪れた町を
路地から
路地へと歩く
ただしく生きる人たちの
貧しい暮しの
においをかぎながら

その三

路地は
どこもごみごみしている
でもそこには
虚飾がない
路地は
どこもさわがしい
でもそこには
悪意がない

坂村真民詩集より

隊員とともに、幸福とは何か？を考える

伴 正 一

青年協力隊の事業を、私は「人間交流」の世界で捉えたい。そして、協力隊は「深み」と「広がり」を、二つながら持ち合わせる人間交流であると思う。

人間交流といえ、これまでは、学者・文化人の交流とか、留学生の交換とかがその中心となっていた。私も、それはそれでまことにけっこうなことだと考える。さらに、「青年の船」などで、日本の青年たちが海外に出て、たとえ短期間であれ、外国の青年たちと接触することは、とりもなおさず、お互いがお互いを知り、ともに「開眼」する機会を得ることであり、たいへん歓迎すべきことであると考える。

しかし、いくらか手前みそになるようではあるが、それらに比べて、協力隊には一段と「深み」があり、かつ「広がり」がありうるように思われる。協力隊事業の持つ「深み」の第一は、協力隊の隊員が各国で民衆と接触するところにある。開発途上国で、その国の民衆と接触するということは、一般の人間交流のプログラムではとうてい考えられないことである。かりに考えられたとしても、現実には実現不可能なことだ。

「深み」の第二は、協力隊が開発途上国の民衆と交流するのは、民衆の現実の生活の中であるということにある。たまたまパーティなどで、彼らといっしょにメシを食うとかいっしょにキャンプするとかといった、いわば「世

間離れ」した、リラックス状態での交流とはわけが違ふ。

次に、協力隊事業では、その他の人間交流にはみられないほどの「広がり」をもった交流が可能である。つまり、この事業が発展していけばありとあらゆる職業分野で人間交流ができることになる。しかも、仕事をともにし、年期を入れた交流が可能になる。

こういうと、あるいは、「それは一般の技術協力とて同じことではないか？」という声も出よう。私もむろん、一般の技術協力も「心」でやらねばならぬと思う。だが、「相手の国の民衆の中へ飛び込め」とは、口では簡単にいえても、実行となるとなかなかむずかしいことである。それには何よりも「やわらかい心」と「たくましい体」が必要である。いいかえれば「若さ」が必要なのだ。それがあればこそ、隊員たちは現地で奥地へ奥地へと踏み入り、熱帯の暑さと闘い、風土病と闘い、厳しい生活環境に耐えて、その国の民衆との人間交流を可能にするのである。

以上が、青年協力隊についての私の認識である。次に、若干視点を變えて、現在、日本が世界の中で置かれている「立場」について考えてみよう。どの国でもそうだが、とりわけ日本と日本人は、弱いとか貧しいとか自らが困難に直面したときには、それらの問題に果敢に、適切に対処して、それをうまく乗り切ってきた。幕末しかり、戦後しかり、である。

ところが、その反面、日本人は世界中でもっとも「思いあがり」や「やすい民族である」と私は思う。そして日本人が思いあがったとき、必ず大失敗をしかしている。歴史的にみれば、富国強兵策をとって日露戦争に勝ったあたりまではよかったが、その勝利に思いあがって、その後は武力を悪用しだした。そして、いまや、わが国は自由主義陣営で第二位という強大な経済力をもつようになった。ある人は「武力を貯えた日露戦争直後の日本と、世界有数の経済力

をつけた現在の日本とが、非常によく似ている」という。

このへんが日本が再びミスをしやすい落とし穴、いかえれば、このへんで日本は再び失敗をしでかす危険性がある、ということであろう。

とにかく、日本人の思いあがりには歴史的にみてもこわい。だが、哲学者や評論家がいくら口をすっぱくして「思いあがりをやめよ」と説いても、いまのようなわが国の状況では、実感というか切実感を伴いにくい。だから、日本人はこのへんでいまだ一度、アジアの問題、さらに広く開発途上国の問題といった、人類が直面している問題を、自ら実感できるような体験を持つことが必要である。そうした体験を通じて、それらの国々の民衆の問題をまず理解し、さらに、そうした問題を解決するためならかの行動を起こし、それらの国々の民衆に手を貸すことが必要だ。理解したうえで行動が不可欠となってくる。

しかし、開発途上国にかかわる諸問題の場合、その当の国々でも、それらの問題の所在を自覚しているのは、一部の指導的な少数者だけで、一般民衆はまだそれらの諸問題の解決に向かって、自ら奮起するような段階にはないのであるまいか。そこに、開発途上国問題の解決のむずかしさがある。そうした困難な仕事に日本人が力を貸し、それらを一步一步解決していくプロセスで、日本人は初めて、「思いあがってはならない」ということを、その体で感じ取ることができるはずである。そして、その「体得」こそ、わが国が危険な方向に進むのを阻止する有効な力となりうるものだと思う。協力隊の仕事は、まさに、開発途上国を理解し、力を貸すことにはかならない。

アメリカのピース・コー（平和部隊）を創設したケネディは、かつて「フロンティア・スピリットを失った民族は衰亡する」といった。平和と繁栄——これは人類の願いであるが、それが長く続くと、それに対するなんらかの対処

方針をもたないかぎり、人間は逆に、それによって墮落する。人間はつねにより困難なものに挑みかかり、困難にチャレンジしていかなければ、その精神力に弛みが出る。それと同様に民族も、つねに試練を求め、自らを鍛えていかなければならない。

私は仏教徒ではないが、仏教でいう「大我の世界」なる言葉が大変好きである。その言葉の意味は、儒教の「修身齊家治國平天下」と同じで、まず身のまわりから固めて、幸福観が次第に拡大し、ついには人類の幸福が自分の幸福となる、といった境地だと理解している。そして、小我から大我に拡大していく過程は、つまり自己完成の過程であり、そこには幾多の困難がつきまとう。物的幸福も大切だが、それだけに満足せず、つねにより高い、より大きなものを求めて修練しているとき、人間は個人でも民族でも、もっともはつらつと生きることができると思う。

卑近な例をひくと、碁を打つにしても、いきなり大先生と打つたのでは歯がたたない。これは無理というものである。ある程度自分より強い相手と打っているとき、一番張りがある。そして相手を打ち負かしたとき、その苦心が報いられ、喜びがある。が、自分が相手より強くなったあとまでも、その相手と打ち続けているのでは、勝ってもおもしろくない。さらに強い相手に挑戦しないかぎり、また、そのために苦しい修練を積んでいかないと、次の喜びは生まれないだろう。

そうした意味で、何が幸福かということについて、私は若い隊員たちといっしょに考えてみたいと思っている。西洋のウイズダムと東洋の叢智を結合して。

協力隊員は、より困難なものに挑み、試練を求めて開闢途上国に出ていくわけであり、隊員個人にとっても、日本という国、民族にとってもきわめて意義のあることだと思う。こういうと、「協力隊は日本のためにあるのではない

か？」と受け取る向きもあろう。だが、そもそも援助というものはパートナーシップである。相手国にとってひじょうに有益であると同時に、そのことが日本にとってもまたきわめて有意義であるという関係がパートナーシップである。そういうものでなくては長続きしないはずであり、なにも恥じることはない。

そして最後に一言。失敗を恐れてはならない。「完全主義」はえてして人間を退嬰（えい）的にする。大事に挑むにあたっては、勇気をもって決意し、慎重に思慮工夫して、その実行にあたればよい。最善を尽くした上での失敗なら、もって「瞑すべし」である。

人間性に対する信頼

柏谷甲一

(一)

「生まれてきてよかった」というにじみでる歓喜は、命をかけた献身の中にこそ生まれるのだ。しかし、その前に厳しい孤独の待ちがある。この「時の幅」にじっと耐えて、打ち込みの場をはっきりと見定める「待ち」の中にこそ、献身の力は次第に熟してくるのだ。

個人においてそうであるように、民族においても、國家においても同じである。この「待ち」を免除してくれるような飛び越えは、見せかけの発展であり、内からの崩れは必然である。この「待ち」の孤独を共に分かち与う愛情こそは、発展の根を養う力なのだ。協力とは、汗を流して働く前に、心を砕いて共に待つ事なのだ。人間として、一人一人が、そしてまた民族として、國家として、全員が全力投球できるその日のために――。ここが大切なのだ。

自分は全力投球を樂しみに行くのではない。「生まれてよよかった」というあの歓喜が沸き上がってくるのは、この孤独の「待ち」を戦い抜いた時にのみ、与えられる栄冠であることを、出発に当って、くり返しくり返し確認しよう。(出発前夜)

(二)

協力隊が発足して二年、私がこの南の国に来て二カ月、この時に当って、一つの事を確認した。いま、現地の協力隊員に一番必要なのは生きた言葉である。つまり、この青年達の中にひそむ「若い力」を生き生きと引き出してくれるような生きた言葉。——この言葉は青年達をおだてたり、ご機嫌をとったりするような甘い言葉ではない。それはむしろ、彼らを叱責するような厳しさをもってよいのである。それは、青年達が自らの心の中に感じながら、そして、それを何とかして表現しようと悶えながら、どうしても表現しえなかったことを、はっきり語ってくれるような言葉なのである。

先日、この地に三十五名の新しい隊員を迎えた。彼らの到着と、その後の生活のための沢山の事務や手続きを必要とした。それらの、いわゆる雑務のために奔走しながら、その中で私が一番必要としているものは、このような雑務をしてくれる世話人ではなく、あの生きた言葉を一人一人の心に語ってくれるような友であるという事であった。これから二年、この青年達と共に、私もこの地に全精根を傾けて生き抜こうと思う。そして、彼らが日常の生活と仕事において、その若い力を十分發揮できるような態勢を作るための雑務において、労をいとうてはならないと思う。しかし、一番大切な事は、その事ではないのだ。一番大切な事は、彼ら一人一人の心にひそんでいる、あのエネルギーの源泉を発掘し発掘させるような生きた言葉を、私自らの内と彼らとの交わりの中に深めていくことなのだ。

(三)

なぜ君は、協力隊を志願したか。外国を見たいというような観光主義や、何でも見てやろうというようなスリルをともなう好奇心や、あるいは、自分の将来のために一稼ぎしようというような出稼ぎ根性や、一旗あげてやろうというような権力欲や功名心が、志願の動機に含まれていたとしても、ただちに非難してはならない。もしそれが志願の第一目的や唯一の動機でさえなければ――。

人間は、どんなに純粋でありたいと望んでも、いつもこのような様々な混りものが、その心に忍び込んでくるものである。このような不純物が全く含まれていないような心境を、はじめから青年たちに求めることは、人間性を無視したものである。

大切なことは、その青年達が協力隊に志願し、訓練を受け、現地に派遣され、そこで生活するうちに次第に純化されていくかどうかという方向である。例えば、ある隊員が山間の村に配置されたとする。彼は情熱を持って仕事に献身しなかった。しかし、なかなかその場が与えられなかった。彼の心には次第に焦燥感が湧いてきた。一体、自分は何のためにここに来たのか、このような無為の生活は、何の意味もない。さあどうしようか。生活費は、日々の手当てで余りがあるのだから、何もあわてる必要はない。適当にレポートだけを出しておいて、あとはうまくやってゆこう――そしてそこに二つの脱線がある。

一つはその耐えがたい孤独を酒色でまぎらわせ、あるいは、日本人部落でうっぶんばらしをすることである。もう一つの脱線は、目的のすり替えである。つまり、協力隊の目的を離れて、私的な目的にすり替えることである。例え

ば、語学の勉強をするとか、各地を旅行して見聞をひろめるとか。この方は表面的にはまじめであり、崩れていないようであるが、しかし、前者と同じように、根本的に脱線している。なぜならば、そこにあるのは、帰国後の生活の基礎作りという目的にむかって、すべては計算されているからである。現地生活は、結局のところ、帰国準備にすぎなかったからである。

恐ろしいのはこのような、現地に來てからの方向性の歪みである。このような不幸が起らぬために、国内において十二分に訓練されることが必要であると共に、一人一人が何のためにという協力隊志願の動機について、厳しく自らを戒めなければならない。

さて、協力隊そのものの目的と、なぜ自分が協力隊を志願したかという一人一人の目的とが、日々に、現地において、一つに結びついてゆくような指導が必要である。そこにも生きた言葉が求められているのだ。

(四)

生きた言葉とは一体何だろうか。

この二カ月の体験を通じて、もう一つの事が、ますます自分にはっきりしてきたように思われる。それは結局、人間は孤独という事に苦しんでいるということである。山間で一人働いている隊員がマニラに上京して、自分をたずね、あの村の人達は貧乏だが貧しくないといった言葉を思い出す。その村は、貧乏であるけれども、しかし、ここには、本当に信頼できる仲間がいるから孤独ではないという意味で、彼らは貧しくないのだ。

地位や富、すべてを失っても、いや、そういう失意の時にこそ、自分のところに飛んできて「俺はいつもいつもお

まえの友であることを誇りに思っているんだ」と言ってくれような、そういう人と共に住むとき、貧乏でも貧しくないようだ。その村は、貧乏であるからこそ、貧しくないのかもしれない。

人間というものは、結局、騙し合い、傷つけあってゆくものなのか。それとも、人間は、本当に一致し、和解し、信頼しあえるものなのか。ここに今の時代の人間の運命がかかっている。その人の前なら、安心しきって裸になれるような全人格的愛の交わりの相手を、人は誰でも求めているのだ。そういう誰かと出会うか否かということが、その人生の幸福を決定する。単に私生活の部分においてのみではなく、公生活の面においても。

この新しい活路こそ、明日の日本の運命を決する重大点である。つまり、ある学者の言葉をもって言えば、裏文化的な——茶道、華道、和歌、俳諧というような私生活の中にス根をはって、そこに孤独を慰めるような日本人の性格を、表文化的な、つまり、政治、経済、社会を含む公の世界の革新の中に根をはって、そこに一人一人が孤独を乗り越え、人間としての深い充足を覚えられるような新しい文化を創造することである。つまり、われわれが家に帰って、マイホームの中だけに人間的慰めを求めるのではなく、公の舞台の上に信頼する同志を持つことである。このようにな点で、協力隊は偉大な使命をもっているといえるであろう。

なぜならば、技術を通じて社会、経済、政治を含む表舞台に挑戦しながらそれでいて、求めている決定的な事は、心と心との触れあいであり、国境を越えた国民と国民、民族と民族との和解であるからである。つまり、公の舞台の上で、しかも、国際的な場において、人間というものが騙し合い、殺し合う仲ではなくて、理解し、助けあえる仲であることを証するのである。そして、そこに人間性の勝利をうたいたいのである。そして、そのような体験の中にこそ、人間に生まれてきて良かったという、自分自身の生きがいを見出し、そこにこそ、本当の意味での、あの孤独の

克服があることを証するのである。したがって、協力隊が南の国の山の中の小さな村の中で、何人かの人との間に、いや、たった一人との間においても、心の対話が可能であることを本当に証してくれば成功したのである。その人自身の私的な、そして、協力隊としての公的な両方の成功がある。

われわれは Cooperation Volunteers であって Technical Assistant ではないのである。もちろん、そのテクニクにおいて、どこにでも通ずるような高さと熟練とを持つことが要求されている。これは前提である。しかし、前提は目的ではない。そういう前提を道具として使いながら、海を隔てた、かつては殺しあった、憎しみあった国民と国民との間に、真の和解が可能だということを証することが目的なのである。

つまり、一言にしていえば、世界的な公の舞台の上で、人間信頼の復活ということを証したいのである。そこに一人一人、そして、全人類の希望がかかっていることをわれわれは自覚したのである。しかし現実には厳しい。

隊員が現場に配属されたその晩に、トランジスターが失くなるかもしれない。そして、やっと相手の心を聞いて話しかけたとき、その言葉の内容は、カメラがほしいということかもしれない。あるいは、約束の職場に着いたところ、何一つ準備なく、むしろ、不信の念で、何しに來たと玄関払いを食わされるかもしれない。しかし、そういうことに挫けてはならない。その孤独を乗り越えて、人間の心の奥底にある一番深い部分は、信頼にあたいするものなのだ、という信仰をもって、それを発掘するまで、われわれは前進するのである。われわれはそこにすべてをかけているのである。なぜならば、この事実がないとすれば、人間は騙しあうのが当然だということになるのである。

そして、結局、一人一人は、金か、地位か、名声か、あるいは、享樂の奴隷となって満たせば満たすほど、飢えてくる動物の闘争に追いたてられ、同時に、やるかたない深い孤独が一人一人の心と人間の社会を支配するのである。

だから、協力隊員の青年は、いつもいつも、何を指して来たかということを考えなければならぬ。そして、その目的がどれほど困難であるかということを経験すればするほど、どれほど大切なことであるかということを実感しなければならぬ。なぜなら、それは結局、人間性そのものの価値を決める程の重大なことであるのだから。

協力隊は公の舞台の上で人間信頼の復活を目指すのである。そして、そこに、全人類の運命とこれからの日本の大きな方向性がかかっているのである。しかし、だからといって力んではならない。一人一人は弱い若者であって、休息をとり、憩いを学ばなければならない。ただそのやり方が、いつも現地の人との間に心の通うような方法でなければならぬ。だから、日本人部落に逃避を求めてはならない。

また、孤独を酒色でごまかしたり、目的をすりかえて、勝手な安定を求めてはならない。そうではなくて、どんな田舎の、どんな小さな村の、どんな小さな家庭の中でも、たった一人の労働者としても、心の言葉が通うような関係を作ること、誠意をもって、本当に心を開いて話していけば、いつかは通じる時がくるという信念を持つこと、この人間性に対する信頼こそは、私達一人一人の、また協力隊全体の生命である。そして、そのような愛情の交わりの中において、私達の心は、もっとも正しく、おおらかに満たされてゆくにちがいない。

だから二年の間、あちらこちらを動き回る必要はない。一カ所でよいのだ。そこで一人の友を作れば目的を果したのである。だから、二年たった時に、隊員の心の中に次のような確信が深まっていれば成功したのである。

「この二年を通じて何を具体的に学んだか、何を具体的にしたかと聞かれると返答に窮する。また、帰国後、それがどのように役立つかとたずねられても返答に窮する。就職も、まだはつきりせず、これからどのような人生航路が待っているのか、とんと目鼻がつかない。しかし、自分は、この二年を決して悔いないであろう。なぜならば、どんな

職業についても、どんな場所に行っても、そこに通じるような一つの人間としての生きかたを学ぶことができたからだ。つまり、誰しもが求めている人間の幸福というのは、本当に信じる人間と出会うことであり、それは、様々な困難を乗り越え、よりよい社会を建設してゆく戦いの中に与えられるということを学んだからである。この二年間、自分には確かに Volunteer として苦難の道を自ら選んだのだった。そして、そこに本当の Cooperation という、技術を通じて人間性そのものに通じる道のあることを学んだ」と。

もし、隊員がこのような感想をもって現地を去るならば、おそらく、現地の人々も隊員について次のような感想をもつであろう。それは、先日、マニラの新聞で読んだ一人のアメリカ人に対する追悼文の内容である。彼は、マニラの郊外にある国際稲作研究所で、長い努力の末、ある有名なミラクルライス、奇跡の米を作りあげた人物であり、フリビンのみならず、世界の飢饉に対して、多くの功績を残した恩人である。彼が昨年末、この世を去った。

「この人物について、われわれがまちがいないといえることが一つある。それは、この人が来てくれた所は、この人が来てくれたことによって、この人がいなくなった時より、すべてが良くなったということである」と。

この追悼文で、ミラクルライスについての言葉は、ほとんどでてこなかった。というのは、何も、彼のした技術的功績が小さかったことではない。しかし、その点に関して、さらに、やがて優れた優良品種が生まれる。また、収穫は多くても味が悪いとか、様々な批判がそこに残るであろう。したがって、この問題について、この追悼文では何も語っていなかった。ただ言っていたことは一つのことである。「この人が来てくれたことによってすべてが良くなった」と。

だから、隊員がいよいよ任期を終えて現地を去る時、現地の人達が「この日本人隊員が来てくれたことによって、

とれだけの収穫がふえたかというよりも、この村全体が良くなった」という印象が残った時に、協力隊は、成功したのである。このことなしに、たとえ収穫が百倍、千倍になっても、協力隊は、失敗したということを銘記しなければならぬ。マスコミが、ある時は平和部隊をたたえ、ある時は、誹謗するであろう。そういうことに決して感
わされてはならない。

われわれのしていることは、天下暗れて正しいことであり、だからこそ、それはまた、たとえようもなく苦しいことである。しかし、協力隊の諸君よ、どんなに厳しい現実にぶつかっても、人間性に対する信頼というものを持ちつづけよう。なぜならば、それなしには、人間そのものの存在が、その存在を失うからである。

常識

丸山 静雄

人と人が理解しあうのは、ほんとにむずかしいことだと思う。

ところかわれば、品かわるで、環境の相違は、それだけ人間相互の理解を困難にする。他人との間は、いうまでもなく、親戚、友人にしてもそうだし、親子、兄弟、夫婦の間柄についても、はたしてどこまで理解しえているか疑わしいような気がする。理解していたと思うことも、ほんの皮相にすぎないことがあるうし、案外、誤解や、思いすごしであった場合もありうる。そんな風に考えてゆくと、人間関係なんて、ずい分、危なっかしいものだとも思う。

疑問を投げかけて、究明してゆくと、確実なものは、ほとんど何一つない。いたるところに食い違いや、矛盾が見られる。それでいて、わたしたちの周辺を見ると、対人関係が、あまり大きな混乱もなく維持されている。それが秩序というものであろう。それを支えているのが法である。

法は力によって強制される。その代表的なものが国家権力で、国家が力をもって強制するがゆえに法は生きてくる。しかし法が通用するのは、力の裏づけを持っているからばかりではない。力だけであったならば、一時的には強制しえても、そうした状態は長くつづかない。いつかは破綻する。

法が恒常的な生命と価値を持つのは、やはり人間を従わせる、人間の行動を規制するだけの正しいもの、筋道の通

ったもの、普遍的なものが法の中にあるからであろう。それが常識である。

常識は人間生活の支柱であり、したがって国家と国家、民族と民族とを結びつけ、それを定着させる最も大きな礎石だと思ふ。

常識は最も平凡にして、それゆえにこそ、だれにでも、いつでも、どこにでも通ずる、人間の知恵である。常識は、それ自体、初めから完成された形で、わたしたちの前にあるのではない。わたしたちの祖先が苦しい試行錯誤の結果、探りあてたものであろう。人間が幾千年、幾万年の経験の中に見出した英知の集積でもある。

それを、わたしたちは血液の中に受けついでくるとともに、教育と訓練によって育ててきた。常識は、だれでも持っている。しかし人間が生れたときに持っていた常識は一種の本能であって、原始社会の、それに近い。それは教育と訓連の中に、みがかれ、練られて初めて現代社会に適応するものに進化するわけであろう。

教育の意義、訓練の価値は、単に知識や見聞を広め、身体を強健にするだけのものではない。個々の、素朴な常識を、集団社会や、国際社会に適応する幅広い常識に高め、それを実践しうる肉体をつくりあげることであろう。

わたしたちが協力隊の隊員に接するのは選考試験のさいが最初である。その際は、まだ隊員ではなく、隊員志願の応募者にすぎないが、試験をパスし、正式の隊員候補生となり、制服に着かえ、さらに各種の教育、訓練をへたあと、再び接してみると、いつの場合でも驚く。しっかりした心構え、事物の的確な判断、柔軟な適応性、それを支える健康——精神的、肉体的な成長であり、いわば常識の一層の発達である。

もちろん中には混迷を払拭しきれないものもあるだろうし、新しい苦悩の中に、踏みこんでいるものもあるだろう。制服と行動の統一の奥にひそむ分化と多様性に気づかないわけではない。

しかし、ここにいう教育、訓練は懐疑の代りに盲従を強いるものではなく、規格化、単純化を目ざすものでもない。それでは派遣先で、たちまち摩擦や対立をひきおこしてしまふ。

ここで期待されるのは、一つの懐疑が、もう一つの懐疑を生み、それを一つ一つ解決してゆくうちに、総合的な判断力と適応性をつけるような教育、訓練である。すべてのものを一つのものとして決めてしまふのではなく、それぞれの個性を認め、尊重し、平等・共存の意識を育むような教育、訓練であろう。いってみれば常識の普遍化、国際化である。それが徐々に達成されつつあるのに、隊員を見るたびに驚くのである。

お雇い外人の記録

平川祐弘

(一)

ラフカディオ・ハーンは、イギリスのれっきとした家の出の軍医の父親と、ローザというギリシャ人の母親の間に生まれた子供です。ハーンが二歳の時、父母といっしょにイギリスへ引き揚げましたが、ギリシャ生まれの母親はイギリスの生活になじめず、ハーンが四歳の時、ギリシャへ帰ってしまいました。そして父親は再婚します。

そのため、ハーンは家でなんとなしに厄介者になり、十歳のころ、大叔母の世話でフランスのカトリック系の寄宿学校に入れられてしまう。ハーンはその後フランスからもどり、イギリスのカレッジにはいますが、不幸には不幸が重なるもので、遊んでいる最中、左目を負傷し失明してしまいます。

そして一八六六年に父親が死亡し、大叔母も破産して文なしになってしまふ。その後、彼は十九歳の時アメリカへ渡り、さんざん苦勞をします。印刷所の活字拾いや行商のような仕事までしたという噂があるほどです。ともかく二十歳代のハーンはひじょうにみじめだった。しかし三十歳代になって地方新聞の記者になると、フランスでいっしょだったモーパッサンの短編を訳したり、仏領西インド諸島へ旅行して紀行文を書くなど、多少名前も知られるように

なりました。

そして一八九〇年——日本暦の明治二十三年、ハーンが四十歳の時、勤めていたニューヨークの出版社に紀行文を書くつもりで日本へやってきた。

不幸な少年、青年時代を過ごしたハーンですが、そのためどんな性格だったかといえますと、いまある現実から脱出したい——よくいえばロマンチックな人でした。もし、彼がイギリスでエリートコースをまっすぐに進んだ人だったら、極東の、当時十九世紀末でいえば、ひじょうにへんびな感じのする日本へ行こうなどという気は起こさなかったかもしれません。

しかし、逆にそうしたハーンであったればこそ、弱いけれどけなげな人に対してはひじょうに同情心の深い人でした。中学時代、フランスのノルマンディで過ごしたり、アメリカ時代に二年も西インド諸島へ旅するなどして、小さいころから外国の旅にも慣れていましたので、異国へ行っても異国の人びとの不幸を読む術にも長けていました。

日本へ来て半年ほどして松江の尋常中学校に英語の先生の口が見つかり、彼は松江へ行きます。明治時代はいまの大学の数よりも中学校の数が少なく、島根県下でも一枚しかなかったので、中学校でも外人教師がいました。ハーンは岡山から人力車で山陰へ行きます。途中、数多くの峠を越えて、ちょうど八月下旬でしたので盆踊りを見たりして、当時まだ鉄道の敷かれていない松江に着きました。いかにも異国へ来たなあという情感が痛切だったろうと思います。そして、彼はすぐに旅行の第一印象を書き留めておいた。みなさんも外地へ渡ったら、きちんと日記に書き留めておいたほうがいいでしょう。はじめの印象はとても大切なことから。

で、彼は松江に八月三十日に着くと、もう九月二日には籠手田安定という県知事に会っています。そして翌三日か

ら授業を始めた。日本側の受け入れ体制がすばらしくいい。明治二十三年のころの日本は、西洋を範として文明開化をしようという空気が全国にみなぎっていたので、お雇い外人をひじょうに手厚くもてなしたのです。当時、外国人は日本人の先生の六倍ほどの給料をもらっていたが、日本側はたんに給料の面だけでなく、気までひじょうにつかいました。

いま松江に行きますと小泉八雲記念館がありますが、そこにはハーンが病気になる時、籠手田知事のお嬢さんが見舞いに持って来たという鶯の鳥籠が飾ってあります。当時の日本はお雇い外人にじゅうぶんに働いてもらうために、なにかと配慮した時代であったといえます。

しかし思うに、日本は奈良時代の昔から朝鮮半島や中国から学者や技術者を招く伝統があった。徳川時代は鎖国していたといいますが、たとえば明朝の一臣シュンスイを水戸へ招いたり、鎖国で西洋人と接触することを禁じられていたのに、長崎ではシーボルトを弟子たちがひじょうに大切にしたというような話がたくさんあります。

ところが一方徳川時代の日本は、当時世界でもっとも教育が進んだ国の一つだったので。一番文盲率が少なく教育熱心な国であった。だから先生を敬うという伝統ができあがっていました。それだからこそハーンも大切にされたのだらうと思います。

彼はアメリカでは文なしで、社会的な地位も低く——じつは背丈も低かったが——片方の目はけがをした時に目が飛び出し、ひじょうに近眼でした。アメリカでは結婚もできなかった。

それが意外にも日本の田舎、松江に来たら、知事をはじめみんながヘルン先生といって大事にしてくれる。それでハーンもうれしかったのだらうと思う。天分豊かな人でしたが、中学校の先生としてもじつによく教えています。そ

して生徒もいっしょうけんめい勉強をした。県下の秀才ばかりが集まっていたから。またハーンは成績優秀な生徒がいると、自腹を切つて本を買いそれを賞として与えている。教えた時間数も多かった。それに彼はなかなかの知恵者で、生徒が書いた英作文を彼の日本研究の材料としても使っています。

彼が松江にいたのは一年二カ月とごく短い期間でしたが、松江に着いた二週間あとにはもう出雲大社へ出かけたり、中学の二十九歳の優秀な教頭、西田氏に通訳してもらつて町の彫刻家に会つたり、時間のむだのない充実した生活を送っています。

しかし外国へ行つて、こう整然とした受け入れ体制があると考えたらとんでもないことです。日本でも文明開化を目ざす明治時代であつたればこそありえたことなので、いま外人講師が日本の大学に来て、これだけ丁寧に迎えて親切に扱ってくれるところはないと思う。いかに明治時代の日本が西洋文明に憧れ、それにハーンも心を動かされたかということだろうと思います。

ハーンは十九世紀末に日本に来て、当時のアメリカと比べて日本をどう感じたかといいますと、「ああ日本には文化がある」と思った。普通の人の感覚とはちょっと逆だろうと思うのですが。

しかし松江はご承知のように、西に宍道湖、東に大橋川、北に日本海があります。ひじょうに立地条件の恵まれた地で、海の物も陸の物もたくさんある所です。だから食事もおいしい。食事も文化のうちですし、それに松江は水がいいから徳川時代からお茶が盛んであつた。お茶が盛んだとお茶に添える菓子もおいしい。女の人も礼儀作法を心得ている。そうした日常生活の立ち居ふるまいが文化の現われですから、ハーンはその文化に感じやすかつた。ここはいい土地だなあと思つたハーンの直感、やはり当たつていたと思います。

日本でも出雲の国は、古事記にも出てくるように、一番早くから開けた土地です。ハーンは日本にやって来る前に、アメリカでチェンバレンという人が英訳した古事記を読んでいた。みなさんは外地へ行かれるが、その行き先の土地の神話などを読んで行かれるとなにかと参考になると思います。

しかし、ハーンが古事記にひかれたのには特別な理由がありました。彼は小さいころ、ギリシヤ人の母と生き別れとなり、不幸な子供時代を送ったのでまぶたの母のいる国、ギリシヤが恋しい。そして、ハーンはフランスのカトリック学校時代、その生活になじめず、キリスト教にもヨーロッパ近代文明にも反発を覚えた。そうすると、自分の魂の故郷をどこかに求めなくてはならない。すると、自分の魂の故郷が母親の国ギリシヤと重なるわけです。ギリシヤは昔、ゼウスの神、アポロンの神などの神話がありましたが、いまのギリシヤにはそうした神を信じている人は一人もいません。ところがどうでしょう、日本には神話時代の神道がいまでも生きていますし、一八九〇年にもむろん生きていた。

ご承知のように、出雲は神々の国です。陰暦十月を神無月といって、全国各地の八百万（やおよろず）の神々が十月になると出雲大社に集まってきました。その月を出雲地方では、神々がみな出雲の国へ集まってくるので神在月（かみありつき）と呼んでいます。出雲へ行くと神さまが生きているという感じがしてくる。だからハーンには、自分の母親や母なる国ギリシヤを日本に置き換えたようなところがあったのだからと思います。

私が中学一年のころの国語の教科書の中に、ハーンが松江の朝を描いた文章がありました。日本人が読んでもジンと感動するようなとてもすばらしい描写でした。

朝、大地が脈を打っているような音がして目がさめる。それは米つきの音です。町の人びとが大橋川を渡り、川で顔を洗い、口をすすぎ、お天道さまに向かって手をたたきおじぎをする。そして橋の上をげたをカランコロンと鳴らしながら働きに出て行く。

日常のなんでもないことが書いてありますが、明治二十年代の日本の庶民の日常生活を一番見事に描いたのは、日本人の作家ではなく、このラフカディオ・ハーンだといわれています。そうした生活は、当時の日本人の目にはなんでもないあたりまえのことで、誰も記録を書こうなどとは思わなかったのだろうと思います。それが西洋から来たハーンの目にはとても新鮮に映じた。その文章をいま私たちが読んで、古い日本が思い出されてきてもなつかしい気がします。松江で新しい生活にはいつて人の心のあたたかさに触れたハーンは、日本人の女と結婚します。四十七歳のハーンは、二十三歳の出もどりの士族の娘、小泉節子と同棲しました。

その節子が夫の思い出を書いたものがあります。要するに、貧乏士族の娘で、まわりがすすめるし、自分も出もどりだし、やむをえず外人さんの奥さんになった。はじめのころは、二人の間に言葉が通じないものだから、ひじょうにけったいな空気であったようです。ところがいつ節子が夫に愛情を覚えたかといえますと、ある雨の日、松江で霪が雨に濡れているのをハーンが見て、かわいそうだといって懐の中に入れて連れてきた。その時に、この人はやさしい人だなあと愛情を覚えたと書いています。

とかく、ハーンのように不幸な子供時代を過ごした人の中には、かたくなな人と、幼児時代の不幸な体験ゆえに、逆に、弱い者、かわいそうな人に同情深い心やさしい人が出てきます。彼は後者だったのでしょう。もっとも、ハ

ーンは心やさしさと気むずかしさが表裏をなしているような人でしたが。

ハーンが住んでいた家がいまでも松江に残っていますが、庭のこともよく書いています。その庭に出てくる蛇もいじめてはいけなないと、食べていたピフテキの肉片を蛇にやったという話が残っています。はじめのころ神道に興味を持ったハーンでしたが、あとでは、生きとし生ける物を大事にする仏教が、日本人の心懐にどんな感化を与えたかという面にも注意を払うようになりました。それは自分のそうした気持と相通ずるものがあつたからでしょう。

ハーンが自分の長男が生まれた時にどんなことをいっているかといいますと、自分の子供の母親を大事にしない男の気持がわからないといっています。自分の奥さんを大事にするという意味ではないですよ。どういふことかといえば、自分の血を分けた子供をいとおしく思わない父親はいないはずだし、その子の母親がたとえ白色人種の自分と違う黄色人種の女であっても、それを大切にしない法はないという論理です。それはハーンにとり痛切なことでしたから。

なぜかといいますと、ハーンの父親はイギリスの軍医としてギリシャへ行きました。当時のギリシャは独立したばかりの低開発国でした。そこで現地の島の娘といっしょになり、その間に自分が生まれました。そのギリシャの島生まれの女はイギリスの社交生活になじめず、結局、追われるようにギリシャへ帰ってしまいました。自分の父親に捨てられたわけです。ハーンは自分のまぶたの母を慕っていますから、父親のそうしたしうちが許せない。そして、自分が極東の島国へ来て異国の妻をめぐり子供も生まれました。その時にまぶたの母、気の毒な母親を思うがゆえに、自分の妻を大切にしようと思ったのだらうと思います。

ハーンは後に妻のため子供のために日本に帰化しました。日本が好きになったから帰化したのだというのは日本人

の手前勝手な解釈で、直接的には自分と妻子のために帰化したのです。妻方が小泉姓だったので姓を小泉としました。ご承知のとおり、出雲はスサノオノミコトが八岐大蛇を退治してアシナヅチ、テナヅチの娘クシナダヒメを須賀宮という清々しい土地でめとりたもうた伝説の地です。古事記に次のような神歌が載っています。

八雲たつ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を

出雲地方に行きますと雲がムラムラとわき出てきます、湖がありますから。そうした感じのする所に妻をこもらせるために八重垣を作らせているのだ、その八重垣を——という意味です。

日本書紀にもちょっと違った意味で載っています。

八雲たつ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣へ

雲がわいてくる土地に幾重にも囲いをし、その中に自分の女を住まわせている——という意味で、素朴な感動を伝える美しい詩だと思えます。ハーンはその八雲をとり小泉八雲とした。すばらしい名前です。

しかし帰化すると、ハーンは在日西洋人とだんだんソリが合わなくなってきます。現地人と結婚することを、当時のイギリス人は *go native* といって極度に好まなかったから。

そして、日本人と結婚し、日本に帰化して、それでは彼は日本人に愛されたかといいますとそうでもない。「日本

人になったのなら、なにも外人並みの高い給料を払う必要はないだろう」、という声が出てきました。日清戦争に勝ち、日本にナショナルリズムが台頭してきたこともありましたが、そうした声にハーンはひどく傷つけられました。彼はひじょうに傷つきやすい人だったので。

(二)

ハーンは松江には明治二十三年八月から二十四年十一月までの一年二カ月間いて、この地方の取材もほぼ終わったので、チェンバレン教授（東大）の紹介で熊本五高の教授になります。

ハーンにとり、教授の仕事は、要するに生活費を稼ぐための手段で、自分の天職と心得ていたのは文章を書くことでした。ハーンは日本に帰化したといいますが、当時アメリカ第一の雑誌に寄稿していましたが、アングロサクソンの世界、つまり英語世界から断絶していたわけではない。人間、どんなことがあっても、十代後半までに決定されてしまう母国語の世界と絆の断てるものではない。だから、ハーンが精神的なつながりがあったのはやはり英語圏の読者であつたらうと思います。

もっとも、そうした自分の英語圏の読者に物を書くという張りがあつたからこそ、ハーンの日本における生活も充実していたといえます。それだけに日本を見る目も鋭かった。

『停車場にて』という文があります。明治二十六年六月七日のこと——福岡から重要犯人がきょう正午熊本着の汽車で護送されてくる。その男は四年前に熊本の本橋町で強盗にはいり、すぐつかまされたが、警察に連行される途中、巡査のサーベルを奪い巡査を殺して逃げた。そして別人になりすまし、別件の罪で福岡刑務所に服役中、刑事に見破

られてしまった。それで正午熊本着の汽車で護送されてくる——という主旨の物です。ひじょうに短いセンテンスのスピードのある文章で、簡潔に要領よく書いてある。ハーンにはボヘミアンの要素がありました。他面ジャーナリストとしてひじょうにすぐれた才能を持っており、アメリカでは新聞記者をしていました。

テレビも娯楽も少ない時代のことですから、みんなが護送されてくる犯人を見ようとおおぜい駅に押しかけました。ハーンにしても、アメリカの読者にしても、あるいは当時のアメリカ西部劇に出てくるような場面を期待していたかもしれません。熊本の人は松江の人に比べて多少荒っぽいところがありますし、当時のアメリカではリンチが白昼公然と行なわれていた時代でしたから。

だから、こうした時に日本人がどんな怒り方をするかと見ていたら、当てが外れたという。

汽車が駅に着く。カランコロンというけたの小刻みの音、新聞売りやラムネ売りの声がする。改札口の外で五分ほど待っていると、巡査部長に後ろから押されて犯人が現われた。凶悪な顔つきで、頭を垂れ両手を後ろに縛られている。みんながシーンと見守っている。

すると、その巡査部長が「杉原さん／＼杉原さんいますか／＼」と大声でいった。と、（ハーンの）近くにいた小柄なやせた女が、背中に子供を負い「ハイ」といって群衆の中から前に進み出た。殺された巡査の未亡人とその遺児である。巡査が手を振ると人垣が分かれて、その女と子供は犯人と向かい合って立った。

あたりがシーンと静まる。なにか映画の一場面を見ているような感じです。するとその巡査部長がこう話したとい

う。殺された同僚の奥さんに対してでなく、その背中に負われた四歳の子供に、一言一言ゆっくりとはっきりわかるように話したので、外国人であるハーンにもその日本語がわかったという。ハーンのそうした書き方は臨場感を強めています。

「いいかい。この男が四年前にお前のお父さんを殺したんだよ。お前はまだ生まれていなかった。お前はまだお母さんのおなかの中にいた。お前に、お前の愛するお父さんがいないのはこの男のせいなんだよ。さあ見てごらん」
そういって巡査部長は犯人のあごの下に手をぐいと入れ、男の顔を上げさせた。「よく見てごらん。こわがってはいけないよ。つらいだろうが見てごらん」

そういわれて、四歳の子供は母親の肩越しに目を大きく見開き、こわいながらも犯人の目をジッと見つめます。泣きじゃくりながらも、自分の父親を殺した男の顔をまっすぐに見る。群衆もみんな息をつめて見守っている。そしてハーンはつつけます。

子供が泣きじゃくりながら見ていた犯人の顔が急にゆがんだと思うと、手錠がはまっているにもかかわらず、地面にひざまずき、顔を地面にすりつけて、人の心をかきむしるような声でいった。「すみません、坊や。すみません。私がやったのはこわくなって、逃げようと思ってやったんだ。あなたのお父さんが憎くてやったのではない。悪うございました。私は罪の償いに死にます。喜んで死にます。だから坊やかんにんしておくれ」

巡査部長が殺人者を引き起こすと群衆は自然に左右に分かれ、その間を犯人は巡査部長に押されて歩き出した。すると群衆の中からすすり泣きがもれてきたという。ハーンは、自分のすぐそばを通って行く日に焼けた顔の巡査部長の目にも涙が浮かんでいるのを見たと言っています。これは、ハーンが日本人の心を捉えてみたい、描いてみたいと思つて書いた作品です。外国人がこれほど日本人の心をつかんだ物を書くとは……。

みなさんが外地へ行くと、どうしても「日本人とは何か?」、「日本とは何か?」、「日本文化とは?」と、反射的に考え込まざるをえない立場に置かれてしまうと思います。私たちは日本人ですが、日本人だからといって日本のことがわかつているわけではない。特に日本文化について意識的に学んでいるわけではありません。人間、存外に自分のことがわかつていないものです。ですから、外国人に日本のことを聞かれて戸惑うことが多いのです。しかしハーンは、外国人でも、ある意味で日本人よりも日本人の心をよく見、よく捉えていました。そしてそれを表現する筆力を持っていた。明治の日本人の庶民の心をハーンほど見事に書いた人は、日本人の作家にもいませんでした。

この「停車場にて」を日本人が読んでも、割合自然にその光景を思い浮かべることが出来ます。アメリカだと西部劇の場面が想像され、こうしたシーンはなかなかないだろうと思う。この作品には、熊本の民衆がひざまずいて前非を悔いる犯人に感動を深くし、巡査を殺した犯人に対し怒りを燃やすよりも、人間が持つ弱さ、人生のつらさへの悲しみがこめられて描かれています。

ところが、犯人がなぜ突然に顔をゆがめ、地面にひざまずき、前非を悔いで大声をあげて泣いたかというところ、ハーンはこんなふうに説明しています。

要するに、子供の顔を見て、子供にこれがお前のお父さんを殺した犯人の顔だよと対面させられてしまった。その犯人もやはり男で、自分の心の中に父親という潜在感情がある。ハーンも自分の子供が生まれたために父親の特殊な感情があったのかもしれない。そして、その犯人は自分の心の中に潜む父親としての情に動かされて、顔をゆがめて泣き、悲痛な叫びを発したわけです。この犯人は言葉どおりに甘んじて死刑をうけています。

この文章には、正義は曲げることはできないことと同時に、犯人に対する憐れみが描かれています。しかし、日本の作家には酷薄の人が多く、その巡査部長の心の奥に潜む心のやさしさに触れた人はあまりいません。ハーンは明治二十六年ごろの日本の警察官の心の奥にあるやさしさまで描いています。

じつは、この作品を選んだのは私個人の理由があります。私も二十三歳の時に西洋を勉強するためフランスへ行きました。そしてやはり、「日本とは何か？」というところについていろいろと考えさせられる機会がありました。その時に、たまたまフランス語訳のこの『停車場にて』を読んで、とても日本をなつかしく思いました。明治の日本人の心根にうたれ、これだけ日本人の心をつかめたハーンは偉い人だと思ったような次第です。みなさんも外地へ行かれて、その土地の人の心をこれだけつかめたらどんなにすばらしいことでしょう。

しかし、ハーンがこれだけものをつかめたことは、ハーンに物を書く才覚が備わっていたからでしょう。日本人はしばしば誤解して、ハーンがなにか日本のため、日本文化紹介のために日本を書いたのだらうと思っている人が多いのですが、そうではない。あくまでも彼は文学者で、自分のために書いたからいい物が書けたのだらうと思います。人間だれでも、自分自身を生かそうとしない人が、他人のためになにかができることは絶対ないでしょう。ハーンも文学者としてすぐれた物を書こうと思っていたから、立派な作品ができたのだらうと思います。

じつはこの話、ハーンが直接熊本駅の駅で見たように書いていますが、フィクションなのです。丸山という人が調べてあとでわかったことですが。

ハーンは四十歳になって日本に来たわけですが、物を書くことが忙しく、とても日本語を勉強している暇がなかった。奥さんの節子は英語ができないので、この夫婦の間には二人にしか通じない奇妙な日本語ができていました。ハーンはその奥さんに新聞を読んでもらい、そんな時に奥さんがどんな声を出すか、どんな表情をするか、たとえば殺された巡査の奥さんがかわいそうとか、そうした奥さんの声、表情から日本人の反応をうかがい記事にしたようです。小泉節子は貧乏士族出の娘ですから、教養のある人ではありません。本人は晩年、文豪の妻としてひじょうにそのことを気にしていたようですが、いずれにしても、よけいな教養がなかったことがかえってハーンには幸いしました。ハーンの中には日本語が読めないで奥さんや奥さんの父、つまり義父などに話をしてもらってまとめたものです。ハーンが奥さんにいった言葉にこういうのがあります。

「本を見てはいけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」
いろいろな話を奥さんが自分の気持として話してくれないとハーンには面白くない。奥さんはいろいろと本を読みました。それをハーンの前で普通に本を読むように読むとハーンは不満です。奥さんが自分で語るように、主観的な感情を出して、話してもらわないと不満足でした。

これはどういふことかといえますと、ある國民の、上流階級ではなく、民衆の率直な気持を素直に実感するためには、よけいな学問やよけいな教養があるとかえってわからなくなってくる、ということを指したものです。これにつ

いてこんなエピソードがあります。

ある時、ハーンが万葉集の詩のことについて奥さんにたずねたところ、奥さんは答えられず、泣いて自分の無学をわびました。すると、ハーンは黙って奥さんを自分の書架の前に連れて行くと、こういったそうです。

「このたぐさんの自分の本はどうして書いたと思うか。みんなお前が話してくれたおかげではないか。お前の話を聞いて書いたものだ」そして「あなたの学問あるとき物を書けません。あなたの学問のないとき私書けました」と。

みなさんたち外地へ行く人は、むろんいろいろと勉強して行かねばいけませんが、海外で接する人びとは、ごく普通の学問のない民衆であることが多いと思います。こうした一般民衆を、民族学の用語で常民（じょうみん）と呼んでいます。みなさんもこの常民に注目しなければいけない。

それについて、ハーンは『日本人の微笑』の中でこういっている。先の『停車場にて』は現地報告——ルポルタージユの一種だったが、この『日本人の微笑』は一種の日本文化論といえます。彼は日本人とのつきあいの中から「知られざる日本人の面影」も探りました。

どんなことが書いてあるかといいますと——西洋人はこわいような厳肅な顔をしている。それに対し、日本人はいつこうに深刻でなく幸福そうな国民だ。そうした違いが、日本の奥地に三年いて、西洋人と離れて暮らしてみてもやっとなかった——と書いています。

ハーンは日本の奥地で暮らしていて、ひさしぶりに神戸の外人居住地へ出てきた。そこで三年ぶりにイギリス人に会い、英語を聞いて彼は自分で思っていた以上に感動した。イギリス人が話す英語を聞いて。しかしそれよりもハツとしたことがあった。自分といっしょにやって来た妻の節子が、外人をはじめて見てこんなことをいった。

「どうして外人はみなニコリと笑わないのでしょうか。あなたは外人に話しかける時、ニコリしたり、おじぎをしたりするのに。なぜ外人は笑わないのでしょうか。なぜでしょう？」

ハーンは妻にそういわれて、自分が三年の間にずいぶん日本人化していることに気がついた。知らぬ間に日本人化されたことに驚いてギョツとした。そして、文化的伝統を異にする二つの民族の間では、たがいに理解することはむずかしいものだと思つたといっています。

みなさんも外地へ渡るとこの種の体験を必ず味わうことでしょうが、注意していただきたい。で、ハーンはこんなことを書いています。

二つの異なる民族は、いとも自然に、しかもまったく誤って、相手側の態度や作法を自分自身の態度や作法をもとにして判断する。

イギリス人は日本人がニヤニヤしていると思つている。で、日本人は、西洋人はみな怒つたような顔をしていると思つている。すると西洋人は、日本人がニコニコしているのはあれは不誠実な証拠だと思つる。そんなふうなたがいになんでもないことで誤解が生じるわけです。イギリス人は深刻な顔をしているのに、日本人はなぜ微笑を浮かべているのかということについて、ハーンはこんな例を引いています。

横浜在留の外国人が山の手から馬車に乗って降りてきたところ、反対方向から空の人力車を引いてやってきた車

夫が、道路の通行側を間違え右側へ渡ろうとして、外人が乗った馬の肩に車の棍棒をぶっつけて馬を傷つけてしまった。そして馬から血が流れた。

それを見て思わずカーッとした外人は、持っていたムチで車夫の頭をひっぱたいてしまった。ところが、その頭をたたかれた車夫は外人の顔を見てニコリと笑い、やおらおじぎをした。その外人は自分がたたいたのだから当然相手が怒ると思っていたら、相手は怒るところかニコリと笑っておじぎまでしたものだから、なんだか自分が馬鹿にされたようで、打ちのめされたような強いショックを受けた。そして先ほどの怒りもすっかり消えてしまった。

その外人は、この礼儀正しい日本人の微笑について、日本の奥地で長いこと暮らしておられるハーンさんはどう思いますか、と聞いたそうです。

これについてハーンはこういっています。

「この日本人の微笑を理解するためには、多少とも日本の古くからの自然な民衆の生活の中にはいりこまないといけない。近代化された上流階級の人びとからは何も学べない」

上流階級は、アジアでもアフリカでも、西洋の影響を強く受けています。むしろ、そうした指導者階級を理解することも大切ですが、それとは違う一般大衆——常民の生活の中にはいり込み理解することが青年海外協力隊の場合、とくに必要なことでしょう。

(三)

私が明治のお雇い外人の中でラフカディオ・ハーンをとりあげたのは、彼がその常民に深く接し日本人の心を捉えていたからです。

明治の日本にはおおぜいのお雇い外人が来しました。有名なドイツ人医者ベルツという人は、日本の上流階級と接する機会が多く、名医でもあった。東大医学部の教授だったので、日本政府の高官、各国大使など偉い人が病気になると呼ばれてみに行きました。ベルツ日記はその意味で当時の上流階級の人びとを知るには大変興味深いものですが、ほとんど一般民衆の生活には触れていない。

しかし、ハーンは、その土地の風俗習慣を理解するために、西洋化された上流階級ではなく、一般民衆の生活の中へはいりました。こうしたことは、ハーンの時代もいまも変わらないことだろうと思います。ハーンの言葉は民族理解の原則のようなことを語っているといえます。

喜怒哀楽の情は、言葉によらずとも理解できます。外国で悪口をいって相手方に通ずるものである。しかし交際のしかたは文化圏によってひじょうに違って、地球上にはいろいろな民族がいますが、日本人と通じやすい民族は朝鮮です。昔、日本の教育をうけた人がいるからというのではなく、感情の構造が似ているからです。

次に、どこがグループになりやすいかといえば、やはり儒教文化圏、儒教教育——つまり礼儀作法とか、親に孝とかいうなごりのある国です。日本でも、朝鮮でも、中国でも、ベトナムでも同じ文化圏だったので通じやすい。

その次に日本人と通じやすい所は仏教文化圏です。タイ、ビルマなどがそれに当たります。ところが、インドやそ

の向こうの回教圏へ行くと、日本人には非常にわかりにくい。むしろ欧米人のほうが日本人にはわかりいいともいえる。

で、言葉が通じない場合にはどうするかといいますと、相手の顔色を見て判断するしかない。明治時代に日本へ来た西洋人たちも、日本人の顔色を見て判断したろうと思います。ハーンはその日本人の微笑について解き明かしています。

教育のしかたは日本と西洋とは違います。文化を牧畜文化と農耕文化に分けますと、西洋は牧畜文化圏です。牧畜の盛んな地域は羊、牛などを育てていますと、子供の育て方もそれに類似したやり方をする面がでてきます。だから、子供をしつけるのにも動物と同じようにムチを使います。

日本では動物は育てなかった。昔は大部分が百姓で農耕をしていた。稲作、つまり稲をしつけていた。稲のしつけは田植えです。子供をしつけるといいますが、じつはそのしつけは稲をしつけることから出てきたものです。で、日本の教育はなにかといえは、次のようなことを書いています。

「日本では子供を育てるのに、ガーデン・プラントを育てるような注意を払っている。日本では子供をあまやかし、きびしくしない。あまりたいたたりはしない」

フランスでは、いまでも店先に子供のシリをたくムチを売っています。日本ではどうでしょう。店先にムチを売っていますか。フランスにはそうしたことがいまでも残っている。

で、明治時代の西洋人が、日本人は不謹慎だ、ふまじめだ、誠実さがないと腹をたてたのはなぜかというと、たとえば自分の身内に不幸があった時に、その人が死んだという知らせを笑いながら話しているところをアングロサクソ

ンの人が見れば、ひじょうにふまじめな印象を与えるわけです。

それについてハーンはこう説明しています。不幸な事件がありましたけど、よけいな心配をなさらないでください。お気に留めないでください。やむをえず申し上げましたことをお許しください——そういう気持ちで日本人は微笑をしているのだと説明しています。で、京都でこんな光景を見たといって、この日本人の微笑をこう解き明かしています。

明るくキラキラ輝く京都の人通りの多い道端にお地藏さんがあった。そのお地藏さんを（ハーンが）見つめてみると、年のころ十歳ほどの男の子が走ってきてお地藏さんの前で手を合わせ、頭をちょこんと下げて、ひざまずいておじぎをした。ちょっと前まで遊んでいた時の喜びや輝きがまだ残っている感じの男の子だった。その男の子が無意識に浮かべている微笑が、そのお地藏さんの微笑にそっくりだった。その男の子とお地藏さんがまるで双子のように見えた。

それを見たハーンは、日本人には仏教が理想とした自己抑制の微笑が人びとの心にしみ込んでいると感じたという。仏像には仏教の理想とした微笑がある。その微笑とその少年の微笑が同じである。これで日本人の微笑がわかったといっています。いまの日本はあまりにも近代化されすぎて、かつてのよき美風が見失われていますが。

ハーンはある意味で、日本民族の魂と心をつかんでいる。ここに宗教の話が出ましたので、比較文化の立場からちょっとその問題に触れてみましょう。

キリスト教、ヒンズー教、仏教、回教を四大宗教といっています。これら大宗教が文化を伴ってある地域にはいる

と、その地域にはあとから他の宗教がはいる余地がほとんどなくなってしまふ。アジアではそうした大宗教がはいらなかつた所はフィリピンです。フィリピンには仏教もヒンズー教もずつとけいらず、ここだけがブランクだった。だから、フィリピンだけがカトリックの国になった。キリスト教は他のアジア地域では成功しなかつた。この国はアジアではちよつと珍しく中南米の国のような面をもっています。

過去において、いったん大宗教がはいるとそれ以外の宗教がはいらず失敗した国がある。たとえばインドです。イギリスは長い間インドを統治したが、いまでもキリスト教徒は全人口の1%以内だろうと思う。日本にも宣教師がやつて来て布教活動をしました。人口を一億として、キリスト教徒は百万人以内だろうとみています。

ハーンはキリスト教の宣教師が嫌いだつた。自分自身の価値感を押しつけようとしませんでしたから――日本人に。彼は、宣教師は日本を理解する前に自分の善意を日本人に押しつけようとしているが、それはよくないことだといっている。たぶん自分の少年時代の反発があるからよけいにそんな気が強かつたのかもしれない。

理想主義者の通弊として、その善意を相手に押しつけようとするところがありますが、押しつけをする前に、まず相手の立場を理解することが、肝心だろうと思います。

しかし、宣教事業には事業としての偉大な面があり、これは海外協力隊事業にもなにかと参考になることがあるろうかと思ひます。

たとえば、外地へ行って長い間がんばっていられるのはなぜかといひますと、宣教師の場合、常にローマの本部につながっているという意識があるからです。それがあつたから異郷の地で何十年もがんばっていられるのだらうと思ひます。それから、今日のイデオロギー問題について考へてみても、いまの日本ではスパイのことを話題にしていませ

んが、ソ連では国家の英雄として高く評価している。そして、ソ連のスパイがアメリカなどで何十年もがんばってられるのはなぜかといいますと、やはりモスクワにつながっているという意識、感情があるからだろうと思う。

ハーンが日本へやって来て、欧米人もあまりつきあわず、どうして生活ができたかといいますと、彼は英語で物を書いていましたので、その著作によって英語圏とつながっているという感情があり、日本での生活に張りがあったのだろうと思う。

彼は松江で物を書き、それをアメリカの出版社に送っていました。そして、その出版社からゲラ刷りが送られてくると、そのゲラ刷りをなおして推敲に推敲を重ね、再び出版社へ送るという仕事をずっとやっていました。

このように、人間、なにかにつながっていないと外地では仕事ができるものではないかもしれません。海外へ行かれるみなさんの中には、あるいは「そんな気構えで、行く先の外地に溶け込むことができるだろうか」と思われる方もあるかもしれませんが、たとえみなさんが赴任先の土地に骨を埋めるような気持で——私はこうした考え方に反対なのですが——いらしても、日本を離れて、その行き先だけにつながる人があるかといいますと、私はないと思います。

日本人の中にはよく「異国に骨を埋めなくてはいけない」という人がいますが——そういう人はどこにでも骨を埋めていただければいいわけですが——だいたい人間は、本質的に自分自身を生かすことを考えなければ生きることができないものです。自分自身を生かすために、こうした海外派遣の機会を利用するという考え方のほうが私は健全な心だろうと思っています。

ハーンも、先ほど申しましたように日本のためになること、日本を海外に紹介するために物を書いたのではなく、自分の文学者としての才能を生かすために仕事をしました。ですから立派な仕事ができただけではないでしょう。自

分自身を生かすと同時に他人をも生かし、そして双方の共通の利益をうまく見出せる人が、外地へ行った時の知恵者
だろうと考えます。

(四)

ハーンは、日本という、当時まだ地球上であまり知られていない国へやって来て松江へ行きました。そして、そこ
は自分の気質とも合っていた。それゆえに自分のまわりの人も大切にしました。大切にしたからこそ、ああいう立派な仕
事をする事ができたのでしよう。

ところがハーンは、日本へ来てはじめての一年ほどは非常にすばらしい国であると思っただけですが、後になり、幻滅
を覚えて日本について不平をいったこともありました。小さいころから方々を旅行し、国や文化の違いにより生活習
慣も違うということを知っていたハーンでしたが、ヨーロッパの気風が日本には入り込んできたため、彼は「夫婦の
愛」よりも「親に孝」のほうが大切だと思いが、最近では「親に孝」よりも奥さんを大事にする男のほうがふえてき
たのは、困ったことだと愚痴をこぼしているのです。国と国とにより、生活習慣が違ふといろいろな誤解が生まれ
くることをハーンは知っていたのですが、それでもこんなふうに文句をいう機会が出てくるのです。海外へ行くとい
ろいろな不平が出てきます。文句をいおうと思えばいくらでも機会があるし、それを論理化することもできます。
いま仮に、西洋では夫婦愛が一番大切で、日本では親子の愛が大切だとしましよう。日本へ来た西洋人は文句をい
おうと思えば、日本人は夫婦愛を知らないということができません。そして日本人は日本を理想化し、西洋人に向かい、
お前たちは親子の情愛が薄いと文句がいきます。こんなふうに、自分に都合のいい物差しをもってくればなんにでも

どんな文句でもつけられるものです。

しかしハーンは、そうした生活習慣の違いで、いろいろと道徳が違うことを知っていましたし、この根底には、人間どこに行っても通じるような愛があることも信じていたと思います。たとえば日本の民謡の中に、夫婦の愛情をうたったものにこんなものがあります。

お前百までわしゃ九十九まで、ともに白髪が生えるまで

ハーンはこの民謡が好きで自分でも英訳しています。たぶん妻節子をいたわる気持がこうした英訳をつくらせたのだろうと思う。

五十歳を過ぎたハーンが夏に焼津に行きまして、東京に残してきた奥さんにあてた日本語の手紙があります。奇妙な日本語ですが一部を紹介しますと、

ママに願う。自分の体をかわいがるように。いまあなたは忙しいでしょうね。大工や壁屋やたくさんの仕事で。体を大事にするようくれぐれも願います。私はきょう忙しかった。

ひじょうに情緒でん綿として——新婚当時の手紙ではありません。五十歳を過ぎて二人の男の子と一人の女の子がいる父親です。彼はひじょうに子ほんのうであり、養父母に対してもかわい言葉を使っています。そして、夫婦愛

も、親子の情も、孝養も、うまく調和させています。ハーンは自分の身のまわりに細やかな注意を払った人でした。

ハーンは、日露戦争で旧満洲に行っている松江時代の教え子に送る慰問袋を作っている最中に、心臓マヒで亡くなりました。この話がこれから開発途上国へ行かれるみなさんに参考になれば幸いです。

技術協力に先立つもの

高橋 彰

私は十五年ほど前、留学生としてフィリピンへ行っていました。そのころは、まだ対日感情がひどく悪い時分で「日本人がフィリピンに行って勉強できるのか？」といわれたものです。フィリピンの村々を訪ね歩いていまして、あちこちで、「軍服を着ていない日本人を見るのは初めてだ」といわれました。

その時以来、フィリピンをはじめアジアの経済発展についての勉強のために、よく海外に出ましたので、この十五年間の半分以上日本にいなかったようです。海外に出るといえば、いい大学で勉強するとか、きれいなオフィスで仕事をするのが普通なんでしょうが、私の場合は家族を連れて村にはいり込み、ニッパハウスに住み、村びとたちと話し合ったりいっしょに酒を飲んで、その人びとが何を考えているか、どういう方向へ進もうとしているか、さらに、その地域の社会とか経済の発展のためには何が問題なのか、などということを知ることになりました。その間、青年海外協力隊の隊員の方々ともいろいろ議論する機会があり、考えさせられることも多くありました。

そういう体験の中から、まず第一に、異なった文化を持つ民族に、どうアプローチし、どう理解していったらいいのかという問題。次に、アジアの人びとは無知蒙昧で、古い伝統にしがみつき、新しい技術をなかなか受け入れようとしなないということがよくいわれるが、はたしてそうなのかという問題。そして三番目に、へんびな地域にはいつて、

現地の人たちといっしょに仕事をしている協力隊員の方々の姿を見て感じたことを述べてみたいと思います。

(一)

日本人は世界の諸民族の中で、ひじょうに特殊な存在です。ご承知のように、日本という国は一つの民族一つの文化一つの言葉からなっています。地方によっては話し方に若干の違いはありますが、国内どこでも同じ日本語が使われています。物の考え方も同質です。宗教についても、仏教にいろいろ宗派があり、キリスト教徒その他が若干はいたにしても、それによって生活のパターンや根本的な思考様式まで違っているというようなことはありません。つまり日本はまことに均質的な国なのです。

ところが世界全体を見ますと、異なる宗教の人たち、異なる文化を持つ人たちが互いに肩を擦して住み、その間にはトラブルが発生することもあります。おおむね互いに協力し合い仲よく暮らしている場合が多いわけです。言葉についても、日本では学校教育からテレビ、映画はいうまでもなく、毎日の仕事にいたるまで日本語で用が足りる。外国語が上手でなくても能力全体を疑われることはない。しかし、世界には幾つかの言葉を知らなければやっけない国が多いのです。

私が初めてフィリピンへ行った時のことですが、現地の人から「フィリピンにはたいへんにダイアレクトが多いが日本ではどうか？」と聞かれました。鹿児島弁とか青森弁のように方言に差があるので、「日本にもダイアレクトはあるよ」と答えました。ところが日本以外の国でダイアレクトという場合、言葉そのものがまったく違うことなのです。つまり単語も違えば文法も違う。日本の辞書ではダイアレクトを方言と訳していますが、元来は異質の言語であ

る地方語のことなのですね。このことから、それぞれの言語を持ったいろいろな民族がいっしょに暮らしている東南アジアの人たちと日本人とは、「異なった文化に近づく時の姿勢」に大きな違いがあることを思い知らされました。日本人はこれまで、違った民族、違った文化の人たちといっしょに肌を接して暮らしたことがありませんでした。

戦争前には朝鮮の人たちを無理に連れてきたのですが、結局それにも成功せず、さまざまな問題を残したままに至っているわけです。このように、同質の文化の中でのみ成長してきた日本人には、「まともな考え方をしていさえすれば、どこに行っても通用するのだ」という気持があります。ところが一歩海外に出ますと、異なった民族、文化とぶつかることになりましたが、その時について日本人の物差しを相手に押しつけるという結果になりやすいのです。また日本のこれまでの発展過程は、西欧的な文物を受け止めるという形のものでしたから、アジアに出かけて行ったパターンものに出合った場合、その違いをすぐに「遅れている」と見てしまう。そういう傾向がずいぶん強いと思います。

私は、他の民族、他の文化を理解する際に最も基本的に必要なとされる心構え、姿勢の一つは、世界は多元的な構造を持っているものであるということ、あるいは文化の多元性を知ることだと思えます。文化といえは、昔の日本では「文化人」とか「文化國家」といって、ドイツ流に哲学とか宗教とか科学だとか人間の精神活動の中の高尚な部分を指して文化といってきたのですが、ここで私が申し上げている文化とは、ドロくさい習慣とか家族制度とか物の考え方とか、宗教とまではいかない信仰までも含めて、ある人間が一つの社会に生まれて成長していく過程で伝統として受け止め、その社会の成員として行動していくうえに必要で、習得していくもの全体を指しています。

世界を多元的に理解するということはむずかしいことです。というのは、どこかの国の人びとも民族中心主義が認

められます。つまり「自分たちがもっている生活のパターンや文化が、まわりの人びとより上なんだ」と思い込みがちなのです。

日本人とニンニクを例にとってみましょう。日本人の間では「ニンニクが好きだ」と人前ではいわないでしょう。とくに嫁入り前のお嬢さんなどの場合には、ギョウザやキムチが好きだなどとウツカリいわないほうがいいのだそうで、ガリリックといえは聞こえがよいのかもしれない。いまでも外国へ行って、料理の中にニンニクを入れてもらっては困るという人が少なくありません。日本人は「世界の料理の中でニンニクを使わないのは日本料理だけだ」ということをこれまで知らうとしなかったのですね。

そして東南アジアやインドへ行くと、ニンニクのはいっただけの料理に鼻をつまんで「こういう料理を食っている連中は……」といういい方をする人が多いのです。つまりニンニクが自分たちの食生活にはいっていなかったということだけで、違った食習慣を持つ人たちは自分たちより程度が低いという見方をしたがる傾向があるわけです。

インドで暮らしていた時、村のインテリと話していたままたま話題が食べ物のおよび、「日本人は魚が好きだそうだが、他にどんな物を食べているのか？」と聞かれました。相手がインテリだったのでついウツカリ気を許して、いろいろの食べ物の中にビーフをあげてしまいました。すると相手の顔色がサッと変わりました。まるで、私が人間の肉を食べたとでも告白したのを聞いたかのように。

ご承知のようにインドでは牛肉は食べるべからざるものとして意識されています。牛は乳を出してくれ、スギを引いてくれ、燃料を作ってくれ（牛糞をはして燃料とする）、薬を出してくれる（牛の尿は薬の役割を果たす）ので、人間にとって母親のように大事なものだと考えられています。日本人だってペットの犬や猫を食べようとは思わないのです。

から、わからないことはないでしょう。

おもしろいことに、インドの人たちもイギリス人が牛肉を食べることは知っています。だが牛肉が世界の各地でぶつうの食品なのとは思わずに、「イギリス人は牛肉を食う妙な連中なのだ」と思い込んでいるわけです。自分の物差しで相手を計ることはどの国にもありますが、こうした傾向はことにインド人やアメリカ人の場合強いようです。

アメリカ人は自分たちの生活様式に絶対的な価値を置いていますから、それ以外の生活様式は考えられない。これまでアメリカ人が「醜いアメリカ人」といわれてきたのも、一つにはアメリカ的生活様式とかアメリカ的民主主義とかを全世界に与えよう、それが世界平和であり社会の進歩である、と思い込んでいたところに理由があるわけです。

私は一年半ほどアメリカで講義したことがあります。最初単身で赴任したものですから、同僚のアメリカ人教授たちが気にしまして、中には「君は家庭に何か問題があるのか？もしそうだったらできるだけのことはするが……」といってくるものもいました。実は妻のお産が近かったので子供が生まれてからアメリカにくることになっていたのです。こういう事情を知ったアメリカ人が、きまったように口にしたセリフがあります。それは「なぜ子供をアメリカで生まないのか？アメリカで生まれれば君の子供はアメリカ市民じゃないか。そうすれば君はアメリカ市民の父親になるわけだから市民権を取るのに有利ではないか。なぜ日本で生むようなバカなことをするのだ」というのです。アメリカ人のほとんどは、自分みずから、あるいは親や祖父の代にアメリカ人になりたくて集まってきた人たちです。映画のウエストサイド物語の中の「アメリカノアメリカノ」という歌の文句そのままに「アメリカはいいところだ。アメリカへ行って一旗あげよう」といって、ヨーロッパやアジア、ラテンアメリカなどから集まってきた人たち

ですから、かつて自分たちがそうであったように、「世界中の人びとはみんな、アメリカ人になりたくないはずはない」と思い込んでいるわけです。

それまで私は自分が日本人でいたほうがいいのか、なれるものならアメリカ人になったほうがいいのかなどは考えたこともありませんでした。生まれおちた時から日本人であることに疑問を感じたことがない。これも日本人の特徵でしょう。

世界の他の部分でなら、いろいろな人が隣り合わせて住んでいるので、「自分の父親は日本人で、母親はインディアンの血をひいたブラジル人だが、自分はいったい何か？」というようなことが問われる。フィリピンの子供たちも同じです。父親は南から、母親は北からやってきてマニラでいっしょになった。だから、夫婦で話をしている時は英語かタガログ語だが、父親の親戚などが来ると、話している言葉が母親にはわからない。親たちがそんな具合だから子供たちはたいてい二つか三つの言葉を知っている。それに比較して、日本人は一億もの人口がありながらたいへんに均質な構成を持っているので、国籍、民族、文化といったものへの帰属性に疑問を持たずに暮らしてきたわけですから、とにかく、アメリカ的生活様式への自信が、アメリカ人になりたくないはずはないと思いつくことになるわけで、これもアメリカの民族中心主義の現われといえるのでしょうが、そのアメリカ人の中にも、黒人運動やアジア・アフリカの民族主義に接する中で、世界にはいろいろの考え方、発展のあり方があるのだという見方をする人が徐々にふえてきているようです。

話は変わりますが『アラビアン・ナイト』の中に、ハレムの美女六人が主人の前でそれぞれ自分の美しさをたたえる場面がありますね。正確な文句は忘れましたが、白い女が「私の肌は象牙のように白く、目は海のように青く、髪

の毛はフサフサとした金色で……」という、黒い女が「私の肌は黒檀のように黒く、神さまが作った夜は私の肌の色なのです」という。私は大学二年生のころこれを読んでたいへんショックを受けた覚えがあります。それまで、美人といえば、色白で鼻筋が通り目がパッチリしているハリウッド型が世界の一般的な標準だと思っていましたが、この時、肌が黒くてもそれを自慢できるのだ、美しさの規準というのは文化によって違っていいのだ、ということを知ったわけです。今ではハリウッド映画にも、黒いヒーローに白いヒロインが恋を抱くというのがふえているようですから、みなさんは驚くことがないのかも知れませんが。

美しさということ一つをとってみても、それぞれの民族にそれぞれの規準があるのです。一つの民族が持っている伝統とか文化についても、そういう側面を見のがしてはならないと思います。

最近、フィリピンのルバング島で日本の兵隊さんが三十年間近くも隠れていたというので、その捜索が行なわれました。私も実は十四年前にこの島に渡ってこの人たちを探すお手伝いをしたことがあります。今回はその取材にたくさんの日本人記者が行きました。ある新聞に「村の人たちはたいへん協力的で、捜索隊や記者団をよんで豚の丸焼きをごちそうしてくれた。しかし誰のいたずらか、そのテーブルの上に豚の頭が置いてあった。そのため食欲が減退した。あれはきつと、できるだけごちそうを食べさせないで置いて、あとで残り物にありつこうという魂胆ではなかったのか」という意味の記事が載っていました。これなど、自分の物差しを相手にあてはめて考え過ぎたい例ではないかと思えます。

日本人には豚の頭を食べる習慣はありませんし、だいたい昔は肉を食べる習慣すらなかった国民です。しかし古くから肉食をしていた民族の場合は、その動物の顔つきを見ながら肉を選ぶのがふつうです。中近東では肉屋の店頭

頭もいっしょに羊肉がぶらさがっていて、その羊の顔を見ながら「こいつの肉をこのくらいくれ」と注文して買うわけです。フィリピンでも肉屋へ行くと、売り台に豚の頭がちゃんと置いてあり「このほうがうまそうだ」といって買うのです。

日本人にそんな話をするといやがりませんが、実は日本人だってそういう方法で魚を買っているのですよ。切り身では魚のよしあしはわからないといって、目の色を見たりエラを引っぱってみたりして買うわけでしょう。また、おめでたい時には「尻頭つき」が食欲にのります。だから頭にもいろいろ意味があるといわねばなりません。フィリピンで、豚の丸焼きといえたいへんなごちそうです。頭からしっぽまできれいに料理して、それを丸ごとお客の前に出すのです。

この場合、フィリピンの習慣を知らなくとも、自分の物差しで相手を計ってしまうのではなく、まず、豚の頭がテーブルにのっているのは、その土地の文化の中でどんな意味をもっているのかということを考える、というふうにするべきなのではないでしょうか。ですから、多元的認識ということと並んで大事なことは、内面的に見ることです。つまり相手の物の考え方にまで立ち入ることです。そのためには言葉というものがたいへん重要になってきます。

日本人がアメリカやヨーロッパを理解しやすいというのは、欧米的生活パターンが日本にはいり込んでいるということだけでなく、文学とか映画とか音楽とかを通じて、西欧的な物の考え方を教養として身につけているからです。キリスト教徒でなくても新約聖書を読んだことのある人は多いでしょうし、カソリックのきまりや儀礼などを映画で見知っている人も多いでしょう。つまり、あらたまって「地域研究」といわずとも、美術館や博物館に行ったり本を読んだりしているうちに、欧米文化のさまざまな側面を観察しているわけです。

ところが、アジアについては、私たちはきわめて限られた範囲のものしか「教養」としてもっていません。みなさんは高校生の時に『コーラン』や『マヌ法典』について習ったことがあると思いますが、それらを直接手にとって見たことがありますか？ どちらも文庫本として日本語訳がふつうの本屋さんにも置いてあるのですけれども。

私たちが教養の一部として、理解への糸口をほとんどもっていない地域については、相手の物の考え方になかなか近づけません。したがってさまざまな行き違いが起ってきます。よく「誠意さえあれば言葉が不十分でも心が通じるはずだ」という人がいますが、そう簡単にはいえません。誠意というのはあくまでも同じ物差しのワクの中のことです。日本人の物差しで計った誠意は、日本人という民族の間でしか通用しないと思うべきでしょう。

もっとも、私もインドやフィリピンでの経験から、究極において人間の気持には似たようなところがあるのだなと感じています。しかし、そうなるまでの過程は簡単ではない。こちらが相手の物の考え方を理解し、相手もこちらの考え方になって、互いに触れ合うことができるようになるには、互いに言葉の障害を乗り越えるところが、相手もこちらの媒介が必要で、それなしに「誠意さえあれば……」というのでは通じ合うことはできません。そして、自分の物差しを相手に無理にあてはめることはしばしば大きな誤解を生むこととなります。また何か食い違いが生じた時、それが西欧的規準と違っているからといって、それをすぐ「遅れている」と見るのでは、違った民族や文化を理解できるわけがないと思います。

(二)

次に、日本人に限らず世界の多くの学者や技術者がいう「アジアの農民は古い伝統にしがみついて、なかなか合理

的な反応をしてくれない」という見方について考えてみましょう。この人たちは異口同音に「アジアの人びとは怠けもので、なかなか働こうとしない」といつているわけです。

まずあくせく働くことがただちに美德なのかということですが。近ごろ日本でも「日本人はやみくもに働きすぎる。もう少し生活を大事にしなくてはいけないのではないだろうか」といわれています。最近私が読んだある講演記録に次のような言葉が載っていましたので、紹介しましょう。

アメリカ人がフィリピンの農民に「なぜお前はヤシの木の下で昼寝ばかりしているのか？ なぜもっと働かないのか？」と聞いた。さらに「働けばカネがもうかるじゃないか。そのカネを銀行に預ければ利子が利子を生んで財産が大きくなり、自動車だって別荘だって好きな物が買えるじゃないか」というと、フィリピン人の農民は「別荘を買ってどうする？」。そこでアメリカ人は「そうならば仕事をしなくてもいいし、庭の木にハンモックを吊って寝てもいい」というと、そのフィリピン人は「そんな遠まわりをしなくても、俺はいまそれをやってるよ」といった。

これは寓話でしょうが、いわゆる経済発展に対する批判がこめられているようです。あくせく働くだけが人生の目的ではないはずです。私が留学生として初めてフィリピンへ行った時、フィリピン大学——当時創立五十周年で東南アジアでは古いほうの大学でした——を見て「これでも大学なんだな」と思いました。図書館に本がたくさんあるわけでもなく実験室の設備もよくない。ところが学生寮はたいへん立派で、プールをはじめダンスホール、玉突き場、ボウリング場まで構内にある。当時の日本には、まだボウリング場なんてなかったのですよ。そして金曜、土曜になると学生たちはダンスをしたりボウリングをしたりしている。「フィリピンの大学生は勉強することより遊ぶほうが大事なんだな」と思ったものです。

日本では、見かけが古くて大きな建物がたくさんある東大でもダンスホールなんかはない。ホズミがチヨロチヨロ走りまわっているような食堂で、テーブルを隅のほうに片づけてダンスパーティーをやっていた。つまり日本の大学では図書館とか実験室とか教室とかはりっぱですが、学生に大学生活をエンジョイさせようというような考えは少しもなかったといえるでしょう。大学というのは日本型がいいのかフィリピン型がいいのかと問われても、どちらがいいと簡単にはきめられないのではないでしょうか。

ところで、私はよくフィリピンの農村を視察にきた日本の人たちを案内して村々をまわったのですが、そういう人たちは必ず、「この百姓は働かないですね。これではこの国の農業の発展は望みえないですね」というのです。たしかに日本の農村とフィリピンの農村とは印象が違います。日本でも最近では大分事情が変わってきていますが、とにかく日本の農民は「あしたに星をいただき、夕べに月影を踏む」というように、寸暇を惜しんで働いたものです。日本の農村では、どこでも汗水たらして働いている百姓の姿が見られました。

ところがフィリピンの農村では、いったん田植えがすめば稲刈りまで田んぼを見ようもしない百姓ばかり。農作業の忙しい時でも、妻や子供が夫や父親を助けて野良で働いている姿は、私のいた中部ルソンではついぞ見かけたことがありませんでした。私も「ずいぶん働かない人たちだ」と思いました。ちょっと注意すれば収穫が上がるような時でも、格別に配慮するようすがありません。

しかし、一歩立ち入って調べているとこういうことがわかってきました。この地域の農民は分益小作制度の下にあります。収穫すると、まずはじめに三分の一ほどが経費として天引きされ、残りの三分の二の半分は小作料として地主に持っていかれてしまいます。結局小作人の取り分は三分の一になるわけです。こういう小作制度の下では、農民

が努力して仮に三倍多く収穫したところで、彼らの取り分はわずかなものになってしまうのです。ですから「あまり仕事をしないほうがいい」というわけで勤労意欲もわかない。これはむしろ当然のことでしょう。

ところが、それだけではありません。実態をくわしく観察しているうちに、私は「見かけの収量が上がらないほうが、彼らのためになっているのではないか」と気づいてきました。つまり地主に小作料を持っていかれると、残りでは暮らしていけないから借金する。すると借金の返済分として、小作人の取り分までが持っていかれる。借金の利子が年一〇〇%というのはザラです。中には二〇〇%というひどいものもある。ふつうは米で一袋借りると半年後にモミ二袋にして返すのです。ですから、収穫の直後でさえ自分の田で取れた米を食べることのできない農民が多いのです。借金のカタに持って行ってしまわれるから一粒の米もなくなってしまふのです。こういう農民はいったいどうやって食っているかという点、結局自分自身や家族が兼業に出る。雇用農業労働者として働くとか小商売をすとか、自分の水田はほったらかして働きに出ることになります。

日本には「経営原理」として「入るを計って、出ざるを制する」という言葉があります。総収入から経費を差し引いたものが純収入のわけで、経費を減らすことによって純収入をふやすのが当然の原理であるわけです。ですから、日本の農家ではまず一家総出で働いて、なお足りないところだけ人手を借ります。ところが、フィリピンでは小作人である一家の主人だけが働いて、家族はなかなか手伝わない。そして田植え、稲刈り、脱穀など重要な農作業を雇用労働者の「組」に任せる。村の中に二十人から三十人の労働者が集まって作る請負組が幾つかあって、田植え、稲刈り、脱穀を一ヘクタール当たり幾らかで請負います。耕起やまぐわは労働交換でやります。小作農が自分でやるのは苗代づくりや家畜の世話ぐらいのものです。ということは、経費がひじょうに大きくなることです。

しかも驚くことに雇用労働者に仕事を請負わせている間、小作人の世帯主や家族は何もせず、家でブラブラしているのです。ある日、ある小作人が稲刈りを請負組にまかせてどこかへ行こうとしていたので、「あんたのところはきょう稲刈りだろ？」と聞くと、「村の労働者の組に任せてあるから」という。私がさらに「自分でちゃんと稲刈りの監督をしたらいいのに」というと、「いや、私は村の連中に頼んだのだから、彼らを信頼していることを示すためによそへ行くのだ」というのです。稲刈りを請負った連中の仕事を見ると、なんともひどいありさまです。稲刈りのすんだ田と、まだ刈っていない田の見分けがつかないほどでした。昔からの植え方をしているところでは、雑草が稲と同じ丈で、稲刈りというのは穂先だけを摘む状態ですから。そして請負組の連中が隣の水田に移動すると、待っていた女や子供たちが落穂を拾う。落穂拾いは村の者なら誰でもやっていたいいことになっています。

つまりここでは、経費をかけて大勢の労働者を雇って稲刈りをすればするほど村の中に残るものがふえるわけです。小作人は村の連中を雇って労賃を払うが、次の日は、こんどは自分や家族が村内の他の人の水田で労賃稼ぎや落穂拾いができるのです。ですから、個々の農家を見ればたしかに経費は大きいですが、村という共同体でみると、めぐりめぐって地主に持っていかれる部分を小さくし、村内に残る部分を大きくしているというわけです。他人に支払う労賃のような形を借りて、実は自分に対する労働報酬をなんとか残そうとしている。私にはそうとしか思えないのです。そのうえ落穂拾いだけでなく、稲刈りに雇われて労賃の他に稲束をもらってくるということもある。そういうものを計算してみると、全体の生産の一五〇から二〇〇に当たる。

こう考えてみると、見かけの生産性が上がらないほうが、はるかに彼らの暮らしの役に立っているのだ、ということがわかってきます。野良に出て父親の仕事を手伝うよりも、賃稼ぎをしたほうが一家のためにいいこともわかりま

す。地主も、兼業で稼いだ分から返せとはいわないのですから。

そういうわけで、一概にフィリピンの農民は働かないとはいいい切れません。生来の怠けものもいるでしょうが、それは日本人だって同じことです。しかし一見怠けもののように見えても、それは彼ら自身も持っている論理——前にいったようなことを、彼ら自身が意識しているとは思えませんが——にたっているもので、その地域社会のあり方にまで立ち入って考えてみると、そこにはそれなりの合理性があるわけです。農業の生産性を高めたとことで、その成果が自分のものにならないとすれば、それだけの労働力を自分にプラスの方向に使ったほうが合理的だといえるのです。

そのへんを理解しようとせずに、ただ通りすがりに眺めただけで「この国では働いている人がいない」とか「田植えや稲刈りの仕方が乱暴だ」などといい「この人たちが働かないのは暑いせいじゃないか？ 裏山へ行けば木の实がいっぱいあり、バナナなどただで手に入るからではないか？」というふうやすく、その自然条件と結びつけて説明してみることが多すぎるようです。

似たような問題について、インドに住んでいた時にも考えさせられたことがあります。インドにきた外国人がまず気にするのは牛です。一方では人間がおなかをすかして餓死者まで出ているというのに、どこの町でも村でも「野良牛」とでもいまいまじょうか、牛がウロウロしてゴミ箱をあさっている。これを見て、「こんなにたくさんいる牛を食べないからインド人は腹をすかすのだ。食糧が不足しているのだから、役に立たない牛に資源を浪費させるのはおかしいし、しかも、こういう蛋白源を宗教上の戒律から食べないというのは非合理的な生活態度だ。そういう考え方を改めないかぎりインドの経済発展は望みえない」という主旨の発言がよく聞かれることとなります。インド社会のも

つ非合理性の象徴として、牛が恰玉にあげられるわけです。

たしかに牛がウロウロしている光景だけを見ると非合理的です。しかしそういった外見から、インドには牛が多すぎると結論してよいのでしょうか。インドの経済、社会、生活を環境との有機的つながりの中で少し深く立ち入って観察してみますと、そう簡単にきめつけることができないことに気づきます。インドの現在の生産と生活の体系の中の牛の持つ役割を、農耕、灌漑、輸送のための畜力、ミルク、ヨーグルト等の蛋白質、燃料、肥料等々の各面で位置づけてみますと、インドには牛が余っているところか、もっと多くなるといえるわけですが、それは同時に生態系（エコシステム）の立場からみれば、合理的な裏付けをもっているといわなければならないのです。第一野良牛のようだというのは実情を知らない人の言葉で、牛たちにはちゃんと燃るところがあり、一頭一頭持ち主がはっきりしているのだそうです。

そんなふうに考えていきますと、一見非合理的に見えたり、西欧的な規準から離れているように見えるものでも、その地域社会全体の体系からすればむしろ合理的な役割を果たしている、といえることがしばしばあるのではないかと思います。全部が全部そうだといおうとしているわけではありませんが、通りすがりに自分の物差しで相手を計ることだけは慎むべきだと思ふのです。とくに私たちには非合理的に見えるものをすぐ宗教と結びつけて考えてしまう癖があるようです。たとえばタイへ行けば「この国は小乗仏教で、人びとはみな一度は坊さんになるそうさ。そういうことをやっているからタイは——」とか、インドへ行けば「ヒンズー教がいかん。数千年前の神話そのままに生きているから発展がない。カーストが残ったり、生き物を殺すことを禁じたり——」とかいう。そして西アジアへ行っ

ておかしなことがあれば「イスラム教のせいだ……」という。

人間というものは、そう簡単に割り切れるものではないでしょうに。特に日本人が、ある地域で後進的だと思えることを宗教と結びつけて判断したがるというのは理由がありそうです。日本人はよくいえば宗教とか信仰というものから解き放たれている。悪くいえば未知のものに対する恐れをまったく持ち合わせていない。そんな国民は世界ではむしろ珍しい存在なのではないでしょうか。

みなさんはこれからこの国で暮らしても、きっと宗教をたずねられると思います。「お前は神道の信者なのか、それとも仏教徒なのか？」とか「日本では神道と仏教がうまく重なり合っているそうだが？」とかと。そういう時、「おれには宗教なんかない」などとウカツにいうのは考えものです。彼らは宗教を大事にしていますから、「おれは神さまなんかいらぬのだ」というようないい方をするものには寛容ではない。それは人間ではなくて悪魔だ、そんなものといっしょに生活したり仕事するわけにはいかないということにもなる。宗教が違っているというのは、いいのです。彼らは違った宗教の人たちといっしょに暮らしてきている人たちですから、文化が違い民族が違ふのだから宗教が違ふのは当然だ、というかたちで受け入れられます。

それにつけても私は、私自身を含めて、日本人は宗教とか信仰というものを粗末にしすぎるのではないかと思いません。そういうものを大事にしている人びとを「選れている」といえるものなのではないでしょうか。

(三)

最後に、私がこれまで海外で協力隊員の方々と接してきた中で考えたことについて、若干お話ししてみたいと思いま

す。

私は日本の協力隊員だけでなく、アメリカの平和部隊の人たちとも数多く接してきました。平和部隊出身のアメリカの大学教師の教人とはいまでもつきあいがあるのですが、そうした人たちといっしょに仕事をしたり議論したりして感じたことは、日本の協力隊員の方々はまことに真面目だということです。そしてたいへん使命感に燃えている人が多い。二十四時間隊員勤務です。自分の全生活を仕事に打ち込んでいます。

私が気になったのは、そんなに真面目に仕事に打ち込んでいる気持が、相手側にうまく伝わっていない場合も少なくないということです。そのことで、やみくもに相手側を責めることは正しくありません。相手にしても協力隊員のそうした気持はわかって、うまくそれに乗ることを妨げるさまざまな条件があるわけです。それぞれの地域にそれぞれの条件というものがある。

着任したばかりのころは「こんなへんびな、食い物もろくにないところへ、日本からよくきてくれた。おれたちもいっしょうけんめいやるからよろしく頼むよ」と、その人たちが気持よく迎えてくれる。そこで、隊員は図面をひいたり、県庁に相談したり日本から資材をとり寄せたりしてけんめいにやる。ところが数カ月たって、いざ仕事をやるだんになると村の人たちが乗ってこない。こっちは張り切っていただけに「ここへきて、おれはこんなにやる気になってるのに、お前たちはいったいなんだ、やる気があるのかないのか？」とガックリしてしまっわけです。

村の人たちにはそれなりのシステムと働き方があります。ですから向こうの人たちの波長とこちらのそれとをどこで合わせるか、その接点を見出していくことが、一番大事であろうと思います。そういう時にはあわててもだめなものです。日本人はせっかちですから、とにかく先を急ごうとする。しかしフィリピンにはフィリピン・タイムがある。

つまり時間についてもその土地の仕組みというものはあるのです。

あるアメリカ人がこんなことをいっていました。「時間——フランス人はそれは恋のためにあるといい、アメリカ人はそれはカネだという。インド人はそんなものはないという」と。インドでは現世は前世から来世への途中のほんの仮の刹那です。だから大事なことは来世を願うことです。そういうところで日本式にせっかちにやろうとしてもだめです。インドへ行ってびっくりすることは、日本とはものを考える時間のオーダーが違いすぎるということです。みなさん、タージマハールという名前を聞いたことがありますね？ 私も行く前に何度も写真は見ていたのですが、実際に見てその大きさにびっくりしました。あれを作るのには何十年もかかったのです。

私はこの一月、バングラデシュに行っておりました。首都ダッカから車で三十分以上も離れたところに大学をつくっているというので見に行きました。牛の遊んでいる草原が広がっていて、そこにポツンポツンと小さなレンガ建ての家がある。小さな大学のくせに広い敷地があって、かえって不便じゃないかと思ったほどです。大学本部という所——日本の感じでは物置みたいな所——へ連れて行かれて学長に会いました。そこに大きなマスター・プランのプランが掲げてあった。そのプランの気宇壮大なこと。筑波大学なんか比べものにならないほどの規模で、いまはまだほんのごく一部だけしかできていなかったというわけでした。独立直後で国家財政はきわめて逼迫しており、資金の見通しもないのに、夢のようなマスター・プランを見せられて、いっしょに行ったヨーロッパの学者の中には吹き出しそうになってこらえかねている人もいました。「なんだ、大きなことばかりいって。いったいカネはどうするのだ」というわけです。

しかし、このプランはなにも三年とか五年とかで作り上げようというものでなく、順々に大きくしていって最後に

はそうなるというものなのです。その時、私はインドのタージマハールを思い出しました。あれと同じように、いまは夢のようでも、十年かあるいは何十年かたったら、世界でも有数の大きな学園が実現しているかと思えるのです。

こういうインドやバングラデシュの人たちの息の長さ、気宇の壮大さと対照的なのは日本です。最初のインド滞在のあと、宇治の平等院を見に行ったことがあります。たしかに写真で見たとおりの美しい建築物でしたが、床に上がってちょっと歩くともう向こう側へ落ちそうになりました。タージマハールと比べるとおかしきかもしれませんが、まるで箱庭です。もっとも、そうした箱庭に山を見、海を見、森を見るのが日本文化のパターンで、小さくともきれいに完璧なものをつくっていくというやり方だといえるのでしょう。

しかし、分秒単位の仕事は正確だけれども思考の射程の短い日本人の仕事ぶりを見ると、ついタージマハールやダッカの大学を思い出します。

話をもとにもどしましょう。元来日本人は時間にせっかちなのですが、とくに協力隊員の場合、任期が二年というふうに限定されていますから、よけいのんきにはしてられないのかもしれませんが。しかし海外では相手側とどこでもうまくかみ合わせるかが大事なことで、それを見つけようとしてあわててはいけません。二十四時間勤務という考え方はだめです。

つまり、その地域での自分の生活を楽しめないようでしたら、相手のことがわかるはずがない。周囲の人たちにしても、生活を楽しまずに、使命感だけで仕事に打ち込む人を信用する気にはなれないでしょう。協力隊員の生活は四六時中違った文化の人たちと接している。建物の構造からいっても、その生活ぶりの一部始終を見られている。そうした暮らしの中ではプライベートは全然ないわけです。だから、その暮らしの中に面白いこと楽しいこと好きにな

れることを見つけていかないかぎり、とてもやっていけるものではありません。相手に愛情を抱くことが協力ということの第一歩でしょうが、それは心がけとか誠意の問題ではなく、自分がそこでの生活をどれだけ楽しめるかにかかっているのです。

協力隊員として海外にいれば、あるいは事務局から「二十四時間、日本の協力隊員としてがんばれ！」といった激励が送られてくるかもしれませんが、それは隊員としての心構えであって、生活のうえでは「八時間勤務」をするようにおすすめます。八時間はけんめいに働く——しかしこの八時間も日本式の八時間でなく、その地域社会の中の八時間という意味です。

そして自分の時間八時間には好きなことをおやりなさい。業を採集するのが好きな人だったら、フィリピンでもマレーシアでも最高のチャンスが持てる。アジアの文学はまだほとんど紹介されていないのですから、小説や詩を読みまくるのもいい。音楽を集めて系統を追っても楽しい。絵を画いてもいい。その風俗とか薬草、民間療法とかを研究するのもいいじゃないですか。とにかく自分の時間を持って、できるだけそこでの生活を楽しいものにしなさい、あなた方の使命のほうも生きてこないと思えます。繰り返しますが、「誠意さえあれば……」というのは異なった文化をもつ人びとを相手にしては通用しません。

日本の東南アジア、中近東、アフリカなどについての研究水準はまだまだ低いものです。日本に限らず世界的にそうだとしたほうが適切でしょう。あなたたちのように、特定の地域の言葉を勉強して村なり町なりにはいり込んで二年間仕事をする、というような機会を与えられる例はたいへん少ないのです。ですから、その地域の政治、経済あるいは文化について何か一つポイントを定めて勉強するということを、あなた方のうちの誰かがやってくれたら、日

本のためにも世界のためにもなると思います。

たとえば言葉一つをしゅうぶんにマスターするというのもおもしろいと思います。インドネシア語やベルンチャ語などは、日本でも専門的に研究したり教育したりしている機関がありますが、フィリピンのタガログ語などを日本で学ぶことはきわめて困難です。外交でも商売でもいま日本とフィリピンとのつきあいは英語でやっているわけですが、やはり現地の言葉を使って、民衆が何を考えているかを知ることが一番大事なことです。そうした意味でも、みなさんが習得された現地の言葉を日本の今後のために使っていく途は、まだまだいろいろあると思います。

みなさん方一人一人はまさしくボランティアで、善意を持って現地へ行かれるわけです。しかし、現地ではいろいろ向こうの国内政治の問題がからんでくる場合もあるかと思えます。それも人によりあるいは地域によりさまざまなかたちで表面に現われてくると思われれます。みなさん方の仕事は政府間協定によるものですから、直接間接に体制に協力する結果になると思います。それだけに、たとえ狭い地域であっても、あなた方がいる村や町で、その人たちがほんとうに求めているものが何なのかを、たえず理解しようとして、何にもまして大事だと申し上げて、この話を終えます。

経済発展と人間の原点

深 海 博 明

みなさんがこれから現地でいろいろ問題を取り上げられる場合に、基本的に重要だと思われる幾つかのことがあります。これらについてじゅうぶんに私が解答申し上げることは不可能ですが、こういった基本問題について、どう考えていったらよいか、あるいは、どう解決していったらよいか、私なりに考えていることをお話してみたいと思います。

実は私、現地に長期間住んだことはありませんが、数回にわたってインドから韓国まで、かなり詳細に調査したことがあります。その調査経験と、私が総合的に研究している経済発展の理論、発展途上国の経済発展に関する理論、あるいはそれらに関する諸記録を踏まえて話を進めていきたいと考えます。

主題にはいる前に一つだけお断わりしておかなくてはならないことがあります。私の話は私なりの経験とか事実に基づいており、また私なりの価値観というものはいつていると思いますので、みなさんはそれを割り引いたうえで、みなさん方各自の問題として受け止めてほしいということです。中にはみなさん方のせつかくの意欲や熱意を冷ますようなことがあるかもしれませんが、いまいったようなことを前提に、みなさん方がそれぞれに考えていつていただきたいと思います。

(一)

まず第一は「経済発展とは何か」という問題です。みなさん方は海外で経済発展の基礎づくりに取り組まれるわけですが、問題は南側の発展途上国の「発展」ということの意味内容についてです。こんなことをいうと「いまさら、なぜ？」という人がいるかもしれませんが、実は最近、それについていろいろな反省や問題提起が行なわれているわけがあります。

先進国、とくに戦後日本の経済発展の道、あるいは、われわれの生活目標というのは、主としてGNP第一主義、あるいは物質的な進歩至上主義、ないしは経済発展至上主義的な考え方に基づいていました。その結果として、公害とか環境汚染が非常に深刻な問題になってきました。そして、最近の新聞や書物を読んでもわかるように「くたばれGNP」とか「成長から福祉へ」といったことが大きく叫ばれるようになっていきます。このように、日本自体がこれまでの路線の反省期に立っているという事情が一方にあります。

それから、そういう先進国的な立場にある日本人は、たとえばアジアの国々へ行った場合、ともすれば、その国の人びとに物質的な進歩至上主義の価値観を押しつけがちですが、相手の人びとも「そういう考えだ」というふうに思い込んでしまっているものだろうか。私はやはり、日本人が海外に出て行ったら日本的な価値観やわれわれが常識だと思っていることを捨てて、そこの人びとがどんな価値観や生活態度をもっているかを、まず考えてみる必要が必ずや必要ではないかと思うのです。

私どもが一昨年タイに行ったときの例で申し上げます。タイは非常に広い国で、南部、中部、北部、東北部の

「四地域に分かれています。私たちはこれを二週間で調査しようというわけです。往復に飛行機を使ったり、あるいはマイクロバスを雇って朝の六時半ごろから夜の八時ごろまで一日に六百五十キロメートルぐらゐも走って調査して回る。運転手や護衛の人は最初の一日や二日は平気だったけれども、しまいにほんとうにあきれたというような顔をして「なぜ、タイのようなんびりした生活態度のところに来て、そんなに朝早くから夜遅くまであくせく働くのか」というようなことをいわれました。」

私どもとしては、その二週間をできるだけ有効に使おうと思つて、そういうことをやつたわけですが、それに関してもまったく違つた受け止め方があるわけです。つまり、われわれはタイの常識からいえば気遣い、あるいは常識を疑われるような人間だという評価を受けることになるのです。

物質的な進歩至上主義、あるいは経済発展至上主義的な考えに対するもう一つの大きな疑問というのは、現在われわれが消費している消費物資がほんとうにわれわれにとって必要であるかどうかということ。これは経済学の基本問題に関連しますけれども、そういう疑問もいまや提起されているわけです。「豊かな社会」とガルレウス教授がいうのも、実は非常に皮肉な意味でありまして、いまの日本あるいは西欧社会というのは、必要でない物を作り、あるいは消費させられていて、それが豊かさだというふうに考えているんだという見方です。すなわちわれわれが使つている自動車とか電気器具などの耐久消費財を見ても、年々新しいタイプになつていく。そしてテレビなどで華美に宣伝する。われわれには欲望はないにもかかわらず、そういう宣伝によつて欲望が作り出され、それを求めてあくせく働くことになるというわけです。

ところが東南アジアの国々を見ますと、豊かな自然に恵まれているというかたちで、少なくとも最低限度の生活は

保証されている。そういうところで、そういういろいろな物質的な物を消費するようになることが、いったいほんとうに人びとの幸せということに通ずるのだろうかということだ。

ガルレウスの『豊かなる社会』の中から一つの象徴的な事例をあげておきましょう。これはアメリカの例ですが、ジャガイモの皮をむく金属製の道具がある。これは刃がこぼれるわけでもありませんから、消費者の側からいえば一つ買っておけばいい。生産者としては一度売ってしまえば、次は売れなくなる。そこでその機械を売っている会社の人たちはどういうことを考えたかといいますと、その道具にジャガイモの皮の色と同じ色を塗ればジャガイモの皮と間違えられてしばしばいっしょに捨てられるだろう、そうすれば道具の売上げが倍増するだろう、と考えた。これは非常に極端なケースですけれども、事実こういうこともあるわけです。

われわれのそういう基本的な価値観を発展途上国の人びとに押しつけていいものでしょうか。相手側の人たちがいったい何を幸せと思っているのかというようなことを、まず第一に考えてみるべきではないでしょうか。要するに、相手の態度なり伝統なりを理解するということは、自分たちのいままでの価値観や考え方が正しかったのかどうかという反省の上に立たなければならぬと思うわけです。

第二の問題は「南北問題とは」ということです。この問題についてはすでに他の先生方からもご指摘があったでしょうし、外務省の資料なんかで詳しく承知しておられるでしょうから、私はここではどう解決すべきかという点と解決の意義について考え直してみたいと思います。

ごく最近までのデータをとってみますと、一九六〇年代の南側の成長率は五・六%となっています。これに対してわれわれ北側の先進国の成長率は四・七%です。ところが人口増加率は発展途上国が二・五%、先進国が一・一%で

すからこれを割り引いた一人当たりのGNP成長率は発展途上国は三・一%、先進国は三・六%ぐらいです。この一人当たりの成長率が問題で、それは北のほうが高い。だから、南北の格差はますます拡大しているといわなければならぬ実情になるのです。しかも、絶対的な規模でいえば、一人当たりのGNPは、南側の発展途上国の二百ドルないし二百五十ドルに対し、北側の先進国では二千五百ドルないし三千ドルというわけで、絶対的にも相対的にも南北間の格差は増大しているというのが一般的な考え方です。

ところで、私は、これについて次のような事実を指摘しておきたいと思えます。

まず、とくにみなさんに強調しておきたいのは、南側全体としてみると、北側の過去の成長率を上回るような大きな成長率を示しているということです。十八世紀、十九世紀のいわゆる「離陸過程」における北側の成長率は多くの国で三%程度でした。五%を超えるような成長率を示したのは第二次大戦後のことです。産業革命の行なわれたイギリスもそうでしたし、明治以降目ざましい経済成長を遂げたといわれている日本でもそうだったのです。歴史的な経験からいえば、五%を超えるような大きな成長率というのは、むしろ第二次大戦後の例外的なことです。ですから、現在南北間に格差があるのは確かですけれども、南側全体として五・六%（前述のように一人当たりでは三・一%）という成長率をどう評価するかという問題になると、大きな歴史的な過程の中で考えると、これまで先進国が経験したことのないような非常に高い成長率だといえるわけです。

次に重要な事実、もし、こういう高度成長が続いていくと仮定したら、いったいどうなるかということです。五%の成長率が幾何級数的に続いていくと仮定すると、十四年間で倍増し、百年後にはいまの水準の百三十倍になります。人口増加が二・五%の率で続くとすると、人口は二十八年間で倍増し、百年後には十一・八倍に達します。現在

の世界の人口は三十六億ぐらいですから、百年後には四百億ぐらいになる計算です。GNPの規模はとてつもない数字になってしまふ。

こういふかたちで永遠に発展が続くのかどうか。その点、ローマ・クラブは「宇宙船地球号はもう限界に達している。北側は一九七五年の水準で発展をやめてしまおう。夫婦は子供を二人以上もたないようしたらどうか」という問題提起をしているわけです。南北格差の是正、GNPの成長が望ましいとしても、そういう基本認識はやはり必要ではないかと思えます。

もちろん、南全体の成長率が五・六%と高いといっても、地域別、国別には非常にバラつきがあります。先進国に近しいような国もあれば、一方には一人当たり国民所得が百ドルとか五十ドル以下の国もある。これからみなさんが行って活躍される国の状況が悲惨であることは確かで、その点を忘れることはできないわけですけれども、大きな意味で発展の問題を考え直してみることも必要ではないだろうかと思うわけです。

さらにもう一つの重要な点は、これにもみなさん方は反発されるかもしれませんが、絶対的な意味の格差と相対的な意味の格差の問題です。

これまでは絶対的な基準によって南北問題が論議されてきました。たとえば一人当たり国民所得を三百ドルとか五百ドルにしようとかたちで絶対的なレベルで問題にしてみました。あるいは、経済発展の過程は、いったん離陸するとあとは自動的、自立的に行なわれる。その自立的な過程になることをもって発展と考えようというふうなかたちで、なんらかの絶対的な基準で南北問題を処理しようとしてきたわけです。つまり、南北問題の絶対的な格差は、国民所得が一人当たり三百ドルに達したら解決するとか、あるいは経済協力は、その国の経済発展を自立的な過程に

到達させるのが目的であるというふうに考えてきました。

けれども、一九七〇年代になると、時間的、空間的な意味での格差が存在すれば、かりに絶対的な基準には到達しても南北問題は永続するのではないかという考え方が出てきました。たとえば、発展途上国の一人当たり国民所得が五百ドルに達したとしても、先進国が三千ドルであれば相対的な格差の問題は残ります。また、技術的にある過程に到達しても、さらにもっと技術的に成長することが必要であるというふうに、相対的な意味での格差の問題は残る。みなさんが考える場合でも、絶対的な基準だけでは片づかない問題があると思います。

と同時に、いままで、一人当たり国民所得が三百ドルとか、GNP成長率が五〇とか、統計的な、あるいは計量的なデータでお話をしてきましたが、それらの数字が実際にどれだけの意味を持つのかという問題もあります。それは二つの疑問が生じるわけです。

一つは、第一次的な設計としては、確かにそういう統計的な資料に頼らざるをえないわけですが、その資料あるいは数値そのものに疑問があるということです。その数字が絶対的に信頼しうるものかどうか、そのデータはどういうかたちで収集されたものか、などが問題になってきます。

二つめは、たとえ現在の手法では、信頼するに値するような数値、資料がとりあげられたとしても、それがただちに正しい発展とか、あるいはみなさんが目指す正しい目標としての意味を持つのかどうかという問題です。

一九六八年に私がイギリスの会議に出た時の経験ですが、アフリカのある国の参加者に「いったい、あなたの国では、どうやって人口統計を作っているのか」と聞いてみたところ、彼は「牛の輸出統計というのがある。牛を一頭飼育し、これを輸出するのに、何人ぐらいの人手がかかる。だから、その牛の輸出統計から人口推定をやっているのだ」

と書いていました。それが事実かどうか、私は確かめてはみませんでしたが、そういうこともありうるわけです。日本なんかでは国勢調査をやりますけれども、そういうことのできないところでは、航空写真で家の数を調べて、ここには家が何軒あり、一軒の家はだいたい何人構成だから、人口何人と推定することをやる。あるいは国内に民族対立があるような場合には、水増しが行なわれたりするわけです。

GNPの統計だってそうです。家事労働は国民総生産の中にははまらない。発展途上国ではクリーニングなんか全部自分の手でやり、バンも自分の家で作るから統計にははいつてこない。ところが先進国ではクリーニングは洗濯屋がやり、バンはバン屋が作るから、統計にはいつてきます。そういう事例はいくらでもありうるわけです。統計的なデータをいかにどのへんまで信頼するかが問題になるわけです。

だからといって「統計は信頼できない」と、これを使うことをやめてしまうことができるかどうか。そういう場合に何を指標とすべきか。やはり、現在のところ統計というのは最もシンプルで、かつフォーマルな手段であり、これにかわるべきものはないでしょう。万全だとは思いませんが、次善的には使えるということだと思います。そのデータをできるだけ信頼のおけるものにするように努力する以外ないと思います。

次に、そういう資料や数値が、正しい経済発展の目標となりうるのかどうかという点についてお話ししてみたいと思います。「くたばれGNP」といわれるように、この統計では人びとの幸福度なり福祉なりというものを捉えることができませんので、人びとの幸福水準を実質的に反映するような指標にかえてはどうかということも提案されているわけです。しかしそれについてはまだ検討の段階ですから、現在のところはセカンド・ベスト的に、それに頼らざるをえないのです。で、それに関連して、もう一つだけ申し上げておきたいことがあります。それは第二次大戦後の

約三十年を経て、南北問題は第二世代に到達したのではなからうかという意識が強くなってきていることです。

私は昨年九月、イギリスのケンブリッジ大学でおこなわれた開発問題の会議に出席しました。この会議は一年おきに開催されている非常に重要な国際会議で、世界の約三十カ国から百二十人くらいの学者や政府の政策担当者が集まります。その会議で考えたことは、南北問題というのはシンブルな問題ではなく、いまや第二世代を迎えて、ますます複雑な問題をかかえつつあるということでした。これまでは、発展途上国のGNPをできるだけ高めるというかたちで、狭い意味での経済発展が第一義的に考えられてきたわけですが、そういうマクロ的な発展指標や発展成果だけが問われているのかという反省期にはいつているわけです。そういうものが、はたして、発展途上国の国民全体、一般大衆の幸福とか福祉に結びつくかどうかという点が問題になってきているのです。

われわれはマクロ的なベースで発展を目標として努力してきましたが、過去二十五年の経験から、それが一般大衆の福祉に結びついていたかどうかという点になると、どうも食い違いや矛盾があるわけです。一つの目標として発展を考えるのはいいけれども、それがすべてではない。もう一つ社会的な正義公正ということも目標にしなければいけない。そういう二本立てでないと、たとえマクロ的には発展しても、一般大衆の相対的な幸福度というのはむしろ逆に小さくなっているのだということが、この会議の中心テーマとなりました。

たとえば東南アジアの優等生といわれる韓国のケースをみますと、最近のGNP成長率は一〇%を超え、輸出成長率も三〇%を超えるというように、実に目ざましい経済成長が行なわれています。ですから優等生として評価される。ところが、一般大衆の失業率も失業者数も増大している。所得分配をみても、一握りの人びとに富が集中し、不平等化が進んでいる。しかも、急速な経済成長とインフレが並行するかたちで進行しているのです。

このあたりを考えてみますと、みなさんが発展途上国に行っている努力される場合も、いままでのように単純な常識で「GNP成長率だけを追っかければいいんだ」というふうに考えてしまうわけにはいけないと思うのです。そういう意味では、発展の意義自体にも問題が残ります。

(二)

さて、いったい、発展途上国の発展を阻害する要因は何かという点について、ここで結論だけをいっておきますと、一義的には、たとえば資本が不足しているというようなかたちでの欠如論があります。何かの要因が欠けている、だから、その欠如している要因をつけ加えれば発展するという理論ですが、最近では、いろいろな要因が複雑にからみあっているのだという結束理論というのが中心になってきています。いろいろな発展阻害要因がからみあっているのだ、そういうからみあいのもとで発展を考えていかなければならないというものです。

発展途上国といっても、いろいろ雑多な国を含んでおりまして、国によっても重要性をもつ要因はそれぞれ違ってくるのだといえますが、従来の発展阻害要因の分析の幾つかの代表的なケースをあげてみましょう。そのまず第一は地理的決定論ないしは自然条件を重視する考え方です。

日本あるいは先進国と、南側の熱帯地域にある発展途上諸国との間には、自然条件の面で著しい違いがあつて、それが決定的なものではないにしても、やはり重要な要素になっているというわけです。たとえば、日本では夏、自動車で走る場合、暑いから窓を開けようというふうに考えますが、インドでは窓を閉めて走ります。外の空気のほうが内の空気よりも暑くなっているからです。また、日本であれば、夏、人が座った席に争って座るなんてことはしませ

んけれども、インドでは人が座った席に争って座ろうとします。気温が体温より高いので、人が座っている席は涼しく気がいいのです。インドでは自動車のボンネットで日玉焼きが実際に焼けるんですよ。

こういう状況ですから、インドなんかでは日中は過酷な屋外労働をすることはできません。日中は寝て暮らしますが、それはその人びとが怠惰であるというより、地理的条件、自然的条件によるのだというほうが適切でしょう。そういう面が多分にありうるわけです。

ですから、北側になぜ先進国が多いかという点、最低生活をする場合、北側では怠けていたら、それこそ風邪をひいたり、飢え死にしてみましょう。そういう状況ですから、むしろ積極的に自然に働きかけて、常に積極的に対応しようとする気持を持ったのだといわれているわけです。

しかし、自然的条件がすべてを決定するという点には疑問があります。たとえば地理的決定論では、アジアではモンスーンが米作という生産様式を決定し、それが自然順応的な受動的な生活態度を決めるといいます。けれども、そのアジアの中のモンスーン地域の末端に位置する日本なんかのことを考えてみても、そうなのでしょうか。あるいは、西洋では小麦生産であるがゆえに生活態度が能動的になり、機械化されるといっても、やはり小麦を作っている南米ではどうかとなると、必ずしもそれが決定的な要因であるとはいえないわけです。ですから、むしろ発展段階が遅れているから自然的条件に左右されがちなのだという、逆の意見も出てくるのです。

しかし、いずれにしてもみなさん方には、こういう地理的、自然的な条件の差をじゃうぶんに考慮しておいてほしいと思います。自然的な条件が豊かで、最低限の生活を維持するには、そうあくせく働かなくてもいいという状況の国が一方にはあるし、日本のように四季の変化が適当に頭脳なり生活なりに対して刺激となっている国と違って、

年中盤いところでは、いわゆる南洋ボケ的な状況になっているところもあるわけですから、そういう基本的な条件の差を考えておくことは必要だと思います。

これと関連して、人種論や社会的な悲観論というものも、一つの意義を持ってきました。第二次大戦前は社会学的な悲観論が中心となっていました。戦後は逆に経済学的な楽観論が重視されるようになって、そういう悲観論や人種論は批判視されていますが、人種論の内容は、アングロサクソン民族の優位性とか、白人の有色人種に対する優位性を説いているわけです。もちろん、人類学や生理学の進歩によって、そういう意味では民族間に違いはないのだ、植民地支配を受けていたから現在は劣っているかもしれないが、基本的にはそういう差はないのだということに現在ではなっておりますが、みなさんが実際に現地へ行かれると、そういうことを信じたくなるような状況がないとはいえないと思います。もっとも、問題のポイントはむしろ、なぜそういう差異が生み出されてきたのかというところにあるわけです。

社会学的な悲観論というのは、発展途上国の人びとには能動的、積極的な態度が欠如していて、諦観的、受動的な態度が著しい、したがって、発展はかなり困難であるとするものです。これは社会学者たちが発展途上国の人びとの価値観や行動原理を現地で調べて唱えたもので、こういう考え方が戦前はずっと続いていたわけです。

これに対し戦後は最初、欠如論がとられました。つまり、発展途上国で不足しているのは資本だ、だから資本さえ投入してやれば発展しうるのだ、という楽観論です。なぜそういう楽観論が出てきたかといえますと、一つは社会学と経済学との前提条件の違いにあるわけです。経済学では、発展途上国の人びともすべて経済人として経済的な行動をとるのだという前提のもとで考えているのです。その前提に立って、開発とか発展とかが考えられるとい

うことになりました。

しかし一九六〇年代にはいると、その楽観論が反省期にはいり、基本的条件の差異が再び強調されるようになっていくわけです。

そこで問題のポイントは、なぜ価値観とか行動様式に差異が出てきたのかということですが、現在では、植民地支配ないし従属的な関係が多く持たれてきたからだということがいわれています。つまり多くの人びとによって植民地的要因が支持されています。それですべてが説明できるかというと、私はやはり問題が残ると思います。けれども、かなり重要な要素ではないかと思っております。

現在は常識的に結束理論がとられているということは前にも申し上げましたが、そこでは多くの人びとによって人間という主体と、環境ないし自然という客体との相互作用として発展とか経済構造を考え、基本的にはそのからみあい問題になるという考え方がとられているわけです。ここでとくに重要なのは、やはり人間が支配的に自然に働きかけて、これを改善するという意志と能力あるいは基本的価値観を持ちうるかどうか、実は発展の基本ではないかということですが。

結局、人間と環境を区別し、人間が環境、自然に働きかける過程として、経済行動がある。そういう働きかけが、どのようなかたちで可能なのか、あるいは、それを実現するためにはどうしたらいいのかということの問題にするわけです。最近では、うまく発展しえない南側の国々の場合、人間的な要素あるいは人的資源がとくに重要であるというふうに考えられてきています。ですから結束理論というのは、人間が自然に能動的に働きかけ、その自然をどのように変えていくか、そういうからみあいをどのようなかたちで実現させていくか、あるいは、その条件をどう考えた

らしいのかという方向に向かっていると考えられるわけです。

そうなりますと、いったい発展途上国の人たちは、発展への意欲なり発展への欲求を持っているのかどうか問われてきます。一部の学者たちはいまもお社会的な悲観論をもっています。たとえば五月八日の朝日新聞夕刊で、『開発援助の矛盾』という一文を名古屋大学の飯田助教が書いておられます。飯田さんは去年の三月から一年間インドネシアに行っておられた。その経験に立って、開発援助の額をふやせば自立の芽をつむのだというふうに、悲観的な見通しを述べておられます。そして、現地側の意志、能力について、一つの疑問を述べています。そういう考え方も、なお強く存在しているわけです。

(三)

ところで、ここで私が指摘しておきたい点は、冒頭でも触れましたように、南側の国は、われわれの価値基準でいうと確かに貧しい。たとえばわれわれの生活状況と比べてみますと、耐久消費財も何もないというかたちで貧しい。だから、不幸なのだというような考え方をとりがちですが、幸せとか幸福感というのは必ずしも物質的な物だけによるのではなく、その人びとの価値意識によって変わってくる可能性が強いのだということです。

そして、先進的な生活様式が発展途上国に持ち込まれ、あるいはデモンストレーションされた段階では、どの程度不満だったかということには問題が残ると思うんです。しかし、とにかく現在の状況では発展途上国というのも世界的な経済環境の中で存在していて、世界的なネットワークの中にすでに組み込まれてしまっている。先進国の物質的な繁栄もデモンストレーションされてしまった。彼らの中にもいわゆる期待増大革命や欲望がすでに作り出されて

しまっている。先進国によって作り出されているのかもしれませんが、現状に対する不満があり、先進国の物質的な繁栄に対する期待というものも、すでに増大しているわけです。

そういうふうと考えてみますと、作り出された欲望の大きさに対して、それが満足させられる程度は小さい。すでにそういう状況があるわけですから、相手には相手の価値観があるから、それを生かしておけばよいではないかといったところで、問題の解決にはなりません。私は世界経済のネットワークの中に組み込まれている発展途上国の人びとは、発展への意欲、欲求というものは基本的に持っているのではないかと思えます。

例をあげればいろいろあります。たとえばタイに行っても、バンコクのような大都市でなく、南部のへんびなどころへ行っても、市場で目につくのは日本製のトランジスタラジオです。もっと奥地にはいってみても、ほとんどの家にトランジスタラジオはある。そして一日中鳴っています。つまり、トランジスタラジオに対する欲望にすでに目ざめているといえます。そして人びとは換金作物の生産に転換しています。ですから人びとはある程度すでに経済人として行動するようになっています。

つまり、発展途上国はすでに期待増大革命の中にはいり込んでいて、しかも人びとは経済人としてそれに反応しているという状況がかなり作り出されているわけです。ですから、そういう状況の中で、人間の環境に対する主体的な行動をうまくとり入れ、あるいは、そういう期待を満足させるような方向にどうやって持っていったらよいかということを考えざるをえないと思うわけです。

したがって私は、経済援助なり、みなさんが参加される技術協力には非常に重要な意義があると考えます。もちろん、先進国的な価値観を押しつけるというのは問題でしょうけれども、しかし、本質をつかんだうえでなら、積極的

な役割を演ずべき状況はあると思います。ただ、その場合、発展途上国にすでに期待増大革命が起こっており、経済的發展への反応が起こっているといっても、それがすべて先進国と同じようなかたちで起こっているかとなると、そうはいえないことをお断わりしておきましょう。

それから、さきほど「人口増加、人口爆発」についての一つの見解を申し上げましたが、それについても一つ、とくに次の点をいっておきたいと思います。

日本人の中には「ほかに何も娯楽がないから、子供ばかり生むのだろう」なんていい方をしますが、それはやはり先進国的な見方です。そういう要素がまったくないとはいえませんが、実際に現地調査をしてみますと、たとえばインドの中部高原では、彼らにとって子供を持つということは生活保証の手段なんです。そこではだいたい大人になると働きません。十歳ぐらいの子供から青年がいわゆるけんめい働いているわけです。親たちにとって子供は生活保障の手段としてふやせばふやすほど収入が得られるのです。そういう社会体制だからこそ、子供をどんどん育てようとしているわけです。

ですから、そういうものを変革しなければ、ただ産児制限をしるといっても、それは不可能です。また、大人になっても働くという生活習慣が作り出されなければならないと考えます。

発展途上国というのは多くの場合、今の人口問題に代表されますように、いわゆる「合成の誤謬」という事実が存在します。たとえばいまのインドの例ですと、各個人にとっては子供をふやすということは、生活保証につながるという点で合理的ですが、国全体で考えてみるとマイナスに作用する。各個人にとっては合理的なことがら国全体にとっては必ずしも合理的だとはいえない。「合成の誤謬」的なことがかなりあるわけです。

もっとみなさんにわかりやすい例をあげてみますと、ちょっと前までのミカンの生産のように、各農家はミカンを増産して収入をふやす。ところが国全体としてみると、その結果価格が大幅に下落して、収入が減ってしまうという状況があるわけです。これが経済学でいう「合成の誤謬」ということで、各人にとっては正しいことでも、それを全部たし合わせてみると、必ずしも正しくならないというわけです。さきほどのインドの農村社会のように、「合成の誤謬」がその社会の成長を阻害するようなこともあります。

逆に「分散の誤謬」というものもあります。マクロ的に国民経済が成長しても、それが必ずしも各人の幸福につながるとはいえないようなケースもあるわけですが、とにかくみなさんは現地に行かれましたら、それぞれの部所で、それぞれ目標に向かって努力される際に、それが全体的に合成されたらどうなるかといった判断を常に失わないようにしていただきたいと思えます。そして「合成の誤謬」を是正するには、ミクロとマクロを合わせた、全体としての総合的な政策を進めていかななくてはならないと思うわけです。協力隊の場合にも、全体のつながりの中で、各個人がそれぞれ自分の持ち味を生かしていくという方向で考えざるをえないのではないかと思います。

(四)

次に、「援助無用論」をめぐる論議をお話してみましょう。

戦後は、経済的な楽観論に立って、発展途上国に不足しているのは資本だ、それを与えれば問題は解決するのだというようなかたちで、援助がおこなわれてきた面があります。それがどういう結果を生んできたでしょうか。まずマクロ的な評価を見ましょう。マクロ的には、残念ながら、援助が有効であったというデータより、どちらかというと

無効だったとか、有害だったというデータのほうが多いのです。成長と援助とを相関させて考えてみると、その間に相関関係はないのです。むしろ逆に、援助を多く与えられた国のほうが、成長率は低かったことになるのです。なぜ、そういう数値が出ているのかという問題は、実は援助とか経済協力とは何か？ という問い直しの問題となっ
てきます。

援助とか協力というのは、本来矛盾した目的をもっているわけです。あるいは本来矛盾した存在であるといってもいいと思います。すなわち、なぜ援助するかというと、援助をなくすためです。一時的に援助することによって、発展途上国を自立的な発展の軌道に乗せようということです。ですから援助を受けない優等生のほうが発展するのは当然です。ということは、マクロ的にそういう結果がでて、みなさん方はそれについてあまり深刻に考える必要はないと思うわけです。ただ、援助というのは、一日も早く援助する必要がなくなるようにするためにやっているのだ、という援助の基本的な性格を理解しておくことは必要ではないかと思えます。

最近、P・T・パワーという人が援助無用論を強く主張していますが、パワーがいうのは、援助をすると、援助にたよって生きていこうとする、ポーバリゼーションを生むということです。ポーバリゼーションという言葉はみなさんには耳慣れない言葉でしょうが、非常に悪い言葉だと思います。それは「被救済民にすること」という意味ですが、援助はそういう意識を作り出すとパワーはいうわけです。

パワーは発展の基本的な要因として民衆の経済的な資質と能力、あるいは価値観と目的、また、しばしばそういう資質や価値観を反映する社会的制度的なものをあげます。つまり、そういう要因が物質的な進歩の主要な決定因だといっています。ですから、一般大衆がそういう経済的な要因に反応し、能動的にそれに働きかけていくという資

質や態度、あるいは価値観や目的を持つことが必要で、援助というのはそういう基本的な発展要因を育てるよりも、むしろそれを阻害するかたちで作用してきたのだ、とパウアーは強調しているのです。

この考え方にも一理あります。それに経済援助の目的なり理念なりを考えた場合、少なくともいままでの日本あるいは先進国のそれが、相手国を自立的な発展へ向かわせようとする本来の目的にかなったものであったかどうか、という点も非常に重要な問題となるわけです。

私は一昨年タイへ経済協力の調査に行って、政府の高官といっしょにタイの副首相に会いました。その時、私たちが「日本の経済援助について、どう考えているか？」といいますと、副首相は、突然立ち上がって「日本が援助しているとは何事だ」といった。「どうしてだ」と聞きますと、援助というのは、本来自分たちが自立的に発展できるようにするためのものではないか。ところが、日本の経済援助というのは日本の輸出を増加させる手段にすぎない。日本が自分の成長のための手段としてやっているにすぎないではないか。そんなものは援助ではない、というようなことをいわれました。

で、本来の援助というのは、いままで日本がやってきたような経済援助ではなくて、みなさんがこれから行かれて日々努力される、そういう技術協力の方向にならざるをえないのかもしれない。とにかく、パウアーのいうことは一理あるわけで、経済協力の目的、理念は、発展途上国の自立的発展の基本的要因を育てるかたちのものでなければならぬと思います。

援助無用論、有害論というのは、私の印象では、いままでの援助の方向なり、その手段、内容というのがいけないというのであって、援助が本来の正しい方向で行なわれ、発展要因を育てる方向に向かえば、これは非常に有効では

ないかと考えるわけです。「援助無用」というのは、非常にセンセーショナルではありますが、従来の方式なりに対して強く反省を求めているのだというふうに受け止めるべきだと思うのです。

さきほどの発展の基本要因との関連でいいますと、現在の国際的な世論というのは、経済協力は発展にとって非常に重要な要素ではあるが、そのための必要条件でもなければ十分条件でもないのだということになってきているのです。したがって、援助無用論というのは、従来のような私たちの援助に反省をもち、援助の本来意味するところを理解させるのに役立ったというふうに評価してよいのではなからうかと思えます。

(五)

では、日本はこれから、どういうかたちで援助していったらよいか。そういうことを考える前提として、「イメーシ・ギャップ」とか「相互理解の欠如」の問題に若干触れてみたいと思えます。

まず第一に、日本人が発展途上国に対してアプローチしていく場合、とくにアジアにアプローチしていく場合、重要だと思われる点は何かといいますと、明治以降、日本人がいっしょけんめい努力して急速に経済発展した線は、西欧化すなわち「欧米に学べ」という線だったということ。つまり、これは従来 of 伝統的な生活様式、生産様式を捨てて工業化し、富国強兵しようというかたちのものであったわけでありませう。伝統的なアジア的なものを求めたわけではなくて、脱アジア的な方向を狙ったのです。それで日本は現在のようない工業国、経済大國になった。ところがそういう状況になって、アジアに向かう場合はどうかというと、岡倉天心以来の「アジアは一つ」なんです。

本来は、そういう脱アジア的な工業化が「アジアは一つである」という考え方にどんな影響を与えるかを反省すべ

きはずであるのに、日本人というのは非常に巧妙ですから「二つの顔」をうまく使い分けてしまって、その矛盾に気づかないのです。それが日本の大國意識として非難されるものにもなるわけです。

少なくともいままでの日本人は、欧米に対しては非常に卑下した弱々しい顔を見せながら、一方のアジアに対しては優越感を持っていた。そういう意識を反省するところから、みなさんの仕事も考え直してみなければならぬと思うわけです。

第二に、日本を相手側がどう評価しているかという問題があります。「太った日本人」という本がありますけれども、そういうものを見ても、日本はアジア、アフリカでは全然といっていくくらい知られていません。たとえばアジアで「日本は独立国かどうか？」という調査をやってみましても、独立国だと答える人は半分くらいしかいない。一九七〇年でしたか、タイの大学生を対象に「日本は社会主義圏に属する国か資本主義圏の国か？」を調査した結果でも、半分くらいの人は「日本は社会主義圏に属する国だ」と答えたというんです。それから日本がいか知られていないか、あるいは誤解されているかがわかるでしょう。

平和憲法九条で日本が戦争放棄しているとか、核戦力は持たないなどということになると、ほとんどまったく知られていないのが実情です。逆に、日本人が相手国のことを知っているかという点、それも同じようにまったく知っていないわけですし、となると相互理解の欠如ということを前提にして考えていかざるをえないのではないのでしょうか。

第三は「日本の対外接触のゆがみ」ということです。少なくともいままでのところ、日本と発展途上国との関係は経済的接触だけです。とくに生産物の売り込み先、あるいは投資対象としての接触しかしていません。ですから発展途上国の人びとは日本に対して「ピカピカの自動車」とか「便利な冷蔵庫」というようなイメージはあるけれども、

日本人の精神構造なり、日本の文化なりについてはまったくイメージがないわけです。

そういう意味では、もっと地道な文化的接触、あるいは人的交流その他が必要でしょう。それによって、日本の対外接触のゆがみを是正していかなければならないと思うのです。

第四に「エスカレーション命題」ということがあります。ここでは、いかに日本が知られていないかということと同時に、いかに日本が誤解されているかということを示し上げた方がいいわけです。

そのような意味で、一九七〇年にインドネシアに行つて、インドネシアの外相はじめ局長クラスの人と話をした時のことを紹介しておきましょう。

「日本は経済大国になった。今度は政治大国を志向し、そして最終的に軍事大国になるのではないか」こういう一つのエスカレーション命題というのが、かつての大東亜共栄圏構想とか戦争の暗いイメージをもつ人びとの間に信じられている。そして私どもに「そういうエスカレーション命題を信じさせるような具体的な動きがある」と強くいいます。日本の政財界人の発言をあげたり三島由紀夫の事件をあげて、恐怖感を持って日本を見ているわけです。

ですから「内から見る日本」と「外から見る日本」とは違っているのだということを、みなさんにもよく認識していただいてそういう相手側の気持をじゅうぶんに考慮しながら、現地でいろいろ考えていただくことが必要ではないかと思う思います。

(六)

次に「発展戦略の再検討」、「日本の役割・あり方」の問題ですが、さきほどいきましたように、現在は戦後二十

五年の発展経過を経て「第二世代」にはいつているわけです。援助無用論とか援助効果についてのいろいろな批判が出る。同時に、経済的発展についての理論も欠如理論から結束理論へと移行しております。そして経済発展の戦略論からいいますと、実は非常に大きなサイクルを描いているのです。奇妙なことに八年から十年くらいのサイクルで行っているのです。はじめは伝統的な正統派であったのが、新正統派に移行し、それから再び伝統的な正統派の再評価が行なわれて、現在はそれに対するコメントがなされている。

伝統的なかたちとしては、かつての先進国で起こったような市場革命を起こすことによって発展が考えられるとされたわけですが、新正統派では結束理論的に計画経済で工業化をやっていこうと考えられました。最近では、いままでの戦略はうまくいかなかったという反省になって、もっと地に着いた、一般大衆を動員できるような戦略が必要だとされているわけです。したがって、農業はじめ一次産品の生産を重視し、あるいはグリーン・レボリューションをやって農村社会を開発し、失業を解消する。そういう地道な方向が必要ではないだろうかといわれるようになったのです。

それと同時に、最近では、「対外依存」と「自力更生」という二本の規準が発展途上諸国でとられるようになってきます。これは非常に重要な点です。

つまり、従来は先進国に依存するという政策をとって発展を考えてきたけれども、そうなると先進国の支配的な影響を受けがちだ。対外的な依存も必要だけど、最低限度の物は自分で処理できるように考えていこうというわけです。ですから援助するほうも、相手側のそういう自力更生的な考え方にのっとってやっていくことが必要になってくると思います。

もう一つローマ・クラブ的な挑戦、問題提起について話をしておきたいと思います。ローマ・クラブ的な悲観的な予想では、いまのような状況では宇宙船地球号は百年以内に限界に達してしまふ。だから先進国も発展途上国もただ「発展、発展」といついていいのだからというわけです。これは非常に大きな問題ですので、ここで簡単に処理するわけにはまいりません。で、そういう問題提起がなされていることはみなさんにも承知しておいてほしいと思います。

それから、日本と東南アジアとは必ずしも条件が等しくありませんし、十九世紀的な世界と二十世紀的な世界では発展の状況も、その他の状況も違ってきます。非西欧社会の近代化という問題では、日本の近代化、日本の経済発展の経験を非常に重視する見方がありますが、日本の経験がそのまま発展途上国にもあてはまるというような安易な考え方は問題であって、現地のそれぞれの状況等を加味して考えていく必要があるわけです。

世界の中で日本が果たすべき役割は非常に増大しております。特に世界的に悲観的な見通しが強まっている中で、急速に台頭している日本ですから、よけい外向きに活躍していかざるをえないわけですが、さきほど申し上げたような反省のうえに立って、基本的な条件の違いを考慮し、みなさんのような積極的な意欲を生かす方向で地道に積み上げていくというかたちが、是非必要ではないだろうかと思うわけです。

(七)

最後に「人間の原点に立ちかえっての南側へのアプローチの仕方」という大それたかたちで、結論的なことを申し上げるわけですが、ここで特にいいたいことは、いままで申し上げましたように経済的な発展意欲なり能力なりにい

ろいなる問題があり、生活態度なり環境なりに違いがあるというけれども、やはり基本的には同じ人間だという意識が是非必要であるということです。

また、南側をコピーする場合、いまのはやりですと「先進国的な考えを押しつけるのはいかん。相手側を理解しろ」といいますが、それは「自分を捨ててしまえ」ということではないと考えます。

すなわち相互的な価値観を融合し、それを結び合わせていくところに進むべき道があるのだと思うのです。こういうことは原則論として申し上げてもしょうがないのであって、結局みなさんが若々しい意欲を持ち、能力を持って現地へ行かれて、具体的ななかたちで地道に処理される以外にないだろうと思う。人間は共通であって共通ではない。だから、日本的なものと、相手側のものを二つとも認め合ったうえで、その基本的な立場に立ってみなさん方各自がお考えになるのがいいのではなからうかと思うのです。

みなさん方各自が持つ利点と、相手側のそれとを相互に認め合って、いままで申し上げたような基本問題について考え直しながらやっていく必要があるのではないのでしょうか。

繰り返しになりますが、そういう反省のうえに立ち、基本的な条件の違いをじっくりぶんに認識したうえで、みなさん方の積極的な意欲を生かして、地道に積み上げていくことが必要であり、そういうかたちでのみ、日本に対する世界の期待に応えられるのではないかと思います。

“現地” 適応について

中 根 千 枝

(一)

日本青年海外協力隊が発足してから八年以上になりますが、みなさんは、初期のころ開発途上国へ行かれた隊員の方々にくらべるとすでに多くの現地の予備知識をもっておられることでしょう。予備知識を多くもっておればおるほどいいのですが、しかし日本にいて得た知識と実際に現地へ行った場合とは、その間に大きなギャップがあるものです。その時にきょうここで私が話したことを思い出していただければ何かの参考になるうかと思えます。

みなさんがこれから行くところとしておられるところは、いわゆる“開発途上国”と呼ばれる国々です。開発途上国にせよ、先進国と呼ぶ国々にせよ、みなさんが日本の外に、日本と異なる社会の中に身を置くことに、ある意味では共通性があります。

ところが、日本と外国ではどんなところに相違が一番現われるかといいますと、人と人とのつきあい、つまり人との接し方です。暑い国や、あるいは寒い国へ行った時など、気候や衣食住などに関する相違は、とくに神経の細い人でないかぎりさほど問題になりません。たとえば南方へ行きますとトイレのない国が多い。で、はじめはちよつと戸

感いますが、慣れてしまえば「かえって自然でいい……」ということになります。

一方、先進国イギリスへ行きますと、民家では、トイレのあと水で手を洗う習慣がない。日本人は手を洗わないと気持ち悪くて困ったりする。しかし、こうした気候、習慣の違いなどに慣れることはそれほど努力を必要としません。人間、若いころは、そうしたことにすぐに順応してしまうものです。こうしたことにがまんならなくて神経質になるようだったら、開発途上国で、海外で働く資格はないでしょう。

ところが、こと人間関係になるとそうはいかない。不可思議なことが多く出てきます。第一、相手が怒っているのか喜んでいるのかすらわかりにくいことがあります。日本人と同じ人種、すなわち黄色人種といわれる東南アジアなどでは、割合に表情のあらわし方が日本人に似てまして、はずかしい時には笑ったり、うれしい時でもそんなに大騒ぎしないので、ある程度想像ができます。しかしインド以南になると表情がひじょうに固い。こちらがニヤッと笑ったりすると「どうして笑ったのだ？」と聞いてきます。みなさんの中には、東南アジアだけでなくインド以西のアフリカや、とくにモロッコへ行かれる方もありますが、そうしたところでは表情の理解がたいへん違ってきます。

たとえば、人類学者が東南アジア社会を調査する場合、アメリカ人学者がやるよりも日本人がしたほうがずっと時間が早い。つまり同じモンゴロイド系の日本人が調査したほうが、彼らからの反応を求めるために、逐次説明しなくてもわかるわけです。しかしインド以西へ行きますと現地の人の心の中に食い込んでからの調査になるので時間もかかってきます。

ところが、みなさんのように現地に二年も滞在することになりますと、黒い人であろうが、白い人であろうが、黄色い人であろうが、ともかく人種的なことはそれほど問題でなくなってきました。ではそこで、どんなことが問題にな

ってくるかといえますと、社会関係、つまり社会的な問題がみなさんの前に大きく立ちはだかってくると思います。どんな社会でも人間関係がひじょうに大切で、特にそうした社会の中で仕事をするとすると、どうしても現地の人との協力が必要になってきます。それだけに、協力を受ける時にどんな人を信じていいのか、どういふ人を信頼しているのかということが重要になってきます。そこで、人間関係にはいろいろな種類がありますが、それについて述べてみましょう。

人間関係にはまず第一に血縁関係があり、それから友人関係、仕事関係、隣人関係があります。そして、それらはいったいこの社会とどんな関係があるのか、どう機能しているのか、その人はどんな関係にある人を一番信頼しているのか、などと探っていくこととなります。ある社会では、何よりも血縁関係を優先させるところがあるし、別なところでは隣人関係を優先させる場合がある。日本の田舎では「遠い親戚よりも近くの他人」といっています。遠くにいる親類の人よりも隣にいる人のほうが自分の生活上、もつとも大切であるという意味です。しかしある社会では、助けを求める時に隣人を少しも頼らないで、遠くにいる親兄弟、つまり血縁の助けを求めることもあります。

次に仕事の関係があります。仕事を通じてできた仲間の関係には、日本でいうところの親分子分の関係があります。ともかく、このように社会によっていろいろな関係がある。そして、こうした中でいろいろな仕事をする場合は、相手を信頼したりする相互依存の関係が必要になってきます。

ところが、みなさんが海外へ行って利用しなければならぬ関係は、第一の血縁はだめです。みなさんには現地との血縁関係は全然ないのですから。血縁関係はみなさんと現地の人との間では使えない。となると、もつとも効力のあるものは友人関係、仕事関係、隣人関係ということになります。特に、その中でも友人関係に大きく依存しなければ

ばならないだろうと思います。血縁、仕事、隣人関係は常に条件があつてできる関係ですが、友人関係はお互いに好きになつてつきあう関係ですので前提を必要としない。つまり、お互いに「見どころがある」「好感がもてる」時に設定される関係です。そして、この友人関係が設定されるためにはパーソナリティーのファクター、その人が持つてゐる「人となり」が大事になつてきます。

みなさんが現地へ行つて設定しなければならぬのは、この友人関係です。しかし友人関係はそんなに簡単にできるものではない。こちらが相手の友人にならうと思つていても、相手がイヤな場合もあります。恋愛関係の片想いのような友人関係だつてありうる。本当に友人関係が機能するためには、相手方が友人として認め合うようにならなければならぬわけですが、そのためには、みなさんの持ち味や人となり、前面に押し出すことがもつとも大事です。たとえば、新しい事態に遭遇した時、新しいところへ行つた時など、「自分をよく思われよう」、「自分は開発のために仕事をしに来たのだ」というポーズをとるよりも、まず大事なことは自分を自然に見せることです。自分をよく見せよう、自分を偉く見せようとする努力は、かえつて友人関係設定のために邪魔になることが多い。

ですから、現地へ行かれたら、張りつめた気持ちにならないで、むしろ自然に、みなさん自身の姿を相手に知らせることが何よりも大切です。ポーズを持った人は相手に信頼感をあたえるものではありません。人間関係設定でもつとも大事なことは相手に信頼されるということで、決して、相手に信頼を与えるために「自分は信頼できる人間である」ということではない。いつも自然で、ポーズをとらずに、自分の弱点も相手の前にさらすことを恐れないことだろうと思います。

とかく、人間の魅力は弱点がなければ出てこないものです。あまりに完璧で立派すぎる人は、道で会つた時など

「ちょっとコーヒーを飲まない？」といえるものではない。だから、そのような完璧な人よりもどこかに弱点があったほうが人間関係が設定しやすいので、みなさんも自分を素直に出したほうがいいのではないのでしょうか。

それに、現地へ行って少し疲れた時や暑くてやり切れない時には、あまりがまんしないほうがいい。日本には忍耐やがまんを高く評価する伝統がある。で、日本人が海外へ行った時は、老いも若きも、あまりにも働きすぎます。インドへ行ったある技術者たちは、当時インド人たちは一日五時間しか働いていなかったのですが、日本国内と同じように一日八時間も働き、大いに生産をあげていた。しかし、その人たち、帰国する間近になつて病気になる入院するはめになつたのですよ。

そんな具合に、あまりに張り切りすぎると、熱帯では特にあとの影響が大きくなる。したがつて常に自分のコンディションに気をつけること。たとえ相手から要求があつても、それに対して、「どうしても要求を受けて、寝ないでいっしょうけんめいやらねば」と考えないで、あまりにつらいことであつたら、「きょうは非常に疲れているので、あす元気な時にやりましょう」とすなおにいつて、絶えず自分のコンディションをコントロールすることです。

(二)

みなさんは、ある意味で、人類学者と同じです。みなさんが旅行者や探検家と違うところは、人類学者と同じく、そこへ旅行するのではなく、そこで仕事をしなくてはならないということです。そして、仕事をするためには常にコンディションを保っていなければならぬ。任期が二年とすれば、その二年間、病気をしないで健康で仕事が行うことができることが第一の前提条件になります。いろいろと問題を処理するとき、まず長続きさせること、そして長続きさせる

ためには、仕事ができる健康状態と心理状態に自分を置いておく必要があります。

仕事は張り切ったからよけいにたくさんできるとか、少し怠けたからだめになった、というものではありません。二年といえは短いようでも長い。その間にはいろいろな波もあります。その波をうまく乗り越えてやっていくためには、常にコンディションをよくしておくことが大事です。同時に、相手からいろいろな要求があったり、みなさんが考えも及ばないようなことを頼んだりすることがあると思いますが、気が進まない時は、はっきりと「ノー」というべきです。

日本人はこんな場合、どうしても引き受けなければならぬと考える無理をします。だいたい日本人は、人に何かを頼む時は、九〇%ぐらいはこちらのいう通りにやってくれるだろう、という期待感がなければものを頼んだりしない。しかし、外国では、その期待感が、たとえ一%しかない場合でも頼んだりします。だから、相手がみなさんにものを頼んだ時は、多くの場合、彼らの期待感は一%しかないのだということを念頭に入れておくべきですし、そんな時は日本の習慣に従ってはいけません。たとえ相手の要求を拒否してもそんなに怒る民族はいません。日本では拒否したりすると気まずい関係になったりしますが。

特にインド以西になると、「ノー」が友情を破壊するようなことはめったにありません。「ああ、やつぱりだめだった」という程度です。「ちょっと打診してみよう」という程度の気持で要求してきますから、こちらもその程度に軽く受けとったほうがいいでしょう。

それから反対に、日本人よりもっと感情の柔らかい国の人びとがいます。たとえば東南アジアの人たち、タイ、マレーシア、インドネシア、ビルマ、ラオスなどの人たちは心の平静を維持することを何よりも高く評価しています。

彼らは心の平静を保つための言葉を持っているほどです。

そうした国ではみなさんも常に心を安定させるよう心掛けてめったに怒ってはいけな。東南アジアではどこでもそうですが、「怒り」は怒った人にもっとも大きなマイナスとなります。ですから、現地ではできるだけ怒らないように。それに、熱帯のような暑い国で怒ったりすると息苦しくもなる。日本でも寒い時に怒ってもさほどでないことが、暑い時に怒ると疲れるものです。

ところで、怒りはどんな心理状態からきているか分析してみますと、自分の期待、つまり自分の相手はこんなふうだろうという期待感から発しています。相手がどう出てきても、この幅の中に収まるだろうと期待している。その期待感が破られ、相手が逆の反応を示した場合、「怒り」という現象があらわれるわけです。ですから、相手を評価する場合、相手を把握する場合、当方の期待の幅が狭ければ狭いほど怒る度合が多くなる。そのため、こんなこともあるだろうと、期待の幅をひじょうに広く持つ必要があります。

それから、よく怒る人は期待の幅の狭いことのほかに、期待を高い所に置きすぎる傾向が強い。日本の社会でもそうですが、ひじょうに高い所に期待の数値を置くと怒りがよく出てきますので、相手に対する水準を低くすることで、相手を低く見ているようで悪いのですが、相手に対する水準をあまり高くしないようにすることが大事かと思えます。

要するに、このエクスペクション——期待のはばをひじょうに持たせることです。そうしますと、この人はこのへんだったのかと、あまり怒ることもなくなってくる。つまり、相手に対して許容性を多く持たせることです。どこの国でも「自分たちのやり方」を持っています。日本ならばどんな人でもだいたいこのへんで反応するだろうとい

う基準のようなものがある。一つの民族文化は行動様式において独特の反応幅をもっている。したがって、日本人の反応幅を基準にして相手に対処しますと、怒る現象が出てくるものです。

そんな具合で、みなさんは現地へ行かれたら長い物差しを持つてなるべく怒らないことが大事です。期待の幅をひょうじょうに広くして「あの人はこのへんで反応しなげだろ？」と、謎を解くような気持が大切です。そうした気持を常に頭の隅に入れておきますと、ある時に急に、「この人はこうだったのだ」とわかつてくることがあります。

そうした気持が大切に、はじめから「ラオス人はこうだ」とか、「マレー人はこうなんだ」と決めないで、あくまで自己の経験によつて相手の姿を描いていくようにしないと楽しくもありません。それには生活がなるべく複雑なほうがいい。そして疑問を多く持っているほうが、生活が複雑だし心が豊かになります。ともかく、いろいろな疑問を常に持ち続け、本当に自分の疑問に対し解決が出るまで、単純な解決を与えないことです。

特に発展途上国へ行く日本人にはいろいろな問題があります。みなさんにはそういうことはいらないと思いますが、とかく己れの理解に苦しむことが出てくると、日本人の常として、ほとんどの人が「遅れている」とか「遅れた国だ」とか単純に割り切ってしまう癖がある。そうなると、問題は少しも楽しくないし前進もしません。そこから新しい問題を見つけ出していくこともできない。そんな意味で、みなさんたちのように海外へ行く人は、常に自分で疑問を持つて安易な解決を見出さないことです。

ともかく、東南アジアでは怒ったりすることに對して、よくないことというよりも「下等な人間」という考え方を強くもっています。ところが日本人は親しい間柄とか、親しくない人に対しても、失礼なことをいったり怒ったりしてもそれほどマイナスになるようなことはありませんが、東南アジアでは、どんなに親しい間柄でも、知らない人と

の間でも、怒ること自体がマイナスとなる文化を持っています。できるだけそうした事態に陥らぬよう心がけるべきです。

それから、インド人、中国人がいるマレーシアやシンガポールなどへ行きますと、暴力は絶対にいけないことになっています。過去、使用人の頭を一回殴っただけで強制送還された日本人の例もある。特にインド人、中国人の間では、殴られることは、どんなに軽蔑されることよりもひどい意味を持っています。とにかく怒らなくては殴らないわけだから怒らないこと。そして暴力は絶対に避けなければいけません。暴力は、日本人が想像できないほどタブーになっています。

長い間日本を離れて一人で現地におりますと、ある時には怒りたくなることもあるでしょう。そんな時、みなさんは日本語で怒ったりするのですが、ともかくカーッと成って腕を振り上げることはいけないことです。現地では、言葉で、普通の説明で、自分の感情を現わして理論的に議論し、相手を負かすことは大歓迎されることです。なるべく口でいって、怒りを発して暴力に訴えることだけは避けなければいけません。

(三)

そして、もう一つ重要なことを話しましょう。こんどは向こうの人たちの問題に焦点を移しますと、どんな社会でも、そこに住んでいる人たちだけの社会のシステムを持っています。理由もないのにある人が何かをしたということは、その社会にそうしたルールがあるためです。ルールに基づいてそういうことをしなければならなかったということがいっぱいあります。社会のルールはゲームのルールのようなものです。野球のルールとバスケットボールのル―

ルが違うように、日本のルールとマレーシアのルール、エチオピアのルールとは、みなそれぞれ違っています。したがって、まず何よりも、そうした彼らの社会の人間関係のルールを覚えることです。そして、その人間関係のルールは、先ほど申しましたように、血縁関係、仕事関係、隣人関係の中にはいってきません。

特に東南アジアでは、こうした隣人関係、友人関係、血縁関係がひじょうに複雑に交錯しています。東南アジアでは親しい人と親しくない人の差は割合に薄い。

そしてインドのような国になりますと血縁関係が圧倒的に強い。だから、インド人同士が人間関係においても大切と思うのは血縁関係です。インド人は隣人関係にはさほど強い働きかけはもっていません。

どうしてかといいますと、インド人の血縁関係はだいたい同じカーストに属していますから、違ったカーストが同じ血縁関係を結ぶことはめったにない。ですから、みなさんは、同じカースト同士、それから違うカースト同士の関係は、特に種類の違った関係であることを認識する必要があります。そうした人たちと接触する場合、たとえばA、B、Cの違うカーストと接するとき、みなさんの接し方の態度には特に関係はないのですが、この間にはひじょうにはつきりした違いがありますので、カーストが違うA、B、Cに対して「いっしょに食事しましょう」などといっているのではない。そういう時には相手の背景、人間関係をよく見きわめ、よく承知してないと失敗します。

自分がやるうとした仕事がかまく進展しないのは、実は仕事自体に対する彼らの考え方に問題があるのでなくて、カーストの違う人といっしょに仕事をしなければならぬことがあるからだというケースが多いものです。みなさんは相手の社会的背景をじゅうぶんに知っておく必要があります。

こうしたことは日本人の間だっていえます。ある人に会ったとする。その人がみなさんがすでに知っている会社、

官庁の人だったとします。その時に、みなさんが「Aさんをご存じですか？あの人とは親しいのですよ」といったとします。しかし、会った人と親しくしている人との間柄は、もしかしたら敵対関係にあるかもしれない。もしそうであれば、その会った人は、その言葉を聞いて強いショックを受けるかもしれません。たとえ同じ会社にいたとしても二人は大嫌いな敵対関係にあるのですから。そんな具合に、たとえ同じ会社にいるといつても仲がいいとは限らない。そういうこともありますから、ある人と何かをしようとする場合は、こうした人の関係がじゅうぶんにわかっていないと、お互いに失敗することがある。その人にとり相手はいい人間だと思っているのに、「なんだ、こんな人間と親しくしているのか。それではやめておこう」ということになりかねない。こうしたことはどこの社会でもあることです。

ですから、仕事をするとき、相手の背景がどうかということ、A、B二人の関係をじゅうぶんに知ったうえでないと、この二人をいっしょにすることは危険なことです。こちらがどんなに善意をもついても人間関係にルールがあるために、人間関係が悪いために、ものごとがうまく進行しないことが実際問題として起こってきます。

しかし、こうした人間関係がわかるようになるまでは相当な時間を要します。当初から全部の人を知ることが不可能ですので、一人知り、また一人知り……という具合に、だんだんと知っていく過程を踏むこととなりますが、当初は独立した関係を結び、やがてこうした独立関係を相互に結ぶことが大切になってきます。当初からグループとして相手をまとめないで、一人一人と関係を結んだうえで、相手同士の関係がはつきりしてからはじめてグループにすることがいいでしょう。

そして、はじめに人間関係をつくる時は、ひじょうに注意して、相手の既存の人間関係に迷惑がかからぬよう配慮

することが必要になってきます。こうしたことはどんな社会でも存在することですから。

ところで、社会組織はいろいろな側面に現われてきます。みなさんが開発途上国へ行かれて一番むずかしいことは雑多な干渉があることです。インドにはカーストがあり、それが交錯し、そしてカーストがない東南アジアでは、一つの社会が幾つかの異なった階層の人びとからなっています。

しかしみなさんは、あらゆる階層の人と接触しなければならない。ひじょうに貧しい農民とも、官僚とも、ひじょうな金持ちとも、そして政治家とも。特に開発途上国ではその階層の開きがひじょうに大きい。

そして南ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア等の国々には官僚制が強い。官僚になることを一つの理想にしているような国々にですから。そうした国の官僚は相当なプライドをもっています。みなさんがそうした国へ行かれたら、彼らに対してはひじょうに礼儀正しく接することが大切です。あまりに親しげに接することは、かえって相手を侮辱することになりかねない。そうした国の官僚と接する時はへりくだる必要は毛頭ないが、どこまでも礼儀正しく接することが必要になってきます。

そして、こんどはいっしょに仕事をする村の人たちですが、このレベルの人たちになるとひじょうにつきあいやすくなります。毎日いっしょに仕事をしていると親しみもわいてきます。毎日接触し、だんだん慣れてきますと、みなさんの持ち味を向こうがアクセプトしてくれるようになるし、みなさんもわがままがいえるようになる。この段階では成功する率が多い。

しかし、この村等でやる仕事の許可をとるためには、この官僚たちとの折衝がどうしても多くなってきます。村の人たちがこうした段どりをちゃんとしてくれませんので。仕事の許可をうまくとるためには、何よりも彼ら官僚に好

感を持たなければいけない。そして好感を呼ぶためには礼儀正しく接することです。

“へり下り”は日本社会では通用しても、他の社会では効果がありません。

そして相手の職業ごとに一定の配慮も必要です。みなさんはいろいろな人に接触することになるが、そうした中で、みなさんは相手に対する判断力をじゅうぶんにつけてほしい。日本の社会だと、割合に、同じような人ときあう傾向が強く、広くつきあうことが少ないので、相手のパーソナリティーを分析する癖がついていません。

ところが、日本以外の異なる社会で人と接触するとなると、その人の背景がわからない場合が多い。一、二年もすると背景もわかってきますが、はじめて行った時などは特にわからない。ですから、よく見る目と判断力が必要になってくる。現地の人の話をよく聞き一人一人をよく観察すると、本能的に、この人は信頼できるかどうか自然にわかってくるものです。それには、相手のいつていることだけに耳を貸さしないで、その人の目つきや、やり方、いい方をじゅうぶんに観察して分析し、判断を下すテクニックが必要です。

とくに、仕事をいっしょにやるような場合には、いい相棒であるかどうかで仕事の効果がまったく違ってくる。どんなに仕事やりにくいことでも、いい相棒が見つかりさえすればしめたものですし、逆に、どんなにコンディションが整っていても、いい相手に恵まれない場合は、どんなに努力しても業績をあげることができないことが多い。だから、信頼できる相手を持つことです。そのためには人を見る判断力をつけなくてはいけません。

私もインドへ行く前はあまり判断力を持っていませんでした。みんなにだまされたなどと悪口をいわれたものです。人類学の調査ということになると、どうしても奥地へはいる旅行が多くなります。途中まで飛行機で行って、そこからジープに乗って行けるところまで走らせて、そこから先は徒歩で奥地へはいつて行きます。その時はガイドやインタ

「ビューアーを連れていくのですが、もしそれが悪いガイドたちであつたりすると、お金を持ち逃げされたり何をされるかも知らない。

そんな時にはおおせいのガイドやインタービューアーが押しかけるのですが、もし人の選択を誤つたら自分の生命まで危いと思うので、おおせい押しかけた中から、一人一人を自分の生命をかけて見ることになります。そうすると、自然に人がわかるようになるものです。

みなさんは生命をかけて人を見る必要はありませんが、もし仕事をなんとか成功させたいと思うならば、相手をよく見ることです。自分に人を見る目があるなしにかかわらず、自然に、そうした目が備わつてきましょう。そうした判断がじゅうぶんでないころは、失敗することだつてあります。ですが、何回か失敗を重ねるうちに、判断力も養われてくることでしょう。

援助の仕組み

一 援助の哲学

(一)

これから諸君が実践していく仕事は世界全体の中で、あるいは日本全体の中でどのように位置づけられるか。自分のやることの位置づけという意味で開発という問題を考えてみることは重要であります。しかし「なぜ援助しなければならぬか」というような問題は、ここですぐ諸君がわからなくてもいいわけで、ある意味ではそれは諸君が二年間自分自身に問い続ける問題であり、あるいは生涯にわたって問い続けるような哲学的な問題です。したがって、この講義の内容が正しいものだという前提を置く必要はありません。諸君が自由に批判し、自分の気持ちを整理すればよいわけです。

諸君は評論家と違って実践者ですから、実践するにあたっては常に一定程度自分の気持ちを整理しておく必要があります。

ます。この問題は本来生涯にわたって問い続ける問題ですけれども、実践者である諸君はその時どきの気持を整理しておく必要があるわけですから、この講義を聞いて訓練が終了する時期、赴任する時期に、その時点における諸君の能力で、この問題に対する諸君の気持に一つの整理をしてもらいたいと思っております。

衛藤先生は安全保障という見地で経済協力の必要性をひじょうに力説されました。俗っぽい方をすれば、武田節という唄の第二節にある「人は石垣、人は城、情けは味方、仇は敵」ということではないかと思うわけです。武田信玄は戦国の武将の中では珍しく城を持たなかった人です。普通の館に住んでいました。信玄については川中島の合戦とか、その名将としての面がよく伝えられています。政治や民衆の生活向上という点でも卓越した力を発揮した人です。いまでも信玄堤といったものが残っています。洪水防止のために信玄がやった土木工事ですが、その技術はいまの科学からみても非常にすぐれているといわれます。その信玄が「城はいらない。人間が城だ」といったということ、衛藤先生のお話と関連させて諸君の頭のすみっこに置いてもらったほうがいいと思います。

なにも戦国の武田信玄に限らず、こういう思想は幕末の吉田松陰にもありました。松陰が松下村塾で孟子を講義したときの講義メモが『講孟余話』という本になっており、これは岩波文庫にもなっています。その中で松陰は「兵は国の大事だ。しかし兵、軍備はひじょうに民力を疲弊させる。だから通常の軍備による国防ということよりも、むしろ城はとり壊してしまえ。兵はみんな腹に帰してしまえ。そしてほんとうに政治が立派であれば、敵が攻めてきて一回は敵の手に落ちてても、人民は自発的に立ち上がって、やがて敵を追い払うだろう」という意味のことをいっています。

これはちょっとユートピア的すぎる理想主義でしょうけれども、衛藤先生のいわれたことも、日本が今後自国の安

金ということを考える場合、軍備だけが必要なのではない。莫大な国防費に回せるようなカネがあるのならそのカネをむしる開発援助のほうに向ける。「人は石垣……」ではないが、それで世界のひじょうに多くの人びとが日本をアブリシエイトし、日本を攻めるとか苦しめるとかいう行動に対して反対するというような気持を抱かせるのが大事なのだという話をされたのだと思います。

それはそれとして、日本には国内問題でいろいろやらなければならぬ問題がたくさんあるのに、どうして外国人のことを考えるのかという議論が、ここ当分は絶えないと思います。

そこで一つアメリカの例をとってみたいと思います。アメリカの場合、第二次世界大戦が終わったあとかつにも欧州からサツと兵を引いた。そのために欧州が赤化するという危険がひじょうに大きくなった。欧州のみならず、世界の貧困地帯といわれる地域が真っ赤になってしまっているのではないか、というおそれをアメリカは切実に抱いたわけです。そうなればアメリカ自体の存立も危くなる。そうならないためには、まず自由陣営を固めなければいけない。それがアメリカを守る道だということで最初は軍事援助をやり、次に経済援助へと進んできたわけです。つまりアメリカ国民の自由防衛という意気込みで完全に支えられて援助が行なわれたわけです。

ですから当時アメリカ人は世界が赤化するのを防ぐためという旗印のもとに、ずいぶん高い税を借しみなく払ったわけです。いまのアメリカではそれが崩れつつありますけれども、戦後長い間援助の創始者であり旗頭であったアメリカは、国民の支持を得て対外援助をやったわけです。

ちょっと脱線しますが、当時のアメリカは国防ということだけで援助をやったわけではありません。その国防という気持の奥にはアメリカ人のひじょうに大きな自信があったわけなのです。アメリカ人にいわせればデモクラシーと

は American way of life である。つまりアメリカ的生活様式こそ絶対正しいものであり、これが世界中に普及すれば、世界は平和になり民主的になりつつある。そういう一つのゆるぎない自信と使命感をアメリカ人は持っていたのです。その使命感を裏返せば共産主義に対する決定的な憎しみになるわけで、そういう使命感を支えられつつアメリカの防衛が考えられたわけであります。

脱線ついでにもう一つアメリカの平和部隊に言及してみよう。アメリカ平和部隊というのは、ケネディ大統領が大統領就任の際の目玉商品としてぶち上げた大構想です。さきほどいいましたように、当時のアメリカ人の心の中には、American way of life を世界中に普及することが人類を救うゆえんであるという使命感が脈々としてありました。ところが、それがどうもうまくいかない。なぜだろうと考えてケネディが発想したのが平和部隊です。ケネディは「アメリカ人は海外に出て行って援助しているけれども高級車を乗り回したり、高級住宅に住んだりして民衆とかけ離れた生活をしている。だからアメリカ人の善意が伝わらないのだ。若者が行って、そういうアメリカ的なぜいたくをかなぐり捨てて民衆の中へ飛び込み、民衆と共にやっつけばアメリカの善意は伝わるだろう。そして、American way of life が世界の民衆にアクセプトされるだろう」と考えたわけでした。こういう、ゆるぎない自信があったわけです。

あとでまたお話しすることになるでしょうが、American way of life が世界の普遍的な原理であるとする自信はやがて崩壊するわけです。いまでは、アメリカ人自身それが普遍的な原理ではないということを知ることがなりました。

本論にもどって『日本の経済協力』（外務省情報文化局発行）という本を読んで諸君は、おそらく「わかったよう

でわからん」という歯切れの悪さを感じるのではないでしょうか。もう一息というところで歯切れが悪い。私もそう感じるのです。経済協力という題だからそうなるのです。で、ここではちょっと発想を転換して、角度を変えて考えてみたいと思います。

違った角度というのは、援助もヘチマもない、日本はいざこへ行くという日本の進路の問題として考えてみたらどうかということ。この本に各国の国民総生産（GNP）の比較をしている表があります。この表を見ますといまから三年前の一九七〇年の時点で（この表の中国の統計は推定数字で実際ははっきりしないけれども、仮にこれが正確だと想定すると）ビルマ以東の広大なアジア地域の中で、日本のGNPが千九百八十億ドル、約二千億ドルであるのに対し日本以外の国をすべて合計しても千二百五十億ドルにしかありません。日本が圧倒的に過半数の生産量を持っているわけです。地図で見ると日本はごく小さいけれども経済力の重みでいえば他のアジアの国を束にしても日本一国にかなわないわけです。中国も政治的には超大国ですけれども経済力では日本の三分の一にもたらないのです。

しかもこういう格差はますます開いていく傾向です。一九七一年の日本のGNPは二千二百億ドル、一九七二年の速報数字では二千四百億ドルを突破しています。現在の時点では、日本を除くアジアのすべての国の生産量の倍の生産量を日本一国であげているという数字になっているでしょう。

これは実にたいへんなことです。こんな経済的なシャイアントがアジアにいるということは、他のアジアの人びとにひじょうに複雑な感情を抱かせざるをえないのです。日本がエコノミックアニマルといわれるのも、単に日本人のビヘイビアが悪いということだけではなく、ひじょうに複雑な原因がからんでいるからではないかと思うのです。とにかく、これほど日本が強力になれば周囲としてはこわいにきまっています。昔から「喬木に風強し」といわれ、

木が高くなればなるほど風当たりが強くなるように、どんなやり方をしても強力な者に対しては嫉妬とか嫉みといわれる感情がわいてくるわけです。現在の日本の国力というのは世界の脅威であります。

私は時々不吉なことも感じます。去年のNHKの大河TVドラマ『平家物語』を見た人も多いでしょうが、「頼る平家は久しからず……」というわけで、日本の進路にもなぜか不吉なものを感じるのです。単に感じ方の問題でなく、もう少し理論的にみても現在の日本の置かれている地位というのは、へたをすると、孤立への道をまっすぐに進んでしまう危険がひじょうに多いと思うのです。

歴史を比較してみても、いまの日本の状態は日露戦争が終わったところとひじょうによく似ているといわれます。明治三十八年までの日本はひたむきに富国強兵の旗印のもとで国づくりをやってきました。そして、強敵ロシアを破ったところから、それまで日本と同盟を結んでいたイギリス自体が「日本が強くなりすぎてロシアのかわりになつたらイギリスは危い」というように心配しだしたわけです。そしてイギリスとの間にさざ波が立ちだすころ、日本びいきであったアメリカもいよいよ日本を警戒し始めたのです。武力的には日本は富国強兵の目標を達して強大国になったが、そのあと日本をどういうふうにもつていくかという点でひじょうに厳しいはめに立ったわけです。そのころ伊藤博文は書簡で「日露戦争に勝つには勝ったがこれからがたいへんだ。へたをすると孤立への道を歩む」というようなことを書いています。

日本は第二次大戦後の焼け野が原から営々として築き上げて今日になりました。軍事力ではなくて経済力を築いてきたわけですが、私自身諸君のような年令のころには夢想さえできなかったようなところまで、国力が上がってきました。ここで日本が孤立の道を歩むことになるかどうか。それはひじょうに重大な問題です。「頼る平家、久しからず

……」になっては困るわけです。そういう意味で、私は現状の日本についてひじょうに危機感を抱いているわけです。しかし危機は同時に飛躍のチャンスでもありません、飛躍のチャンスであると同時にひじょうに陥穽も多いわけです。こういう感じは、私自身の四十九年の生涯において常に感じていることですけれども、日本についてもあてはまると思います。日本の現状は危機感を抱かせるようなものですが、またひじょうに大きな飛躍のチャンスを迎えているともいえます。現に日本のことをエコノミックアニマルといっている開発途上国も日本を警戒しているばかりではないのです。警戒や不安な気持を抱くと同時に日本に対する期待というものもひじょうに強いわけです。警戒と期待とが微妙に織りまざっているというのが今日の開発途上国の日本に対する気持だといえます。

では日本に対する開発途上国の期待の内容はどうか。日本が第四の超大国・スーパーパワーとして世界史上に登場するということは、すでに内外の一致した見方です。どっちみちもう小国ではありません。スーパーパワーとして日本が登場することは必至だというわけです。

ところでいままでスーパーパワーとか大国といわれる国に対する常識は、強大な軍事力政治力を周辺に及ぼし、そういう意味では悪いこともする。しかし同時にそういう強大な軍事力政治力を背景にしてその周辺地域の平和の維持にも役立つというものでした。大国は諸刃の剣としてパワーポリティックスの中で機能してきたわけです。ですから、大国が周囲の国に干渉するということは、国際政治ではあたり前のことであり、その干渉の内容いかんによって小国は一喜一憂してきたわけです。

しかし、戦後の日本はこれだけの国力を持ちながらも、軍事大国にはならないと全世界に明言しているわけです。ところが外国では「ほんとうだろうか」と疑って見ている。川崎製鉄の千葉の製鉄所だけでも、二、三年もあれば戦

前の連合艦隊ぐらいつくってしまうだろうという国力ですから、日本はほんとうに軍事大国にならないだろうか、という心配があるのも当然です。

ですから日本が口でいうように、その国力を平和的な世界建設に役立てるといふのであれば、日本の巨大な富をわれわれの国に実際に流してくれというのが開発途上国の期待です。そういうことであれば、それはもう早天に待望の雨をみるようなもので、スーパーパワーとしての日本が受け入れられるわけです。現に南ベトナムなどでは、私が四年前に行つたときでも「平和になったら、次は日本だ。日本人がきてベトナムを再建してくれるだろう」ということで、百人ぐらいしか収容能力のない日本語学校に四、五百人も志願者が殺到するという状況でした。日本がほんとうに開発途上国のためになるようなことをやってくれるなら、日本の力はすさまじい力である。そういう意味で日本に大きな期待がかけられているわけです。つまりいままでの常識的なスーパーパワーとはまったく違った姿で登場する、スーパーパワー日本の姿を見つめている、というのが日本に対する開発途上国の気持であろうと思います。

それともう一つ、日本人というのは、開発途上国の大部分がそうであるように有色人種であります。色の問題というのは日本にはちよつと理解しにくい問題ですが、開発途上国ではひじょうに大きな意味を持っています。というのは、いまの開発途上国のほとんどは植民地ないしはそれに準じた状況下にあつた国々です。そして支配勢力というのはほとんど白人だつたわけです。ですから白人に対するコンプレックスというのがひじょうに強いのです。そういう国へ白人ならざる日本人が登場してくる、しかも巨大な経済力を持つて登場してくるということは大きな意味を持つわけです。この問題はあとでまたお話しすることにしませう。

そういうことで、ほんとうに日本がよいことをするとすれば、現在は絶好のチャンスに遭遇しているのだといえる。

ここでもう一度「騒る平家……」に話をもどしますと、大英帝国の最盛期というのはせいぜい一世紀で短いものでした。アメリカという史上空前の大國も、現在のアメリカと二十年前のアメリカとを比べてみると、ペトナム戦争を契機に急速な変化がうかがえます。二十年前のアメリカ人がほとんど挙國一致で抱いていた使命感の強烈さを思い起こすと、まったく私の個人的な見方ですが、いまは何かかげりが出始めているように思えてなりません。

「日本が久しくあるためには……」ということは、援助とか開發とかという問題を離れても、日本人がほんとうに真剣に考えなければならぬ問題です。そこでケネディをもう一回引き合いに出し、彼が唱えて果たさなかつた問題に触れてみたいと思います。

ケネディは平和部隊を創設する際、こういいました。「一つのネーションはフロンティアを失つたとき下り坂になる」。フロンティアというのを、私は「文化果つる地」と訳しております。これが最も適訳だと思いますが、この言葉の意味は、要するに、一つのネーションが野性を失う時は果物でいえば熟れすぎて腐りかけた時だということです。フレンシュではつらつとしてゐる民族には野性があつて、平気でそういうフロンティアに飛び込んで行き、厳しいものに挑んでいくものです。そういう精神がなくなれば、日本のこの巨大な經濟力を支えている人的要素はだんだん腐蝕してしまうのだらうと思うのです。その意味で、日本民族が爛熟しないようにすることが日本の大きな政治課題の一つでしょう。

それに、これだけ多くの開發途上國があり、一世紀かかるか二世紀かかるかわからないという南北問題が存在する時に、日本が早々と老い込んでしまつてはいけません。ちよつと理想主義的になりますが、人類全体の幸福のために日本はつらつとした時代を長く持たなければならぬと思うわけです。

日本の進路について考えていけば、そこから世界の開発問題についてのヒントも得られると思います。日本の進路というより高い次元から、諸君がこれから実践していく仕事についても考えていかなければならないと思います。

(二)

次に援助の哲学ということについて考えてみたいと思います。この『日本の経済援助』という本が歯切れが悪いというのには理由がありますが、わかりやすくいえば、「情けは人のためならず」ということなのです。援助すれば、めぐりめぐって日本の利益になるのだというわけです。

私が外務省にはいったころ、クラス会で「外交官に誠があれば焼いた魚が泳ぎ出す」という替え歌を聞いたことがあります。外交と外交官という国民の間では誠実な紳士と考えられているかもしれませんが、ひと昔前までは外交の場というのは権謀術数、策略の場でありました。外交がそういうものだという常識はヨーロッパに発生した近世ナショナリズムの国益思想(ナショナル・インタレスト)と裏腹になっていました。

ですから、そこでは道義というものはひじょうに影が薄いわけです。一つのノーションの安全、福祉というところ外交の至上命令があり、そのためにはよそを侵略してもかまわない。侵略がいけないといわれるようだったら侵略というかたちをとらずにうまいこと搾取する。そういうことがまかり通ったわけです。その極端なものが、マキャベリズム(近世初期のイタリアの宰相マキャベリが『君主論』で説いた現実主義的政治思想から転じて権謀術数を旨とする政治思想一般)ですが、それは少なくとも第二次大戦までの世界の常識でした。

ところが第二次大戦後はそれがひじょうに微妙に変わります。本質的にはそう変わってはいませんが、

調子は少し変わってきております。この『日本の経済援助』にも出ているピアソンレポート（前カナダ首相ピアソン氏を団長とする調査団の報告書）なんかを見ましても、「なぜ助けなければならぬか。もつとも単純な答は道徳的な理由、すなわち持てる者が持たざる者に分かつのは明らかに正しいからである。よその貧しい国々に対して関心を寄せることは、現在の新しい基本的な側面、すなわち、われわれは世界という大きな村に住んでおり、世界共同体に属していることから、当然である」とあります。こういう感じ方、考え方というのはひじょうに新しい思想でありまして、さきほど申し上げた近世ナショナリズムの国益思想の伝統がこのへんから少しずつ変わってきてつつあるわけです。

連帯の思想とか、ピアソン報告を貫くプリンシプルとなっているパートナーシップという考え方は、なにも「助けてやる」などということではなくて、一国の福祉思想を国境を越えて及ぼせばいいのだというものです。大きな村に住んでいる者同士がお互いのためになるからということであるのだ、というふうになつてゐるわけです。

それから、第二次大戦後は自由貿易主義思想が実に見事に育つたということもあります。自由貿易主義というのは、お互いに関税を低くし合つて世界の貿易を伸ばそうというものです。ガットを支える精神です。第二次大戦後はちょっとしたつまづきがもとで各国がどんどん閉鎖主義をとり、関税障壁を高くしてしまいましたので、お互いに連帯して世界貿易を伸ばそうなどということはできませんでしたが、第二次大戦後はそれが見事に実りました。もしその実りがなかったとしたら、日本の今日のような経済発展もなかったらと思ひます。ソ連とかアメリカとか中国とかは、広大な国土を持つ國で貿易依存度が低いわけです。各國が関税障壁を閉ざしても自給自足で生きていけるのです。ところが、日本は最近の石油問題をみてもわかるように二カ月か三カ月で「血」が止まってしまいます。自由貿易が

つぶれたら日本はたいへんなことになるでしょう。アメリカやソ連がそれによって受けた恩恵よりはるかに大きな恩恵を受けているのです。

世界の開放体制も第二次大戦後のものです。その点を考えますと、人類というのはやっぱり徐々に進歩しているのだといえると思います。国益思想というのもの、かつてのエゴイスティックなものから次第に「世界と共に栄える」というかたちのものへ少しずつ進んでいることは事実です。援助の哲学の問題として『日本の経済協力』ではそのへんまでのことを書いてあるわけです。

国としての援助の哲学はそれでいいわけです。けれども諸君はなにも日の丸を意識してこれから開発途上国へ出て行くわけではありません。むしろあまり日の丸を意識せずに行ったほうがいいわけです。ですから私はここで、私自身ももうちょっと若くて諸君といっしょにそちら側の席に座っていると想定して、自分ならどういふふうに気持ちを整理して行くであろうかということを考えてみたいのです。

これから話すことは、いまの世界全体の思想を進めたものだともいえますし、また見方によっては、古くからの伝統的な日本の発想の中にあつたものだともいえると思います。要するに私がいいたいのは、協力隊というものは援助の部類にはいつておりますけれども、諸君がこれからしようとすることは「善」であり、善だからするのだというふうに気持ちを整理しておけばいいのではないかとということです。

むしろ善にはいろいろあります。国内にいて恍惚の人の世話をしてあげるのも善です。しかし一人の人間があらゆる善をなするはずはありません。人生は七十年か八十年。たとえ一千年生きたとしても、すべての善を一人の人間がやることはできません。となると、いろいろある善の中で自分に向いていることを取捨選択してやるということに

なります。自分の個性にも向いており、その方面なら自分に才能があるということ、いろいろな善の中から自分にふさわしい善を選んでやる。他の善は他の人がやってくれるだろうから自分は協力隊を選んだ。私でしたら、こういふふうに関心の整理します。

この点について私の好きな言葉が中国の古典『論語』にあります。その言葉は「仁の道は忠恕のみ」というものです。私の聞いた講義では「仁」というのは儒教における最高の道義です。「忠」とは自らの生命に忠実なこと、俗っぽくいえば自分自身を大事にし自分の生命を大切にすることでしょう。「恕」とは他の生命、自分以外の生命に対して忠実であること。私はこういふふうに関心の整理をして「それでいい」と思っているわけです。

人間の中には自分自身が病弱だったり不具だったりして、自分の生命に忠実に生きるだけでせいっぱいの人もおられます。しかし身体が健康なら、自分の生命を大切にしつつ他人の生命に対しても思いを至すことができるし、そうしなければならぬといえます。そこではじめてバランスのとれた生き方ができるわけです。現在の日本人は世界中がびつくりするくらいに経済力を築いたわけです。そういう能力を持っており、その結果手にした金もたくさん持っています。ですからここではやはり中国の古い言葉を借りて、忠と恕の間にバランスをとっていくべきだと思おうのです。

協力隊というのはその恕の一形態であります。つまり善です。ですからさきほどいったように、「善だからやるんだ」と単純に割り切ることができると思います。「情けは人のためならず」というのはこういう論理ではありません。あくまでも自分中心の論理です。自分の利益が最大の価値であって、情けは、その価値を手に入れるための手段にすぎないわけです。いまの世の中では「善だからやるんだ」といふふうに関心の整理をしたいと思います。「情けは人のためならず」

式の論法で「結局はあなたのためになりますよ」といわないと、エコノミックアニマルはなかなか納得してくれないので、しかたなしに「情けは……」といういい方をするんですけども、私自身がもう少し若くて協力隊に参加したのだとすればそんなかたちで納得するのはいやです。むしろ、「いいことだからやるんだ」というふうに気持ちを整理したいと思うのです。

とにかく開発とか援助に関するいろんな議論を聞きますと、やはり得か損かというかたちで、利害得失の複雑な組み合わせのうえで、総合的にこちらのほうが得だからやるというふうに、利害打算の論理が通用しているように見受けられます。そういうことをやっているのは、つねに話が迷路にはいつてしまつて、実践の間に合わなくなつてしまつてしまうような気がします。ですから私は善の論理を諸君に投げかけてみたわけです。

善を行なうことは楽しいことです。こういうと「いや悪を行なつても楽しい」という人があるかもしれませんが。現に『悪の愉しさ』という本もあります。特殊な局面ではそういうことがあることは私にもわかりますが、一般的にいうと、悪いことをしているより、やはり良いことをしているほうが楽しいわけです。

それから善を行なう度合というのはまったくその人の力量にかかるとあります。力のない人は自分自身が他人の迷惑にならないようにうまくやってくればいいわけで、他人に善を行なおうと考へてもしよせん無理なことです。自分の力が弱ければ自分を守るのにせいっぱいだけです。ですから善を行なおうとすれば心が正しいだけではだめで、やっぱり力を持たなければなりません。ただ善人であるというだけでは、じゅうぶんに善をおこなうことはできないわけです。その意味で自己訓練とか自己練成ということが必要になつてくると思うのです。

また善というのはひじょうに簡単に善である場合もありますが、ひじょうに複雑なかたちをとることもあります。

善ということからスタートしても、それがたとえば一つの事業ということになりますと、早い話がいろいろな業者が群がってきて悪とも結びつきやすくなります。ですから基本的には善である行為でも、その隙間にいるんな悪の花が咲くこともあるわけです。あとで資金協力のところでも解説しますが、日本からの援助に伴う汚職腐敗も起こってきやすい。援助が開発途上国のリーダーたちをスポイルする可能性も常にありうるわけなのです。

したがって、動機が善であればそれでいいかといいますとそうではありません。善を行なう場合にはまず動機が善であると同時に、その節々において、変な腐ったものが詰まらないように、常に一種の精神的緊張がなければならぬと思います。そういうピリッとしたところがないと、歯の間に腐ったものが詰まるように、常に腐蝕が始まる危険があると思います。

援助の哲学という点につきましては、以上のようなことを私のヒントとしてはつきり申し上げておきたいと思えます。

(三)

次にお話したいことは、前にもちよつと触れた、日本人が有色人種であることの意味についてです。

実は私、これまでに何十人もの外国人から「What is the secret?」と聞かれました。開発途上国の人がただでなく先進国の人びとをも含めてですが、「日本の発展の秘訣は何か?」と聞くわけです。開発途上国の人は普通、アメリカ人に対してはこういうことは聞きません。イギリス人に対してもそんな質問はしません。というのも、開発途上国の人たちは白人というのはそんなものだと思っっているからです。白人というのは自分たちとは異

質な人間なんだという潜在意識があるわけです。ところが日本人に対しては「What is the secret?」と食いきがって聞いてきます。

どうしてだろうかと考えてみますと、ビルマ以东のアジアですと、日本人を含めて人びとはみんな同じ肌の色で同じ顔つきで背も低く、一見したところまったくの同類項みたいな人間です。私などもビルマ人と間違えられたりラオス人と間違えられたりしましたが、諸君も現地に行ってみるとそれがよくわかるでしょう。向こうの人たちにすれば、「俺たちと同類項の日本人があんなに力を持っているのはなぜか」と思う。そして日本人に対して「その秘訣は何か？」と聞くわけです。

そういう質問を受けて、私は始めのうち自分にもよくわからないので、勤勉だからだなどとデタラメをいつていましたが、何回か同じ質問をされているうちに、「俺は日本人に生まれてよかった」と感ずるようになりました。という事は、ほとんどが有色人種の国である現在の開発途上国の国づくりが一番効果的に力になってやれるのは、われわれ日本人ではなかるうかと思いたったからです。われわれ日本人がしっかりすれば、開発途上国の人びとは「同じような顔つきをしている日本人にやれたのだから俺たちにもできるのだ」というように発奮するのではないだろうか。日本の発展に何か秘訣があつたとすれば、そしてその秘訣さえ開発途上国の人びとが飲み込めば、開発途上国の発展の見通しもつくのではないだろうか。彼らにとつて西洋人というのは「高嶺の花」だったが、「日本人のやったことなら俺たちにも手が届くぞ」ということで発奮するのではないか。そういうことに思いたったのです。

日本人と開発途上国の人びととの間にはそういうリレーションがあるわけです。有色人種という点ではアフリカ人も共通の面がありますし、かつては白人の植民地であつたとか、ヨーロッパ時代には同じく「日陰者」であつたとか、

似た面が多いわけです。

と云って「What is the secret?」と聞く人たちの中には、明治維新のころの日本人というのは野蠻人でヤシの木陰で踊りを踊っているような民族だった、と錯覚している人がいます。ですから「それが百年の間にいまのようになったのだからすばらしい」というわけです。私は開発途上国の人たちがそういうふうに誤解しているのなら、そう誤解していてもかまわないのではないかと思います。彼らが「日本が百年でやったのだから俺たちにやれないことはないのだ」というかたちで発奮してくれることはいいことです。

このことに関連して、「アジアは一つなり」といった岡倉天心の言葉、あれは大ウソだと思うのですが、私はあの言葉はウソだとはいわないことにしています。なぜかといいますと、昔「石に立つ矢のためしあり」という言葉がありました。これは中国の諺で、ある人が石を虎と見間違えて弓をいっしょけんめい引きしぼって矢を射たら、石に矢が立ったという故事からきているわけです。ところが、石だとわかってからもう一度矢を射たら、こんどは矢は立たなかったそうです。

この諺のように人間というのは時には思い違いをしていることはいいことです。一つの人生の知恵といってもいいと思いますが、子供に「お前は絶対に偉い人になる」という暗示をかければいっしょけんめい勉強するということもあるわけです。ですから、開発途上国の人たちに発奮してもらうために、「アジアは一つだ」といい、「日本人にやれたんだから、あなたたちにもできるのだ」といういい方をしたほうが民衆レベルの人びとにはいいわけです。

しかし実際はどうかとなると、アジアくらい多様性に富んだ文化圏はないわけでして、ほんとうは「アジアは一つなり」というのは大ウソでありましょう。

明治日本については『文化講座』(二四ページ—一〇八ページ)でもいろいろ話があり、その時詳しいことが聞けると思いますが、明治日本と比べると現在の開発途上国は果報だと思ふのです。明治日本というのはほんとうに涙ぐましい状況にありました。援助どころではなかった。狼みたいな列強に狙われていて、いつガバツとかみつかれ攻め滅ぼされるかわからない状態のもとで厳しい坂道を歩いてきたわけです。『日本の経済協力』にも書いてあるように、いまでは開発途上国、南北問題について「援助とか経済協力だけではだめだ。貿易上開発途上国に特恵を与える、つまり開発途上国から買い付ける産品には特に関税を安くしたりすべきだ」などということが常識となっていますが、明治日本にとってはそれどころではなかったのです。

日本からアメリカへ輸出する物にはアメリカが自由自在に関税をかけました。五〇%でも百%でも二百%でもアメリカの思いどおりに関税がかけられました。ですから、アメリカは日本からの輸入を止めようと思えばいつでも勝手に止めることができました。

ところが一方の日本は安政の仮条約以来関税の自主権を認められていませんでした。この不平等条約が改められたのは明治末期になってからのことです。日本は明治時代のほとんどを通じて関税の自主権を持たず、外国からの貨物に対しては、確か五%以上の関税はかけえないという、きわめて不平等な条約のもとで生きてきたわけです。したがって他国の物がどんどんはいってくるわけです。そういう状況下で自国の産業を育てなければなりません。通常でしたら、そのような状況のもとでは国内産業は育つはずがないのです。

ですから、明治日本は国の存立をかけて血のにじむような努力をしました。福利厚生などということはいつておれませんでした。明治時代の農民は江戸時代の農民よりもっとひどく搾取されていたといわれています。そのころの日

本には何も産業はありませんでした。日本人といえど百姓か漁師です。そういう貧しい百姓や漁師から税金を吸い上げていっしょけんめいに産業を育成してきたわけです。

技術協力という面では、明治時代にはお雇い外人が日本にきました。諸君の場合は、すべての費用を日本政府がみるわけですが、明治日本がヨーロッパやアメリカから招いたお雇い外人の費用は、いまいったような貧しい百姓や漁師から吸い上げた血のじむような税金の中から支払われたのです。しかも、その額は当時小学校の校長先生の月給が五円といわれた時代に、月額二百円とか三百円とかという高給だったので。当時の日本はなけなしの金をはいてお雇い外人を招き、いろんな部門に配置して技術吸収に努めたのです。実に涙ぐましい努力です。当時のお雇い外人の多くが記録として残しておりますが、当時の日本の青年たちはお雇い外人の骨までしゃぶるといような気持で、その人たちが持っているものを吸収するためにひたむきに努力したわけです。

そういう意味からいいますと、これから諸君の行くところとは雲泥の差があると思います。おそらく諸君は赴任してすぐ、果たして向こうの人たちに自分の技術を吸収しようとする意欲があるのかどうかというようなかたちでフラッシュバックに直面すると思いますが、明治日本というのはまさにその逆の状態にあつたわけなのです。

もう一つ例を引きますと、現在日本の開発途上国に対する借款の条件が悪すぎるというようなことがいわれますが、明治時代の日本の外債の利子は八分、九分の高利でした。明治日本はそういう高利で外国から金を借りたわけですが、いまの日本の借款の条件は平均三・五厘ですから、明治日本が外国からいかに高利の金を借りたかわかると思います。そういう厳しい条件のもとで明治日本はまったくの自力更生をやってきたのです。「日本の発展の秘訣は？」と聞かれば、ほんとうはそのへんにあるのだらうと思います。

援助問題というのは考えれば考えるほどわからなくなるような問題ですが、少なくとも「What is the secret?」という質問に対しては、明治日本には涙ぐましい自助努力があったということをおかなくてはなるまいと思うのです。

明治日本と比較的似ているのはいまの中国の自助努力です。中国はあまり外国からの借金を期待していません。大きなダムも、ブルドーザーを外国から援助してもらって作るのではなく、何百万千という民衆がモッコをかついで作っているわけです。さすがは中国です。明治日本と匹敵するように貧しい中で歯を食いしばって、自力で行けるどころまで行くのだ、とがんばっています。その力は大したものだと思います。

明治日本をえらくほめすぎましたけれども、現在の開発途上国に明治元年の日本を期待するということは、ほんとは無理なことだと私は思います。明治元年の日本というのは、人間でいえば十七、八歳の吸収盛りの年令だったと思います。これから諸君が行く国ぐりの中には、明治の日本はおるか江戸時代あるいは鎌倉時代、もつとさかのぼって大化の改新時代の日本くらいだという地域も局部的には残っているはずでして、同じ国の中でもいろいろ多様性があります。人間でいえば一歳半くらいの赤ん坊の状態の地方もあるわけです。そんな赤ん坊に自助努力などといったもだめです。ですから、明治日本を引き合いに出すのは一般的にいつてちよつと無理です。もちろん局部的には進んだところもありますが。

とにかく明治元年の日本では、いろんな発展の基礎になる国民の教育水準をみても、国民の三分の一は読み書きができる状態でした。これは実に驚くべき数字です。現在インドが一五億といわれていることを考えてみれば、この三分の一の重みがよくわかると思います。

冷えてしまったエンジンを暖めるのと同じようなもので、三〇〇を九〇〇に高めるのと、一五〇を三〇〇に高めるのとどちらがむずかしいかといえば、一五〇を三〇〇に高めるほうがはるかに困難の度合が大きいわけです。ですからいまのインドの教育水準は日本でいえば明治よりずっとさかのぼった時代の教育水準だということになります。インドの文盲がいつになつたらなくなるか。今後幾世紀かかるか。実に気の遠くなるような話です。

行政とか産業についても同じようなことがいえます。焼物でも織物でも染物でも、江戸時代に発達したものでいま見てもその個性に打たれるようなものが数多くあります。江戸時代にすでにそういう地元産業が相当程度できていたわけです。資本主義の策地としてのいろんな仕組みもかなりできておりました。手形とか為替とか頭取とかという言葉が江戸時代にすでに用いられていたわけです。そして、そういう言葉はいまでも金融などで現に使われているのです。おもしろいことに、哲学などの言葉には漢字をつなぎ合わせて新しくつくったものが多いのですが、簿記とか会計とかには江戸時代の用語がずいぶん残っているのです。ということは、商業資本的なものが江戸時代にすでに独自にかなり進んでいたということです。

学問的にも、西洋のものこそはいっていかなかったけれども、東洋的なものについては日本は大したものだったので。一説によれば、世界中で儒教が最も現実に深く実現されたのは江戸時代であったといわれています。そういう江戸時代のアセットの上に日本人は明治元年を迎えたので、苦しく厳しい明治時代をりっぱに生き抜き発展させてこれただといえるでしょう。

「日本の発展の秘訣は何か？」という問題は、援助問題を離れても、世界の課題であります。われわれ日本人が今後十年あるいは二十年かけても解明しなければいけない問題だろうと思います。

二 資金協力について

(一)

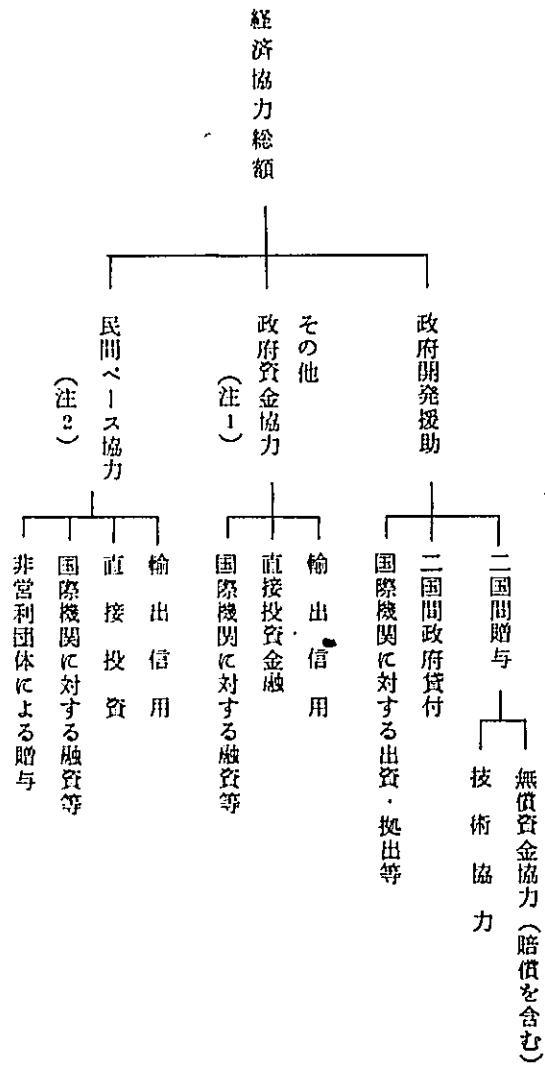
これまで「なぜ援助するのか」という問題をめぐっての話をしてきたわけですが、次に援助の実態について話を進めて行きたいと思えます。

まず経済協力の種類についてですが、国際的に通用している分類は次図のとおりです。これはD A Cの分類基準によつて分けたものであります。D A Cというのは Development Assistance Committee の略で、正式の日本語訳は「開発援助委員会」なのですが、南北問題を勉強する人は必ず覚えておかななくてはならない名前ですから、D A C (ダック) のままで覚えて下さい。

経済協力の分け方にはこの他にもいろいろあります。たとえば日本のシャーナリズムがよくやるように、資金協力和技術協力の二つに分ける分け方もあります。資金協力は金、技術協力は人というわけで、むしろこういう分け方のほうが一般の人にはわかりやすいと思えますので、まずわかりやすいほうから説明していきましょう。

資金協力というのは金を貸すとか金を贈るといふかたちの協力、援助です。インドネシア一國でも、もう大分前から日本の資金援助は年額一億ドルの舞台を突破しています。一億ドルは円にして約三百億円ですから、赤ちゃんを含めた日本国民一人一人が三百円ずつ出し合つてインドネシアのために金を捻出しているようなものです。資金協力はこのようにして巨大な額の金が動くわけです。ただ、贈与や借款ですから、決定までにはたいへん慎重に判断をする

経済協力の種類



(注1) 正式にはDACでは「その他政府資金の流れ」といつている。

(注2) DACでは「民間資金の流れ」といつている。

『日本の経済協力』(外務省情報文化局発行)より

けれども、いったん決まってしまうと、あとは比較的手間がかからないのが特色です。

ところが技術協力の場合は、決めるまでもたいへんですが、決まったあとのほうがもつとたいへんなのです。たとえば協力隊を三名バン格拉デシュに派遣するという時でも、派遣することを決めるまでに調査や交渉がいろいろと行なわれますが、決まったあとのほうがはるかにむずかしい。諸君の側からみても、願書を出して試験を受けて訓練所で鍛えられてから、ようやく派遣となります。現地へ行つてからも二年間という期間がある。資金協力和違つて、人が大量に動くわけで、国の事業として行なつてはいいっても、技術協力の場合は、ほんとうのにな手は諸君であり、あるいはコロンボプランの専門家であります。その点で資金協力和技術協力和はまったく様相が異なつてゐるのです。

もう一つ二つ資金協力和技術協力の違いをみてみましょう。日本はGNP（国民総生産）がだんだん上がつて、外貨もたまる一方です。資金協力和に必要な国力（資金力）はGNPの上昇につれて年々高まっています。ところが一方の技術協力和に必要な国力（人材量）はGNPとともに伸びてはいきません。GNPが上がるということは国内産業が発展しているということですから、日本国内で人手が足りなくなり、外国に出て行ける人は少なくなるのが常識です。ほつておけば、日本の経済的国力が上がれば上がるほど日本の国としての技術協力的余力は減るわけです。

評価という面でも違いがあります。かりに百点満点で評価するとしますと、資金協力的の場合、これも人間のやることですから、満点の百点に評価されるというような例はめつたにありませんけれども、最低のほうは悪くもたいてい零点どまり（援助の意味がなかつたということ）です。ところが技術協力的の場合はマイナス点（有害であつたという場合）ということもありうるのです。ひどければマイナス百点がつけられます。さきほどもいいましたように技術

協力というものにならない手は国民の中から選抜された人間です。もしその人がいい加減な人間で、相手国にとっても日本にとっても有害だったというような場合は、容点はおろかマイナスという厳しい点数がつけられるわけです。

とにかく生身の人間がはいってくるかどうかでも、物事はむずかしくなります。生身の人間というのは日々に気分も変わります。そういう複雑で有機的な人間が介在するということは、口でいうほど簡単なことではないのです。ですから技術協力というのはほんとうにむずかしい仕事だといえるわけです。

簡単にいうといま述べたような違いが資金協力と技術協力にはあるわけですが、ここで諸君の参考までに註釈をつけ加えておきますと、実は資金協力の場合もマイナスになることがまったくないわけではありません。

その例の一つが腐敗の原因になる場合です。資金協力というのは、相手国の国家建設のために不足している金を出すということですから、基本的にはそれは善であります。しかし前にもお話ししたように、それは金にかかわることですので、そこに相当な弊害が起きてくる場合もあります。日本が資金協力で金を出して、ある国がダムを作るとしましょう。たとえ相手国の政権が替わるようなことがあっても、そのダム自体は民衆に裨益するわけですから、ダムがあつて悪いということにはなりません。しかし、なにぶん巨額の金が動きますので大局的には善でも局部的には弊害の起ることもありうるわけです。

無償協力、正確にいうと贈与形式による資金協力の場合、最近では金そのままではなく、金を物に変えて相手国に渡すという方式が、わが国の場合が多くなっています。たとえば病院を援助国側の責任で建設して、完成したらそれを相手国に引き渡すという方式です。この場合、引き渡し式は病院の鍵を渡す形式になりますので、ターン・キー (Turn Key) 方式といわれます。それが資材や機材の場合ですと、引き渡し式は鍵ではなくて目録ということになります。

以上の方式は金で渡すのに比べて、援助国側で入札したり調達したり設計したりしなくてはならないので、たいへん手間がかかるのです。

技術協力のむずかしいことはさきほど述べましたが、この場合、人を見つけ出すのにたいへん苦労があることはもちろん、人に付随する金や物の問題まで処理していかねばならないのだという点加重されますので、どうしても手の込んだシステムが必要になるわけです。

以上は、資金協力と技術協力という分け方で経済協力の分類を試みてみたわけです。諸君にはまずこの程度のわかりやすい分類のことを頭に入れておいてもらって、次に最初に図示したダック(DAC)の分類方式という、ややこみ入ったところの説明にはいりたくないと思います。

(二)

大分類でいきますと、第一が「政府開発援助」、英語で *Official Development Assistance* 略して ODA といっています。南北問題にたずさわる人が、この ODA を知らないというのでは話になりませんから、諸君もこれはぜひ覚えておいてほしいと思います。第二は「その他政府資金援助」(その他政府資金の流れ)、英語で *Other Official Flows* 略して OOF といっています。これはそれほど人が口にしませんけれども、諸君だけなら知っていなければいけないと思います。第三は「民間ベース協力」(民間資金の流れ)、英語で *Private Flows* といっています。

以上が DAC の分類基準による大分類であります。DAC のことには先ほど簡単に触れましたが、この国際委員会

は経済協力の拡充、調整に重要な役割を果たしており、D A Cが毎年発表する加盟国の援助活動に関する資料は国際的に最も権威ある資料とされています。それというのも、世界におけるいろいろな統計が各国バラバラに作られていますと、相互の情報交換がうまくできないわけで、国際的な機関の権威ある分類方式に従うほうが、国際間の話合いというのはどうしてもうまくいくわけです。

このD A Cの分類方式は日本の一般国民にはわかりにくいだろうと思います。「政府開発援助」などといっても、おそらく一般の人にはなんのことやらわからないでしょう。酒を飲むのに「二リットル飲もうじゃないか」というより、やはり「一升やろう」といったほうが日本人にはピッタリくるように、日本の一般の人びとに南北問題を理解してもらおうえでは、D A C分類より資金協力と技術協力、「金」と「人」で説明したほうがいいわけです。

しかし、諸君は国際的な舞台に出て行くのですから、やはり世界的な基準で話が聞けなくてはならない。相手がD A Cの基準でものをいっている場合、「ああ、あれなんだな」とすぐわかるくらいの素養は持っていなければならぬわけです。丸暗記も必要ですが、少しでもそれがほんとうの素養になるために、ここでD A C分類の中で素人わかりのしにくい部分をできるだけやさしく解説してみたいと思います。

第一に政府開発援助すなわちO D Aですが、これは政府が財政資金つまり国民からの税金を使って、自らその責任で行なうもので、いろいろの種類の援助の中でほんとうに援助らしい援助といえるのはこのO D Aなのです。

日本の経済協力総額はG N Pの〇・九六でD A C加盟国の平均を上回っているといいますが、O D AはG N Pに対して〇・二三でD A C加盟国平均の〇・三五に比べるとひじょうに低いのです。日本は援助総額ではアメリカに次ぎ世界二位となっていますが、その中味をあけてもっとも援助らしい援助についてみると、世界で五番目、その

GNP比率では十何番目ということになってしまいました。

政府開発援助すなわちODAは「二国間贈与」「二国間政府貸付」「国際機関に対する出資・拠出等」に分けられ、二国間贈与は「賠償・準賠償を含む無償資金協力」と「技術協力」に分けられますが、まず無償援助とも呼ばれる無償資金協力について少し詳しくみてみましょう。

日本の無償資金協力の規模は、一九六七年が一億二千七百万ドル、六八年が一億三百万ドル、六九年一億四百万ドル、七〇年が九千九百万ドル、七一年九千七百万ドルとなっていて、年々減る傾向を見せております。それは、この無償資金協力には賠償とか準賠償という戦後処理のための贈与が含まれていて、その賠償・準賠償が年々減ってきているからであります。そしてそれは一九七七年には全部終了することになっていきますから、このままでいけば日本の無償援助の規模はひじょうに小さなものになってしまわうわけです。

そこで五年くらい前から「賠償や準賠償でない、純粋な無償協力を力を入れなければならぬ」ということが叫ばれ始めました。現在はだいぶふえてきてはいますが、まだ額が小さい。「日本は純粋な無償援助を飛躍的に強化しなければいけない」という声は、いま内外でますます高まってきております。現在のところ趨勢としては、近きより遠きに及ぼす”かたちで毎年毎年一步一步拡大される方向にはあります。対象国が、はじめは東南アジア諸国だけだったのが、昨四十七年にはインドも対象にされたというふうに、除々に他の地域にも拡大されようとしております。あるいは諸君が現地で活躍している間に、日本の無償援助がアフリカあたりまで、かなりの程度及ぶのではないかとともに思われます。

現に昨年、タンザニアに何かいい無償援助のプロジェクトはないだろうかということで、協力隊とのつながりが検

討されました。世界的な世論の中で窮地に立っている政府は、いい計画さえあれば予算措置もしよう、という積極的な構えをみせ始めておられます。諸君が管々として築いていくミニ・プロジェクト、ワンマン・プロジェクトがだんだん実ってくれば、そういう諸君の仕事の延長線上に、巨額の無償援助プロジェクトが生まれてくる可能性もあるので

す。

それはなにも無償協力に限りません。借款でも、あるいはO.T.C.A. (海外技術協力事業団) のプロジェクトでもいいわけです。とにかく諸君のやる仕事の全部が全部実るとは思いませんが本人も努力し、運にも恵まれた場合には諸君のミニ・プロジェクトが、そういう大きなプロジェクトにつながっていくことがありうるということでもあります。

技術協力は一応説明しました。またあとで詳しく述べます。二国間政府貸付というのは、いわゆる政府借款のようなかたちの援助で、これもあとでまとめてお話しする予定です。そこで、政府開発援助の中で一番わかりにくそうな「国際機関に対する出資・拠出等」という言葉の説明をいたしましょう。

ここで国際機関というのは、世界銀行とかアジア開発銀行とかラテンアメリカやアフリカの開発銀行とかのことで、世界銀行といえばアメリカの顔が浮かびます。それと同様に、アジア開発銀行といえば日本の顔が浮かぶというのが世界の通説ですが、それは「有力株主」にすぎないわけで、いずれも援助問題のうえでたいへん重要な役割を果たしている国際機関であります。ほとんどの先進国はその国独自(二国間方式)の援助を行ないつつ、同時にこういう国際機関(いまあげたもののほか、UNDPとかWHOとかFAOとかいろいろある)を通じ、いわば共同形式で開発途上国への援助を行なっているわけです。

(三)

次は「金貸し」の話をしてみましょう。金貸しといえは、まず頭に浮かぶのは、贈与と違つて商売的であるということです。われわれが銀行から金を借りれば銀行に対し利息を払わねばならない。それは、銀行が金を集めるために預金者に利息を払い、従業員に月給を払うなどコストがかかっているうえに利潤も計上しなくてはならないからです。われわれが友だちに金を貸す場合のように銀行が無利息で貸していたら、その銀行は預金者に対し利息が払えないのみか、従業員に月給も払えないことになる。

そういうわけで、通常、採算ベースで物事を考えていくと利息はどうしてもなくてはならない。そして、諸君がもし家を建てようとして銀行から金を借りるとすると、普通ならば少なくとも八分くらいの利息が取られるはずで、

横道にはいりますが、開発途上諸国にはひどいものがある。一カ月に一割の利息というような極端な例もあり、東南アジアでは華僑、インド人がよく高利貸しをやっています。

この八、九割というのが通常の商業採算ベースによる利息であるわけで、この程度まで利息を取れば、それは商売であつて援助とはいいいくなくなるわけです。

で、商売と援助の違いを説明するために一つの例を考えてみましょう。仮に日本が無利息で一億ドルの円借款をある国に与えるとする。これを商業採算ベースで八分の利息を取る場合に比較すると、荒っぽい計算で、この利息分、すなわち一年で八百万ドルを贈与するのと同じことになる。償還（返済）期間が二十年だと、利息分すなわち贈与分は僅に一億ドルを越してしまふこととなります。

つまり、通常の商業採算ベースならば八割の利息を取って貸すところを無利息で貸したり、あるいは一割の低利息で貸すとする、その利息の差、すなわち八割、七割分がだいたい「援助の要素」になるというわけです。「借款は金を貸すのだから経済援助ではない」という議論は単純な議論でして、この援助要素というものを借款条件の中で測定しなくてはまともな議論にはならないのです。ですから、援助か商売かを見極めるためには、①利息が何割か②償還期限が何年か③据置期間が何年になっているか、というような点を分析してみなくてはならないのです。

それから、援助問題を論じたものの中に、よく「ひも付き」という言葉が出てきます。日中国交回復が実現する前に、日本の民間産業界に「日本は中国に対して賠償を払うべきである」という議論がありました。これは、つまりこういうことです。賠償の場合、いままではいわゆるひも付きでして、日本からしかその金で物は買えないのです。逆にいうと、日本の業界に注文が来る、業者は注文の品を輸出する、そしてその代金は最終的には日本政府から払われる。通常の輸出と違って貸し倒れとかこげつきとかの心配はまったくない。業界にとり、これほどうまい味のある商売はないわけで、中国問題で産業界に賠償の意見が出たということは、多分にひも付き賠償を想定してのことだろうと思います。

昭和三十年ごろでしたか、インドへ日本史上初の円借款を供与したことがありました。金額はいまからみれば少額ですが、四千万ドル。インドが日本に対し戦争賠償を放棄したので、それに対するお礼という形で供与した円借款ですが、これがひも付き（タイド・ローン）であった。日本政府からインド政府に「インドの国造りや開発に必要なダムや工場を作ったりするために、日本の業者を使ってください。そして物は日本の物資を使ってください」として借款を与えました。そして入札が行なわれ、日本の民間業者がダムや工場作りのためどんどんインドへ出て行きました。

ところが、この援助の仕組みは、インド政府が日本政府から金をもらい、それを日本の業者に払うというやり方ではなくて、ツケを日本政府へ回すというやり方です。つまり、友人同士で酒を飲んで、そのツケを一番金を持っている者に回すという、あのやり方です。こんなふうに条件をつけて借款を与えることをひも付き（タイド・ローン）と呼んでいます。

日本の民間産業が中国賠償をいい、経済協力促進をいうのには、安全確実なもうけ口ができるから——もちろん、それだけだとは思いませんが——ともかんぐることができます。

ところがいま、諸君もご承知のようにそうしたひも付きはよくないという意見がある。タイド・ローンでないアン・タイド・ローンにすべきであるという。これはどういふことかというところ、日本政府が相手国政府に小切手で金を渡し「もう物資購入等は日本の業者でなくても結構です。国際入札でよろしい。日本から買おうがドイツ、アメリカから買おうがこの国からでも買ってください。金はひも付きでないので自由にお使ください」ということです。

そうなれば、相手国政府はいやいやながら日本から物資を購入する必要がなくなり、都合がよければ日本からの借款で世界のどの国からでも安く自由に買えることになる。相手国政府にとりこんな都合なことはないわけです。

で、さきほど申しましたように、円借款に援助要素が相当はいつても、それがひも付きの借款であるかぎり、「日本の円借款はけつきよく日本の業者の輸出を支持する輸出振興策ではないか」という疑いの余地を残すわけです。諸君はまずこのことを念頭に入れておく必要があります。

『日本の経済協力』には直接借款について次のように書いてあります。

直接借款は、わが国政府が相手国政府あるいは政府機関等に対し、海外経済協力基金（略称「基金」）もしくは日本輸出入銀行（略称「輸銀」）を通じて、円資金を貸付けることから通常、円借款と呼ばれるものが主であるが、一九六九年以降は、余剰米を政府ベースの援助として食糧不足に悩むパキスタン、韓国、インドネシア、フィリピン等に現物で貸付けたり、延払いで輸出したのもこの直接借款に含めている。一九七一年の実績をみると、二国間政府貸付け三億六七〇万ドルのうち、直接借款は、韓国、インドネシア、インド、パキスタン、タイ、その他に對する三億二八〇万ドルとなっており、一九七〇年の直接借款二億三六四〇万ドルに比べ二八・一％、六六四〇万ドルの大幅な増加であった。

では、ここで円借款の具体例をマレーシアから拾ってみましょう。マレーシアでは一九七二年三月の借款が一番大きいのですが、これは同国首相が来日した時に借款協定を結んだもので、当時は「一億ドル借款」と騒がれたものです。

その一億ドル借款の利息の内訳をみると経済協力基金が三・二五％、輸銀、市中銀行の協調融資が五・五％となっています。これを見てもわかるように輸銀、市中銀行の利息は市中金利よりも安い、基金の三・二五％よりもはるかに高く、コマーションナルなエレメントが濃厚にはいつています。そして、償還期間つまり返済期間は経済協力基金から出すほうが二十年で、輸銀から出すほうが十八年になっている。輸銀金利は基金よりも高いが、日本国内には住宅、農村金融のような「政策金融」以外、コマーションナル・ベースといわれるもので十八年五・五％という安い金利のものはない。で、日本の通常の水準からいえばむしろいいわけです。

次に、一億ドル借款の対象業種をみてみましょう。基金から出すほうは農業、運輸、電力など十業種。輸銀融資のほうは通信、運輸、電力、工業などとなっています。基金融資と輸銀融資がどうしてこういう分野に分類されているか、諸君の中に見当のつく人がいますか？ 基金のほうが条件がよくて輸銀のほうがうんと条件が悪い。どういう意図で片一方の業種は金利が安く、もう一方の業種のほうは金利が高くなっているか理由がわかりますか？

つまり、こういうことです。農業などは長年月をへなければ商業採算ベースにのりにくい。だから、開発銀行などを通じて農業協同組合や農民などに金を貸しても、はたしていつになったら貸付金が返ってくるのかひじょうに危なっかしい面があります。

ところが、工業などのような業種になると、工場を作るにしても、民間にせよ、政府関係にせよ、一応きちんとした経営者が責任者になっている。そして計画が計算づくめのおえで行なわれるので、投資したものがいつになったら実るかという心配がそれほどない。通常の場合、当初の三年は赤字基調だろうが、四年目から黒字に転じ、五年目から順調に利益があがるようになるという予測と計算がなりたちます。しかし農業関係ではそういう予測ができず不安がある。

だから、輸銀対象の借款は早く採算がとれるような業種ということになるわけです。電気通信の分野ですと、電話を施設したらすぐにも料金徴収ができますし、運輸関係であつたら、日本から借款でバスを何百台も購入し走らせれば、まさか人をただ乗りさせるわけではないから、すぐに金はいってくるという利点がある。工業だつて物を生産し販売するのでだいたい同じです。

だが、電力関係となると即効性のもとと遅効性のもととの両分野にまたがっていますし、運輸関係も同じです。バ

スのように早く資金回収ができるものもあるが、道路建設のようにいつになったら建設費が回収できるか見通しがたないものもある。日本でやっているように、すごいスピードで道路を建設し、有料道路にすれば間もなく資金が回収できるようになるでしょうが、開発途上国で有料道路を作っても走る車がない。そんなことで、借款の場合は金利、条件等を考慮しながら対象案件を検討することになるわけです。

資料のバングラデシュの項の中に「プラント類」とありますが、これはバングラデシュが東パキスタン時代、日本が借款を供与したもので、プラントの中で一番大きなものは肥料工場の建設です。肥料工場だと肥料がすぐに売れる、そんなに利子を安くする必要はないという議論や、少しでも援助らしい利率にせよという議論が、この案件についても確かあったように思います。

で、円借款となると、いつもながら、外務、大蔵、通産、経企の四省で、その条件等をめぐってカンカンガクガクの議論が展開されます。当然のことながら、借款条件をもっとよくしろというのが外務省で一番強いのが大蔵省。そんなことで、議論を重ねているうちにすぐ六カ月、十カ月がたってしまう。開発途上諸国の仕事の進捗状況ものろいけど、日本の円借款が決定するのもまったくのろい。

そしてノロノロとしているうちに相手国政府が怒り出す。そのうち大統領や首相などが訪日する。そして、そのような機会に、それまでもたついていた懸案が政治的に片づく。こういう経緯をたどることが多いのです。もつとも、こういう懸案を一挙に政治的に解決しようとして来日する場合があります。

いま申しましたように、円借款の決まり方は、四省会議ですんなりと順調に決まることは比較的少ない。相手国政府の首脳が日本へ飛んできて日本政府首脳に会ったりするとき、何かひとつお土産に……ということを決まる場合

が比較的多くあります。そうしたことをひじょうに巧みに利用しているのがインドネシアと韓国です。日本人の泣きどころをひじょうによく知っている。日本人に対するアブローチの仕方がうまい。やはり日本人の気質がわかってい、日本人の気質と気質が似ているということになるんだらうと思います。

日本に対するアブローチの仕方で、うまい国と、そうでない国があるということは、結局、気質の類似性や歴史的つながりの強さ弱さに基因するのだと思いますが、円借款を見ていてアフリカ諸国はひじょうに少ない。マレーシアの一億ドル台の規模に比べるとケニアは一千万ドル以下です。協力隊の年間予算と同規模です。中近東、南米諸国も少ない。これらの国は日本人の泣きどころにどうアブローチしたら借款がもらえるかというコツをあまりよく知っていないようです。日本は「日本の海外援助はアジア中心である」ということを必ずしも知っているわけではない。結果的にアジア地域が有利になっているにすぎないのです。日本の海外協力でアフリカや中近東が少ないことは、まだ日本にとりなじみが浅いということだろうと思います。

先日、タンザニアから隊員が帰国してきました。漁業指導隊員でしたが、その隊員が「オランダがタンザニアに援助で漁船を供与し、船長以下船員までオランダ人であった。この船を活用させてもらおうとタンザニア人のヘッドに申し入れたのだが、ヘッドはオランダ人がイエスといわないことには……と、オランダ人に頭が上がらない。けっきょく、その船は使わせてもらえず、情けなかつたですよ」といっていました。

オランダは小国でそんなに国力もない。経済援助をするにしても特定地域、特定国に集中せざるをえない。他の地域や国から援助の申し入れがあっても「わが国は小国ですから……」と断ることもできる。スエーデンなどもそうです。そして、そのことは往々にして集中の強さを示す場合があります。タンザニアで水資源についてはスエー

デンが王座を占めているのも、そうした背景があるからです。

しかし、日本の場合はそうはいかなくなっています。「おたくまでは手が回らなくて……」といういいわけは通用しない。ですから、どの国にも少額ながらも援助せざるをえない。そうなるとタンザニア派遣隊員のような例も出てくるわけです。

日本の政府開発援助（ODA）は現在GNPの〇・二三％で、国際的には政府開発援助の努力目標を〇・七％に抑えているので、まだ二倍以上増やさないと国際水準に達しない。そんなわけで、円借款はいい案件さえあればふやさざるをえない背景があるのです。

青年海外協力隊は、発足当初、ニューフロンティアを目指した純真な精神的な要素が強かったのですが、現地へ行きますと、その国に対し日本からの経済援助が強力に行なわれている場合は、隊員諸君はやはり肩身が広いだろうし、そうでないときは肩身の狭い思いをしなければならぬ。日本、オランダ、ドイツ、スエーデン、アメリカなど先進諸国が開発途上国へ平和部隊を出していますが、アメリカ、オランダ等は多方面にわたり援助し、訓練所施設などにおいてもちゃんとしたものを贈与しています。そうした中で、日本だけが何もしていないという場合は、いい悪いの問題ではなくて理屈ぬきに諸君は肩身の狭い気苦労をしなければならぬわけです。しかし、諸君が営々として培った土壌の上に、諸君のそういう努力の延長線上に、強力な無償援助（贈与）や大型の円借款が生まれる可能性はあるのです。そういうことを信じて現地へ行ってもらいたいと思います。

(四)

次にちょっと米（こめ）の問題について話しておきましょう。日本の余剰米処理の場合、一般的には次のように考える人が多いのではないかと思う。「日本には米が余っているのに開発途上諸国には飢え死にしている人がいっぱいいる。どうせ鶏に食わせる余剰米だったら、そんなもったいないことをしないで飢えている国の人に贈ったらどうだろう。そんなことでモタモタと議論をしているのはおかしいじゃないか」と。

しかし、国際関係はそんな単純な見方や考え方では動かない。単純にいかないとくに国際関係のむずかしさがある。たとえば日本がバングラデシュに米を供与する場合、タイとの関係が出てきます。

タイはご承知のように米の輸出で国民が生計をたてている国です。日本がバングラデシュ等の国へ米を輸出すると、タイの米の輸出がガタッと止まり、タイにとり一國の浮沈にかかわる大きな問題となります。そして、タイの輸出市場を日本が荒らすということで、タイの外務大臣が日本へ飛んでくるほどの大騒ぎとなります。

そこで、日本が仮に日本の余剰米三十万トンバングラデシュ借款の一部で供与することになれば、同時に、残った借款部分についてはタイ米買付けというひもを付けようというような妥協線が出てくる。それでも、その場合のタイ米の輸出価格を安くする、しないとといった外交問題が残る。そこを日本とタイの間で交渉し、ようやく決まる段階になってくると、こんどはビルマから「待った」がかかってくる。ビルマもタイと同じように米の輸出の依存度の大きい国ですから。「日本はアジアの……といいたいがらビルマを忘れていいのか」という。そして、こんどはビルマを含めての話し合いになり、一応、日本米いくら、タイ米いくら、ビルマ米いくら、という原則がやっ

と了解されることとなります。

米の問題が出てきたのは、韓国に対する借款の時が最初ですが、いま申しましたような問題が派生してくるので、韓国に対する余剰米の時には、それを現物化して、現物の米で返済してもらうことになった。そうすれば、値段が高い安いということで悶着が起こることがないので。

バングラデシュに関連し米の問題で話しましたが、要するに、国際問題はいかに単純でないかという一例です。借款の中の商品援助について『日本の経済協力』には次のように書かれています。

なお、わが国の円借款は、一九六六年頃までは、概してプロジェクト建設のための資金を貸付ける「プロジェクト援助」が主体であったが、その後、物価の高騰や国際収支の悪化などに悩む国に対し、各種の資本財や消費財を供与する「商品援助」が増加してきている。プロジェクト援助は、一般的にいって、プロジェクトの進行状況の把握、援助効果の測定などが比較的容易であるという利点があるが、反面、開発途上国にとってデモンストレーション効果の大きいプロジェクトに片寄ったり、現地通貨の手当てが思うにまかせずプロジェクトの建設が遅れるような場合も時にはある。一方、商品援助には欠点もあるが、物価の安定や国際収支の改善などの効果をもつほか、自主的に各種プロジェクトのための資本財等の輸入ができる利点もあることから、最近では商品援助の効用が国際的にも見直されてきている。

プロジェクト援助と商品援助の問題は南北問題の研究者の議論の対象となっています。商品援助は、たとえば米、

セメント、衣料品、綿製品などで、機材、たとえば耕耘機一万台という場合などでも商品援助になります。

有名な中国の古代哲学者・荀子の言葉に次のようなものがあります。

「魚を与えたらその人はその日一日をおくるであろう。しかし、その人に釣竿と技（わざ）を与えたら、彼は生涯魚をとり続け生涯食っていくことができるであろう」

中国の春秋戦国時代の哲学者がいつたこの言葉を西歐人が訳し、これが援助や南北問題における諺になっています。そうした考え方からいえば「商品援助は魚を与えることと同じではないか。したがって本当に飢えている時に命を救うという場合以外は、商品援助は感心したものではない」という素朴な議論が、当初のころあったものです。つまり、ダムが建設されれば百年以上も水が供給されよう、商品援助よりもプロジェクト援助、さらに進んでは技術協力が大事であるという素朴な議論です。

しかし、それだつてそう簡単に考えることはできない。プロジェクト援助の場合、これも贈与であつたり借款であつたりするのですが、たとえばダムを作る場合、設計、発電機、建設機械など、いわゆる外貨支出部分が通常贈与や円借款で賄う部分で、いわゆる現地調達分、すなわち砂利、（もし現地にセメントを作る産業があれば）セメント、現地労務費などは相手国が負担する約束になるのが通例なのです。

したがって、日本が一億ドルの援助をする時は、現地政府も三千万ドルから五千万ドルくらいのローカル・コストを負担するわけです。そして現地政府の負担するローカル・コスト分が順調に出れば問題はないのですが、現実には、そんな簡単なことは運ばない。円借款が決まったあとに内閣更迭やクーデターが起こったり、早ばつで作物がやられたとなると、国をあげて危機に見舞われる。米の収穫が少し悪くなっただけで相手国政府の財政は赤信号になる。

そして初年度いくら、二年度いくらというローカル・コスト負担の約束を現地政府は果たせなくなります。そうなる
と、計画全体が止まってしまわなければならないのです。

なにせ、借款問題は二人三脚ですから、一人が気絶したら絶対に走れっこない。そして開発がどんどん遅れてしま
うこととなります。大洪水で国中が無一文になっている時に、食うや食わずの農民に重税を課して、約束のローカル
・コストを調達するなんてできっこありません。ですから、相手がどうにもならなければ本当にどうにもならなく
なつて、こちらが待つてやるしか方法がない。プロジェクトは一年待ち、二年待ち、ということになってしまいます。

多くの本に「援助は散発的ではいけない。もう少し事前調査をじゅうぶんにして計画を密にし、プロジェクトを大
規模化し効率的に行なうべきである」と書いてある。新聞の論説などにもひどいものがある。問題の本質に触れずに、
それに類することを書いている。事実を知らぬ人が読んだら、そうだと思ふに違いない。

しかし、どんなに事前調査をしても、こういうことなどわかりませんよ。再来年ごろに台風が襲来するであろうと
いうことを誰が予見できますか？。それで、「援助にあたっては援助国の自主的精神を損うことがないようじゅうぶ
んの配慮を加えることが肝要である」といつてみても、相手の歯車が動かないことには事が進展するわけがない。美
辞麗句で止まった歯車が動き出すようなら、はじめから南北問題などあるはずがない。

現在、商品援助が見直されているのは美辞麗句からはじめて目が覚めて、世の中はそんなに単純なものではない、
荷子の「魚を与える」種類のものと思つていた商品援助が、あにはからんや、実はこのローカル・コストの「救いの
神」になることがわかってきたからです。このことは、まさにラオスの F E O F (外国為替操作基金) や K R (ケネ

デイ・ラウンド」援助で話したことと原理はまったく同じです。

フィリピンの話をしましょう。フィリピンへ日本から米を援助しました。フィリピン政府は日本から二万トンの米をもらって、それを国民に配給した。米を配給するといっても国民に無料で配るわけではないから売り上げ代金はいってきます。その売り上げ代金をひも付きにすれば、それで砂利、セメントを買ったり労働者を雇ったりすることができま。商品援助にはこうした利点もあります。米ならば売れるということ想定して商品援助をするわけです。米ならば一合でも五合でも現地の人は買うことができるから。しかし耕耘機のようなものになると、そうはいきません。農民に買う資力がなければ売れない。現地で耕耘機九十六台が野ざらしなどという光景を現出することになります。

私がラオスへ行った時のことです。隊員が「見てください。嘘ではありませんよ。あす連れて行きますから……」というので、行って見ました。すると、言葉の通りに機材が野ざらしになっていた。小型耕耘機が倉庫の中でなく外にずらりと並んでいた。いまいった農民の購買資力が無いということ、それから、ラオスの土はカチカチになるくらいひじょうに固いので耕耘機の歯がたたないということで売れ残っていたわけです。

で、倉庫の中をのぞいて見ると、大型トラクターにつける日本製農機具がホコリをかぶって、これもずらりと並んでいました。そして、その農機具になんとU・S・A I Dのマークがついているではありませんか。日本製品になんかアメリカのマークがついているんだらう？ どうもおかしいと思ってたずねてみたら、なんのことはない。日本が与えた商品援助に売れ残りが出たために、アメリカがラオス農民に代わって買ってくれたものであることがわかったわけです。だから、U・S・A I Dのマークがベタベタ張ってあっても文句がはいえない。

とにかく、商品援助は捨てがたい。わかりやすいえば救いの神でもあるけれど、この神様とて全智全能の神では

ない。このことは、ラオスの例でもわかるとおりです。

(五)

それでは、ここで、これまでの話と重複する点もありますが、日本の円借款の評判が悪いことについて話をしておきます。『日本の経済協力』は次のように述べています。

わが国の場合、政府開発援助約束額に占める贈与の割合は一九七一年実績で三三％に過ぎず、D A C平均の六〇％より遙かに低い。また、貸付条件も徐々に改善されてきてはいるが、なお、一九七一年実績で、金利三・五％、返済期間二二・一年、据置期間六・八年と、D A C平均の金利二・八％、返済期間二八・七年、据置期間六・五年に比べれば、その差は依然として大きい。

金利だけをとりあげても、普通の先進国、すなわちD A C平均が二・七％であるのに対し、日本は三・五％です。ですから、日本の円借款は援助要素が他国よりも薄く商業要素が強いといえます。返済期間をみても日本が二二・一年、D A C平均が二八年になっています。こんなふうに一般先進国に比べ日本は渋く、がめついともいえる。据え置き期間は日本が若干条件がいいですが、これは経済援助にとってそれほど大きな要素とはいえません。

次に、援助条件におけるもう一つの大きな要件に「アントイイング」があります。先進諸国の政府開発援助(O D A)におけるひも付き率はアメリカ九七・三％、日本九〇・七％、イタリア六六・二％、イギリス五九・八％、フラ

ンス四三・六多、ドイツ四二・八多となっている。先進国で一番ひも付き率が高いのがアメリカで、次いで日本。ドイツ、フランスはひじょうに低い。だから、ドイツから借款を受けた国はひじょうに喜ぶことになります。どこの国からでも自由に資材等が買えますから。

もつとも、ひも付き廃止の点では最近日本は先進国間のリーダー・シップをとったことがあります。

ともかく、ひも付き問題というのは、なかなか複雑で、仮に日本がひも付きを全面的に撤廃したとしますと、その時の計算はひじょうにこみ入ったことになります。ですから、日本や世界の先進諸国が申し合わせて一挙にひも付きを撤廃したとすれば、日本が得をする計算もなりたつのです。

日本製品はいまや値段が割安であるばかりでなく、性能的にも国際競争力がじゅうぶんにあり、世界を震えあがらせているほどですから、アメリカも、日本も、イギリスも、ドイツも、フランスもみな申し合せてひも付きをやめようということになれば、ドイツ借款のプロジェクトを国際入札で日本が落札したりして、これまで日本がひも付きで借款をあたえていた時代よりもずっと多く日本の業者は受注できるかもしれない、という予測も立てうるのです。

ところで、これまでの話から、諸君は「日本の援助はえらく質が悪い」と思い込まれると思いますが、日本の援助には妙味のある一面もあります。

これはどういふことかといいますと、ここにあげる数字はまったくデタラメですが、たとえば共産圏の国にプロジェクトを発注すると、日本と同じタムの発電機を入れるのに二年もかかります。日本に発注すると早い場合は十カ月ですむ。で、そうなると、予定よりも一年から二年も早く発電機が始動することになります。

ですから、利息が高いことと完成が早いことを天秤にかけた場合、利息が高くて日本の方がいいという計算も

なりたつ場合がありうるのです。

それに共産圏諸国の援助はひじょうに洩いことで定評があります。たとえば日本と同じ能力の発電機を共産圏から買うとすると、普通の場合日本製よりも何割か高い。そして物が悪い。日本だと国内にメーカーが多くあるので、入札方式でやると安く買うことができるが、共産圏の国では政府の管理貿易で、相手が一人であるから安く買うこともできない。「その値段でいいなら借款をつけてやろう」という態度なので、日本に比べるとひじょうに窮屈である。

また、値段の点で日本からの買付けが開発途上国にとって有利なことは、西側との対比についてもいえます。同じ性能の場合、たとえば日本が一千万ドルだとすればアメリカは二千万ドルもします。つまり日本から買えば百万ドルが浮くこととなります。たしかに日本は利息が高いが、アメリカの場合だと利息は安いが一千万ドルに利息がかかるし、日本だと一千万ドルに利息がかかるので、そうした点を考慮して計算していくと、ひも付きを前提にするならば、金利が高くて日本のほうが安くて得をするという計算がなりたつ場合もあるのです。

そんな具合に、いろいろと分析すると、どこまで日本が悪いのか必ずしもいきれないわけです。

次に借款の変形に「債務救済」というのがあります。これを一言でいえば、民間の輸出代金を肩代りしてやったり、あるいは債務がこげついた時に返済期間を延ばしてやるといった調整的な借款のことです。これについては、こういう名前のものがあるのだという程度に知っておればいいでしょう。

それから「国際機関に対する出資と贈与」があります。アジア開発銀行（略称 ADB = Asian Development Bank）もここにいう国際機関の一つです。マニラにあって総裁は日本人です。開発途上国のいるるるな国へ借款をいたします。諸君が行く国で、このアジア開発の融資を受けている国も多いはずですよ。

そして、このアジア開銀の貸付け財源はどこからきているかという点、多くの部分はいろいろな先進国からきています。もちろん、株主としてはネパール政府もラオス政府も出資しているが額は少ないし、大きな出資国といえば日本、アメリカ、その他の先進国からなっています。日本の経済力発展に伴いアジア開銀における日本の出資比重はぐんと高まってきています。諸君が現地で、アジア開銀からの資金融資があったと聞いたならば、その半分は日本国民の税金であると思えばいいでしょう。

ところで、出資といえば株主になることですが、先進国はその他に融資を行なうこともあります。

しかし、こうした資金だけだと資金調達のコストが高くなります。そのために、アジア開銀は低金利の融資をするために、ひじょうに困ってしまったこともあったので、日本は贈与として農業特別基金を設定しました。

さきにも述べたように、農業は、金は貸すけれども、もう返ってこないかもしれないということを腹に決めてかかればならない。また利息を払って借りた金を使っていたのでは逆ザヤになってだめになってしまう。そこで農業基金を低金利の中にセットしたわけです。これは贈与になります。

で、アジア開銀はこの農業基金とまぜあわせて利息を低くして開発途上国へ資金を貸しています。国際機関への出資拠出というのは、そうした性格のもんです。

現在、日本人の中に、日本など先進諸国が単独で開発途上国に援助するよりも国連の旗の下に一致団結してやったほうがいいという強い意見があります。バイラテラルなアシスタンス（二国間援助）よりもマルチラテラルなアシスタンス（多国間援助）のほうがいいという意見です。

私はそうした考え方に反対というわけではありませんが、全面的に賛成しかねます。というのは、アメリカがこれ

までずいぶんやってきた開発途上国援助は、意外にも評判が悪く、星条旗がはためくところ反感を買うケースが少な
くなかった。それでは困るので、国連機関の中でやったほうが抵抗が少なくなるのではないかというのがアメリカの
考え方で、そうした考えに影響されているふしがあるのです。しかし、私は日本の場合、軍事大国であるアメリカと
は相当事情が違うと思うのです。

日本人はいま少し自信を持つべきであるというのが私の持論です。

三 技術協力について

(一)

『日本の経済協力』では「わが国の技術協力が開始されたのはコロンボ計画に参加した一九五四年の十月であった」とし、その現状と特色、問題点、さらに今後の対策等について触れています。

ところで、技術協力はどこにセットされているかといえば、政府ベースの技術協力は政府開発援助(ODA)の二
国間贈与の中にセットされ、民間による純粋の技術協力は民間ベース協力の非営利団体による贈与の中にセットされ
ています。これにより、われわれの技術協力が経済協力の中でどのへんに位置づけられているか、だいたいおわかり
いただけよう。

では、これから「技術協力総論」にはいりましょう。

援助全体の分類は、慣れない人には複合的な要素があつてひじょうにわかりにくいですが、日本の政府ベースの技術協力が「贈与」の項目の中にはいつているのは、たまたま日本の技術協力がグラント（贈与）のかたちで行なわれていたからです。本来的には技術協力といつても無償だけでなく有償による場合もありうるわけで、極端なことをいえば、明治初年に日本は行政、技術などあらゆる面においてヨーロッパ、アメリカなどから「お雇い外人」を招聘しました。これは昨今の言葉でいえば、無償の技術協力でなく有償の技術協力ということになります。

現在、日本の政府ベースによる技術協力はほとんど無償によつて行なわれていますが、中には相手国政府が専門家の給与の一部を負担したり、協力隊員の場合のように住宅を提供することもあります。そうならば、無償といつても日本側が経費の全部を負担しているのではなく、相手国側も経費の一部を負担しているといえます。たとえば、日本側が農業機械と技術を提供した場合、相手国側はガソリン代を出すというふうに。また協力隊員が公務で出張するような時は、しばしば約束どおりにいかないことがありますけれども、その出張旅費を相手国側が負担します。だから、技術協力といつても無償、有償を簡単に分けることはできない。大部分を日本側が負担している場合でも、隊員一人一人を現地へ呼ぶについては、相手国側も相応の経費を使っているのだといえます。

「資金協力」のところでも話しましたが、技術協力の場合にもマルチラテラルなアシスタンス（多国間援助）とバイラテラルなアシスタンス（二国間援助）の二つの方法があります。青年海外協力隊は、二国間援助方式で、諸君の先輩であるOB隊員五名が参加している国連ボランティアはマルチラテラル、つまり多国間援助方式の中に入ります。

国連ボランティアは国連開発計画（UNDP）の資金で行われていますが、日本もその資金の一部を負担しています。

日本から資金の一部が国連開発計画へ拠出されると、その一部が国連ボランティア（UNV）に回ってくる仕組みになっています。

ところで、諸君の中に「マーシャル・プラン」を知っている人はいますか？ 第二次大戦後、戦火で荒廃したヨーロッパを目指してソ連の勢力が拡大してきました。そしてチェコスロバキア等が共産圏の勢力内に陥ってしまった。これを見て心配したのがアメリカで、時の国務長官マーシャルの提唱によつて始められたのがマーシャル・プラン、つまり「ヨーロッパ復興援助計画」です。これは資金援助ですが、アメリカは同様のことを日本に対しても行ないました。対日復興援助計画がそれです。アメリカは戦火で崩壊したヨーロッパ、日本の復興のために、援助計画として膨大な資金を投入した。この二つの援助計画は、アメリカがこれまでに行なつた援助計画の中で最も素晴らしい成功をおさめた例といえます。ほかの援助計画とは比較にならぬほど格段の成功をみました。

なぜかという、当時の日本は、大学教授でも、大造船所の技師でも、食べる食糧がないためにリックサックをかついで東京近郊の山奥までイモの買い出しに行っているたいへんな苦難の時代でした。ぎゅうぎゅう詰め満員電車に押し込まれてフラフラになりながら、生きるための食糧を調達していました。頭脳を働かせれば世界的な頭脳を持ち主たちが、自分の古い背広やワイシャツを農家のイモと交換して生きている時代でした。

しかし、いくら満員電車の中へ押し込まれ食糧の買い出しという哀れな姿をしていたとはいえ、その人たちの頭脳はやはり世界的な頭脳であつた。日本は、いかに戦火で灰じんに帰したとはいえ、すばらしいマン・パワー、頭脳までは焼けていなかったのです。だから、その頭脳と技術に資金が加えられるならば、当然日本は復興するに決まっています。ヨーロッパとて同じことです。マーシャル・プランは日本、ヨーロッパで予想以上の大成功をおさめ、今日に

おける日本、ヨーロッパの繁栄の基礎を築きました。

アメリカは、この調子でやれば東南アジアもアフリカも貧困から抜け出すであろうと期待してやってみたが、今度はおろましくいかなかった。東南アジアやアフリカに、日本やヨーロッパにおけるような頭脳と技術がなかったからです。人材に欠けている会社にどんなに金を注ぎ込んでみても、そうした会社は経営が不良であるから、ドロ沼に金を注ぎ込んでいるのと同じです。東南アジア、アフリカに対するアメリカの経済援助も、これと似たような形になる心配が出てきた。やはりマン・パワーが大事であるということに気付いたようなわけです。そしてマン・パワー育成に応えるものとして技術協力（テクニカル・コーポレーション）が脚光を浴びるようになってきた。

日本の技術協力のスタートは、趣が多少違っています。スタートのころは日本には資金がなかった。資力はないが人間ならばいるという時代が、つい十数年前までであった。しかも人件費が安いという時代でした。日本の世界的な頭脳といわれるような人の給料が、アメリカの同レベルの人に比べて八分の一程度だったから、一番安上がりでできる開発途上国への経済援助は技術協力であつたわけです。

こういう考え方で日本はごく最近まで技術協力をしてきました。しかし、世の中の変化はあまりにも速く昨今はそうしたことがまったく逆になっている。いまや日本は経済大国と呼ばれるほど金持ちになったが、逆に今度は人が間に合わなくなつた。「日本が金を出して外国の専門家を開発途上国へ派遣したらどうだろうか」ということが大まじめに議論されるようなことになってきています。技術協力のうえでも、ひも付きをやめたらどうか——という議論です。私はこうした考え方に賛成できませんが、しかし歴史の移り変りの速さにはただただ驚くばかりです。

ともかく、現在、技術協力はいろいろな観点から脚光を浴びています。しからはい開発途上国のマン・パワー育成の

うえで問題がないかといえ、決してそうではありません。それは、技術協力が技術以前の問題で大きな壁に突き当たっているからです。その大きな壁は、諸君がこれから現地へ行って容赦なく突き当たられる壁です。技術協力の前に大きくそり立つこの大きな壁が何であるかを理解し、諸君にその点の素養を持ってもらおうと思つてやっているのが、実は協力隊で訓練中にやっている「文化講座」なのです。

技術協力以前の問題としてはこんなことがあります。

私は冗談でなくて日本人のことを「一億総インテリ」と呼んでおります。日本人の知性、知識水準を凶形でもつて表わすと「鏡餅型」になる。これに対し開発途上国は「東京タワー型」で、上部が高くて細く、下部だけが富士の裾野型になっています。これはどういうことかといえますと、日本の場合だと、道を行く人を無差別に抽出して、日本で偉い人といわれる人といっしょに知能水準を計るとすれば、その知能の差はごく小さい。鏡餅の上部と下部の差ほどしか違いがないでしょう。つまり、日本人の知識、能力の差は非常に少なく平準化しているわけです。だから、偉いとか、偉くないとかいっても基本的にはそれほど変わるところがない。これはアメリカ、ヨーロッパなどの先進諸国についても同じことがいえます。したがって、日本の鏡餅型の上部の人でも下部の人でも、アメリカ、ヨーロッパの進んだ物を取り入れようとするれば、どの部分の人でも容易に吸収することができます。

しかし、開発途上国の東京タワー型になれば、どの部分の人でもというわけにはいかない。タワーの上部にあたる人たちは知性、教養が高く、そのうえで日本の場合と様子が違つてずば抜けて裕福です。たとえばインドの金持ちは、日本にはそんな大金持ちはいないといえるほど金を持つている。それに、上部の人たちは権力を持つているし国際性もある。インドのネール首相の英語は本場のイギリス人よりもうまいことで定評がありました。インドの外務次官の

英語だつてそうです。印支戦争後のインド外交は、まことに巧妙そのものだったが、これなどもインド上層部の国際性によるものだろうと思います。また、インド上層部には農業、医学など各方面に、数は少ないが、世界的な大学者もいます。

ところが、日本人の国際性ということになるとサッパリです。開発途上国ではちよつと地位のある人は英語ができるのに、日本では相当地位の高い人でも英語を使うだんになると急にコンプレックスを感じ、おかしくもないのに愛想笑いをしてみたり、相手が「ハウ・アー・ユー？」と聞いているのに「イエス」と答えたりする。日本人は「一億総インテリ」でありながら、こと国際性ということになると「総白痴」に近い。

だいたい脱線をしましたが、話を元に戻して、技術協力の場合、開発途上国の上層部の人に技術移転をすることはきわめて容易です。だが、残念なことに、それが下に伝わらない。日本の明治時代の場合のように事が運んでいない。外国でマスターした高い技術を周辺に伝え、それをさらに一般大衆に伝授して国民全体の技術水準を引き上げるといふふうになかなか進んでいません。そのために、上層部の人になんか国際性や高度な技術がはいつてきても、東京タワーの真ん中に厚い絶縁体があるようなもので、容易に下部の人へ伝わらず、一般大衆の水準がなかなか上がらないわけです。

諸君は、みんながみんなとはいえませんが、一般民衆の中へはいつていくわけですが、考えてみればたいへん無鉄砲な話です。しかしこの無鉄砲な方法以外にいまのところ名案らしいものは見当たらない。だとすれば、それだけにひじょうにきびしいチャレンジだといわなければならぬわけです。

これは青年海外協力隊の場合ほど顕著でなくとも、技術協力全体についてもいえることです。開発途上国でスキル

ド・マン・パワー（熟練者）を作りあげること、世紀の、あるいは数世紀に及ぶ課題かもしれない。技術協力は南北問題の一番むずかしい局面を担当しているし、ここを突破することによってのみ南北問題の厚い壁に突破口が開かれるのだと思います。技術協力は最近脚光を浴びてきているが、こうしたひじょうにむずかしい局面をになつていくのだといふことがいえます。

先ほど述べた技術以前の問題についてももう少し立ち入って話してみよう。「向上しよう」という意欲がある水準に達しているところであれば、技術を移転しても種が付きますが、そうした土壌のない所に、どんな立派な種を持つて行っても根付くものではない。いわば不毛の地に植物を植えたり種を播くようなものです。だから、技術協力の本命は技術をトランスファー（移転）することではなく、トランスファーを可能にする土壌の育成にあるといふことができる。最近日本の関係者の中に、そうした意識がだいぶ高まってきました。

技術協力には、とてつもない広がりや厚みがあるわけでして、すぐに技術の移転だと早合点せずに、人と人との接触を通じてなにかの力が開発に寄与できればそれがせいじつばいのことだ、と思つているくらいであれば間違いないと思います。

こうした点について、アメリカ平和部隊のことについて少し触れてみたいと思います。アメリカ平和部隊は創設のころは評判もよく、最盛期のころは一万四千人に及ぶ隊員を開発途上国へ送り出していたのですが、いまは七千人に半減しています（しかし、いかに、人気上昇中の日本の協力隊であるといつても、その数はまだ五百余名ですから、アメリカ平和部隊の七千人は日本からみれば依然としてたいへんな数です。両国の人口比で見るとアメリカ平和部隊七千人は日本の三千五百人に匹敵します）。

ところが、アノリカ平和部隊がどうしてこんなに数が落ち込んだか考えてみますと、これは私の推測で間違っていないかも知れませんが、「価値の多元性」の意識に欠けるところがあつたからではないかという気がします。価値の多元性とは、世の中には American way of life というものもあれば Tanzanian way of life というものもあるという考え方です。各国には各国のそれぞれの価値観があつて、色彩も違えば音色だって違ふという事です。だから、そうした異文化の接触の中で「何かその固有の価値観の中で新しい前進へのきっかけを作ろう」という考えでやれば、拒絶反応に会わないのだからと思います。

技術協力は、先にも話しましたようにひじょうに幅が広くて厚みのあるものです。そして計器があつてそれに基づいてやっておればいいというものではない。相手国側と日本側の間でどういふふうにも取り決めうる。

青年海外協力隊の場合もインドを例にとれば、インド中央政府は「インドはボランティアに教えてもらうなど全然考えていない。極端にいえば、インドへ来て遊んでもらつて少しでもインドを理解してくれるだけでいい」という考え方です。ここがインドのインドたるゆえんでしょうが、中央政府はそうした考え方も地方政府になると考え方が差が出てきて、やはり通常面における技術協力を求める気持を持っています。日本側として戸惑う場合も出るわけですがなにせインドには五億の民がいるし、地域によって日常使う言葉すらも全然違ふような大きな国ですから、中央政府と地方政府の考え方に色彩の差が出ないほうがおかしいのかもしれない。

インドと対照的な考え方をするのがマレーシアです。マレーシアは人間交流の面を忘れていてのではないかと思うほど技術面を重視し、国民の技術水準を引き上げることに関心になつていともいえます。日本から派遣する協力隊員の学歴や技術水準についていろいろと注文があり、また専門家水準の技術でなければとても要請に応えられない

いような人を求めてきたりします。

こんな具合に、相手国の意図にも差があり、要請も多様性に富むわけですから、日本の側にも多様性に応ずるだけの心構えが必要になってきます。その心構えさえあれば、日本人にはそうした多様性に応ずるだけの適応力はじゅうぶんにあると思われます。「相手をシッと見つけて誰も経験したことのない環境の中で作家の創作活動の気持ちでやるんだ。クリエートすることなんだ」という考え方で現地へ行ってもらえば、多様な原理や多様な美に対して即応でき、物事がうまくいくのだらうと思います。

技術協力の範囲がひじょうに広いということを、もう一つの違った角度から見てもみましょう。技術協力といっても科学技術に限られているわけではない。経営や行政もあります。最近日本が受け入れている研修員の場合を見ても、日本の経済企画庁の仕事にあたる経済計画を担当している人が、開発途上の各国から集まって研修をしたり、租税ゼミナールを開いて税金の取り方の技術を研修したり、麻薬取り締まり、関税、地方行政など各分野に及んで研修しています。

一方、日本から開発途上国へ技術協力で行く専門家の場合でも、日本人がタンザニアの道路公団総裁として行った例もあります。この人は昨年の暮れに任期が満了になって日本へ帰国してきましたが、こうした人は技術者というよりも行政官です。こんなふうに技術協力も多岐に及んでいます。また、そうした専門家をランク付けしますと、いま話したタンザニアの道路公団総裁やタイの農林省最高顧問（大臣に直接進言できる人）のような場合から、協力隊員のように最前線に立って民衆に食い入る人びとにいたるまで、多種多様です。

次に、技術協力の隣接地帯とでもいうべきもの、関連性がある類似事業に話を移しましょう。その一つが留学生で

す。これは研修員受け入れとはほとんど無一事です。日本では留学生の受け入れは技術協力でなく文部省のカテゴリーになっていますが、開発援助委員会（DAC）の統計では留学生も技術協力の一つとして取り扱われています。

次に、日本にはいろいろな人間交流計画が行なわれています。総理府が毎年実施している「青年の船」や各県が実施している「青年の船」「青年の翼」などがそれです。しかし最近、こうした計画に対して、「もう少し有意義なワーク・キャンプなどをやったらどうだろう」という意見も始めております。そんな具合で、いま行なわれている日本の青年海外派遣計画も徐々に人間交流の度を強めて行こうとする兆を示しています。そうなれば諸君がやろうとしている協力活動に接近してくるでしょう。しかし、民衆の言葉で語り二年の歳月をその地に住む諸君とは、まだたいへんな距離があるといわなければなりません。

それから国際交流基金というのがあります。学者の交流計画ですが、先ごろ、日本を研究している世界の社会人類学者が京都に集まってゼミナールを開きました。これも世界の学者が日本の学者と意見を交換するということで意義があり大きなことです。

しかし、青年の船にしても、学者の交流にしても「ピープル・トゥー・ピープル」（民衆と民衆の接触）というところまではなかなか行きにくい。民衆と民衆の接触交流はそんなに簡単にできるものではありません。諸君たち隊員がこれから現地へ行って、そのためにいろいろと苦勞をするわけです。

現地で「民衆」といわれる人びとは、先に東京タワー型の例でも話しましたように、いわゆる東京タワーの真ん中から下の、英語もわからないような人たちです。アフリカの奥地へはいますと、スワヒリ語ですら話せない人びとがいるんですよ。意識を通じさせることが実際にはいかにむずかしいことか。日本とアメリカだったらピープル・ト

ッ・ビーブルの接触交流は比較的に楽にできます。アメリカも日本と同じように鏡餅型ですから。スウェーデンだってそうで、先進国同士ならば大概はできます。だが、開発途上国ではビーブル・トゥ・ビーブルということは、うまい具合にはいかない。

そして、この地球上に、人間交流をしようと思ってもなかなかできない東京タワー型の下部に相当する人びとが、全人類の三分の二を占めているのです。諸々の人間交流からまったく遮断されている彼らには、国際性も、知性も、富もありません。しかし、彼らは知性、知識はないかもしれないが知恵は持っていますよ。知識のことをナレッジといい、知恵のことをウイズダムといいます。人間は数千年の歴史の中で培った「生きる知恵」は持っているものです。二、三日前にラオスのサバナケットから帰国した隊員が「彼らは知恵はありますよ。決してばかにしてはいけませんよ」と話していました。

それでは、人間交流の世界から遮断されたこういう人びとと人間交流するにはどんな方法があるかといいますが、これこそがまさしく青年海外協力隊の独壇場のようなものであるといえます。日本をこういうたいへんな数の民衆から孤立させないというのを考えると、そのことはまさしく協力隊にかかっているといっても過言ではありません。

協力隊は職種において多元化していることは既に述べたとおりですが、このことは事業の運営をひじょうにむずかしいものになっています。隊員諸君の逆抜試験の時だってそうです。諸君を選考するのに最低三十数人の技術試験官を要します。これが一職種であれば選考だって比較的簡単にすむのですが、また諸君が現地へ渡った場合、一職種であったならば、事務局も技術の相談にのれる駐在員一人を専門家としておけばいいのですが、こんなに職種が多様化してくればそれも不可能です。

こんなふうに、職種の多様化は事業の運営をひじょうに困難にしていますが、しかし、この職種の多様性の中にこそ筋金入りともいうべき人間交流の場が展開されるのだと断言できます。諸君はみな専門の職種を持ち、現地でそれぞれ自分の職種の職場へはいつていきます。現地で相手にする人びとは、たとえ技術は諸君より下でも、諸君と同じ職種で生計を立てている人びとです。漁業と漁業、農業と農業という具合に、日本と相手国との間に諸君の職種を通じて職種ごとに無数のパイプが結ばれていきますが、このパイプは国と国とを結ぶ一番安定した信頼性のある絆である。国と国とを結ぶ人間交流という側面からみれば、職種の多様性の中にひじょうに大きな意義があると思います。

国際交流で学者が一堂に会してやるセミナーでは、そんなけんかなどは起こらない。自分のオビニオンを述べ、お互いにオビニオンをいっあつておればいいのですから。しかし、諸君の場合はテーブルでのセミナーではなく職場での実践です。「俺はこんなにやっているのに、相手は少しもついてこない」とか「なんと気狂いみたいに働いて文句ばかりいう人間なんだろう」とか、互いがカッカするような場面が起こりましょう。職場に直接関係のないような村人とのつきあいは比較的に楽です。こちらから相手の家へ出かけていって地酒を飲んだりいっしょに踊ったりすればいいのだから。こうした職場外の人間交流は比較的スムーズにいくものです。ところが、職場内における人間交流——人間と人間との触れ合いは、そんなまやさしいものではない。

こうした実践的な職場の中に諸君は二年間を過ごすわけです。「任期二年は短い」といいますが決して短くはなく、二週間程度のセミナーとは比較にならぬほど長いものです。この実践の二年間をやりとげる間に培われる相互信頼こそ、本物の信頼関係であり、まずどんなことがあっても崩れることのない強い絆ではないでしょうか。とかく友情は、一目ぼれした友情よりも、何回か大げんかをし絶交寸前という危険を乗り越えて定着した友情のほうが深く価値

のあるものです。「彼はいい奴だ」という程度の友情ならば、何かの時に一べんに吹き飛んでしまおうおそれがあるのですが、大げんかもあつたいろいろな曲折のすえに結ばれた友情はひじょうに強い。こういう意味で、諸君が日本へ持ち帰ってくる友情は私は本物の友情であると思います。そして、その友情は今後永劫に続くであろうと思います。随分長くなりましたが、以上で技術協力の総論を終わり、これから技術協力の仕組みについて説明しましょう。

(二)

「海外技術協力事業団」(略称「OTCA」)というがあります。諸君の中には知っている人もおられましょうが、事業団とか、公団とか、公社は、通常「特殊法人」といいます。技術協力は政府直轄でやるよりも特殊法人に依頼してやらせたほうがうまくいくのではないか、ということで設立されたのが海外技術協力事業団(OTCA)なのです。OTCAは日本でこそあまり知られていませんが、開発途上国では知らない人がいないほど有名になっています。ところで、OTCAと青年海外協力隊事務局とはどんな関係にあるかといいますと、青年海外協力隊事務局はOTCA本部からほとんど独立的に事業を運営しているという意味において、OTCAの外局のかたちになっています。ところで、OTCAの仕事量は、日本の政府ベースにおける全技術協力の約七五割を占めているわけでして、OTCAを説明することはだいたいの日本の技術協力を説明することになるかと思えます。OTCAはどんな予算規模で運営されているかといいますと、一九七二年は約九十六億円でしたが、一九七三年の今年は急激に増加しまして約百二十億円になっています。青年海外協力隊予算はそのうちの六分の一にあたる約二十億円です。

OTCAが行なっている技術協力事業の一つは研修員の受け入れで、これは技術協力における大きな柱の一つにな

っているので、どんな制度か説明してみましよう。先に「研修員と留学生は紙一重である」と申しましたが、研修員は留学生と違つてほとんどが社会人であり、留学生は申すまでもなく学生です。そして研修員は社会人であると同時に、仕事の分野において、その国ではエキスパートの人たちなのです。その技術をさらにブラッシュ・アップするために日本へ研修を受けに来ており、最近では研修員の数も大幅にふえて昨年の二千二人に対して今年は二千三百人になりました。そして来日している研修員は、一般には東京タワー型の真ん中から上に属する人たちで、政府役人の場合は普通課長以上の地位の人たちで、中には局長、次官クラスの人もいます。日本としても、両国親善のためにいへん大事にしなければならぬお客様です。

諸国がこれから行く相手国からも、研修員として多くの人が東京・市ヶ谷の国際研修センター（TIC）に来ています。隊員の訓練をやつていてこれまでに何回も考えてきたのですが、これから派遣されていく相手国の研修員とは、国が同じであるというだけでなく、職種も同じであるという場合があります。こういう同じ仕事の分野の人と交流を深めることができればどんなに有意義であろうと思つています。このような場合は、諸君が国際研修センターへ訪ねて行つて一日を鎌倉案内でもし、昼食を共にしながら親しく語り合つておけば、諸君が現地へ行つてどれだけ仕事がやりやすくなるかもしれない。

また、諸君が現地で「この人はりつばな人で仕事熱心である。日本へ勉強しに行きたがつている」といったような場合、諸君の推薦で研修員として日本へ来させることができればどんなにすばらしいでしょう。もしその実現の可能性が強い場合は、諸君があらかじめその人に日本語を教えることもできようし、その人も日本へ行くまでに諸君からできるだけ技術を吸収しておこうとしてハッスルし、いろいろな副次的な効果もあがつてくると思ひます。

ところがこうしたことがうまくいかないのには、O T C A の研修員受け入れ制度に一つの制約があるのです。それは「相手国政府の要請に基づく……」という条件があるからです。諸君が仮に現地政府に対して「この人はりっぱな漁師で日本へ研修に行きたがっているのだ」と推薦したとしても、相手国政府の都合でその人が最終人選まで残れるかどうかはわかりません。その人が人選にもれて別人が来ることもじゅうぶんありうることです。

一昨年、こうした問題を回避するためもあって「県による研修員受け入れ制度」ができ、外務省からこうした都道府県に対し補助金が出ることになりました。発足の年は熊本、兵庫、山梨の三県にすぎなかったのですが、いまでは、福岡、長崎、広島、高知、香川、大阪、三重、愛知、長野、群馬、宮城が加わり十五県に達しています。諸君が出身県庁のほうの信用を得て「あの青年が推薦する人であれば大丈夫であろう」ということになれば、諸君の現地の知り合いの人が県研修員として来日することも可能です。

O T C A 受け入れの研修員には、集団研修と個別研修の二種類があります。そして集団研修には約百二十のコースがある。官庁では防衛庁、北海道開発庁を除き全部の省庁が関係しています。この集団研修で、たとえばO T C A が今年の何月から何月まで鴻ノ巣で病虫害コースを開くといったような場合、O T C A はそのコースのメニューを作り開発途上国から研修参加希望者を募集します。そしてそれに基づいて相手国政府から、その病虫害コースに誰々を研修に参加させたいという要請が外務省を通じてO T C A に寄せられます。もし参加希望者の中に経験未熟な人がいた場合は、O T C A はその人を参加させることを断ることもできます。

こうした研修コースは、先にも話しましたように百二十ほどあるのですが、O T C A が直轄でやっているのは神奈川県川岸三崎の国際水産センターと茨城県内原の農業センターの二カ所で、あとは各省の試験場などに依頼したり、農業

機械のようなものになりますと、農業機械メーカーなどに委託してコースを設定しています。

これらコースは日本語でなくたいい英語でやるのですから、徹底した研修をすることは並みたいいことでは
ありません。官庁にせよ、民間会社にせよ、日本の職場で英語が通用するような所はほとんどない。だから、研修員
には技術指導の教官とその通訳の人を付けなくてはならない。そして研修期間中、教官と通訳はずつと研修員に付き
きりということになります。

研修員を受け入れる官庁や会社側の気苦労もたいへんなものです。なにせ研修員の中には、宗教上、豚を食べない
回教徒もいるといったふうで、食事の面においてもそうしたことを配慮しなくてはならない。また、研修コースの通
訳がともむずかしい。コンピュータ関係の通訳になると、日本語の専門用語がわからなければ、どんなに外国語
がうまい人でもいい通訳はできない。国立痛センターでは毎年研修員を受け入れています。そういうところで通訳
する人は、医学関係の何千という専門用語がわからなければ、研修員に対しコース内容をわからせることもできない
です。から、とてつもない苦労があるわけです。

ところが、集団コースは五人とか十人とかいっしょにやるのでまだいいが、これが個別研修となると一段と研修員
の受け入れがむずかしくなります。どんなふうにもむずかしいかといえますと、個別研修についてはOTCAがメニ
ューを作るわけではないのです。たとえば、マレーシアが経済開発五カ年計画を立案したとしますと、その計画に基づ
いて、ダムを作ったり、発電所をこさえたり、各種の工場を作ったりしなければならぬわけです。そうすると、現
在のマレーシアのマン・パワーではとても各分野の仕事を動かすことができません。で、各分野のスペシャリストを
養成するために先進諸国へ研修に派遣することになります。アメリカへ何名、イギリスへ何名、日本へ何名という具

合に。そしてマレーシア政府から日本に対して、何の職種の研修員一名を受け入れてほしいという要請が来るわけ
す。

こうして、たとえば電波管理関係の研修員一名を郵政省がO.T.C.Aの依頼に基づいて受け入れたとしますと、日本
人の職場の中に外国人が一人ポツンとはいってくることになります。しかも、その外国人は日本語がわからない。外
国人である研修員に、その職場の仕組みをわかるようにしてやることはたいへんなことです。一人の外国人の
ために日本人の職場全体がずいぶん手間をかけさせられる。その研修員一名に、技術を教える人とそれを通訳する人
の都合二名の日本人を付けてやらなければならぬとなると、手間がかかると同時に経費も馬鹿にはなりません。

前に映画撮影の研修員が来たことがありました。映画撮影となればフィルムをどんどん使わなければならない。な
にせ研修ですから。すると月に二、三十万円もフィルム代が吹き飛んでしまう。それが鶏のヒナ鑑別となると、もつ
と経費がかかります。熟練者がやればちゃんと鑑別され分けるのに、研修員は研修のために練習をするのですか
ら、メスのヒナがどんどんつぶされていって、月に五十万円ほどの損失があつたのですよ。それだけではない。研修
員にはヒナ鑑別を教える人と通訳をつけてやらねばならない。指導する人は通常ならばどんどん生産を上げること
ができるのだが、研修員に教えるためにそれができなくなる。

こんな具合に、個別研修になりますと受け入れ側としてもひじょうにむずかしい面があるわけです。経済計画立案
のように鉛筆、机、椅子があれば研修ができる場合でも、指導者と通訳をつけなければならぬ。ですから、日本に
おける研修は高級技術通訳者がいないかぎりできないという弱点があり、日本人は総じて英語に弱いので、こういう
高級技術者がひじょうに少ないという事情もあります。そして、こうした通訳のよし悪しによって研修効果はひじょ

うに違ってくる。

とにかく、日本の技術協力特有のむずかしさとして以上のような種々の問題点があるのですが、それにもかかわらず、年に二千三百人に及ぶ開発途上国からの研修員を受け入れています。

研修員の多くは技術面に限らず日本人を理解し日本社会の理解を深めたいと考えており、研修員が人間疎外の東京に集中していたのでは、その効果も期待できません。神奈川県三崎にOTCAの国際水産センターがあり、漁業関係の研修員を受け入れています。三崎は漁港で小さな町です。研修員が道を歩いていたり、喫茶店にはいたりします。近所の八百屋のおばさんや喫茶店の女の子が「〇〇さんおはよう」とやさしい言葉をかけるような民衆の人情がまだまだ残っているような町です。それが東京のような大都会になりますと、みんなが知らない顔をして道を歩いています。とても東京では民衆に接するような機会はない。だが、三崎にはそれが数多くあるのです。

よしんば講義内容があまりよくわからなかったとしても、研修員は、朝早くから働いている近所の魚屋さんの姿を見たり、日本の民衆のやさしい心に接して帰国できれば、これはたいへん有意義なことだろうと思います。技術協力は、とかく技術以前のところに問題があるのですから。だから、研修員受け入れは大東京のような人間疎外の地ではなく地方に分散させたほうがいい、という意見を私は強く持っているのです。

最後に、技術協力は、その効果においてプラス百点にもなればマイナス百点にもなるのだという「おそろしさ」について触れてみましょう。日本の過去の歴史を見ると、日本が日露戦争に勝った数年後に、中国から一万人を越す人が留学や研修のために日本へやってきました。当時、中国にはたいへんな日本ブームが起きていましたから。ところが、それがプラスに作用すれば太平洋戦争や日華事変は起こらなかったと思うのですが、それがマイナス百点に

なつた。

日本の社会全体が日本へやってきた中国人をたいへん蔑視したのです。日本人は民族と民族の間に傾斜を作りました。平等観は相手に対等に見ることですが、日本人は西洋人を仰ぎ見るコンプレックスの裏返しとして中国人を蔑視しました。そうした目が、当時日本へやってきた一万余の中国人にそがれたのですから、そうした人たちが国へ帰って排日運動を起こしたとしても当然といえます。

ですから、過去の例を見てもわかるように、研修員の数をふやすだけではいけないと思います。日本の関係者だけがどんなに気をつかってもだめで、八百屋のおばさんや駅員といったような国民全体の研修員に対する思いやりが大事であると思います。そうしないと、かつての中国留学生のような轍を踏まないとも限りません。たとえば「技術協力はエコノミック・アニマルではない」といつてみても、日本の国民全体の考え方が、「日本は経済大國になつたのだ」と思いあがっていたらとんでもないことになるだろうと思うのであります。

(三)

次は日本から開発途上国へ出かけていく技術協力の二つ目の形態について話してみましよう。『経済協力関係資料』（外務省経済協力局一九七二年六月編）によりますと、一九七二年三月三十一日現在における専門家の派遣数は、累計で六二六三名になっています。これに対して青年海外協力隊員の派遣数は、昭和四十八年四月現在で一三九五名です。

数の上から見ますと歴史が長いこともあり専門家の数のほうが圧倒的に多いのですが、ここで数を読む際注意しな

ければならないことは、専門家の派遣期間がひじょうにマチマチで変化に富んでいることです。長い期間になると、十年近くも現地にいる人もおれば、六年とか二年とかの人、さらにひじょうに期間の短い人になると一、二カ月の専門家もいます。ことに医療関係の専門家になりますと、この一、二カ月の短期派遣が主になっています。ですから、両者を比較して統計を語る時は、それを「人月」に換算して見る必要があります。仮に任期二カ月の専門家十名を現地へ派遣したとしますと、その人月は二十四人月ということになります。その式で任期二カ月の協力隊員を人月に換算しますと、隊員一人の人月は二十四人月ということになります。したがって、この人月のやり方で専門家と協力隊員の派遣比重をみますとほぼ同じであるといえます。

一般専門家が派遣されている地域はアジア、中近東・アフリカ、中南米、その他地域の四地域に分けられますが、このほかに国際機関に対する派遣というのがあります。これは二国間援助と多国間援助の混血のようなものです。国連等の国際機関が直接自分たちで採用して派遣しているわけでなく、O T C A (海外技術協力事業団) に派遣を依頼し、現場では国際機関の下で働く専門家ということになります。たとえばタイに「メコン委員会」というのがありますが、この委員会はメコン河開発のため E C A F E (アジア極東経済委員会) の下部機関として設けられたもので、その委員会の部長職に日本から専門家が派遣されたことがあります。

専門家派遣で協力隊と性格を異にするものに、先に話しました一、二カ月の短期派遣のほか、センター方式の長期プロジェクト型のものがあります。インドですとコポリ、アラール、ピアラ、マンディア(以上農業普及センター)、ダングカラニヤ(農業指導センター)など五カ所に農業協力関係のセンターがあり、億単位の大規模なプロジェクト協力が行なわれています。そして各センターには灌漑、灌漑、農業土木などの専門家がはいつていますが、病虫害関

係になりますと、日本に専門家が少ないこともあって現地に長くはりつける余裕がないので、時々病虫害専門家が各センターを巡回指導する形をとったケースもあります。

次に、専門家と協力隊員はどこが違うかについて話してみましよう。過去、隊員の中に「専門家たちは出稼ぎにきているみたいだ」という声もあつたようですが、こうした声はどうして起きたかといいますと、結局、隊員の海外手当が低かつたからではないかと思えます。

隊員の海外手当は極力低く抑えるような方針をとっています。こうした方針をとっているところは日本の中でもちよつと珍しいでしょうが、世界を見渡してみるとそうではないんで、現在協力隊員の海外手当は月額百七十ドル平均ですが、国内の有識者の中には、この百七十ドルさえも高すぎるという意見もあります。日本の協力隊員の海外手当をアメリカ平和部隊員の場合と比較してみますと、派遣先国によつて違いもありますが、エチオピアの場合は例外として、一般には日本の協力隊員のほうが高くなつています。アメリカ平和部隊員の海外手当は百ドル未満という場合もよくある。現在開発途上国へボランティアを派遣している先進国は二十二カ国に及んでいますが、海外手当の点からいうと日本の協力隊員は高いほうになっています。

ところが、専門家の場合はどうでしょう。日本の専門家は世界各國の専門家と比較すると一番低く、最近大幅に改善されたといいますが、まだ低いほうに属しています。「苦勞しているのに協力隊員と専門家の格差が大きすぎる」といいますが、他の先進諸国ではもつと格差が大きいです。民衆と生活を共にするという協力隊の本領はなにも日本だけでなく、世界の海外ボランティアに共通の考え方なので、そこに専門家と一線を画するわけなのです。もつとも理想からいえば、技術協力全部がボランティア精神の姿でやるのが一番いいのでしょうか。

それから専門家と協力隊員には医学的な相違があります。人間の異質な自然環境への適応力は、三十歳を越すころから急激に低下するといわれています。四十歳以上になると通常は現地生活に適応しろといっても無理で、現地で地酒を飲んだりすると、たちまち翌日下痢を起こして帰国するまで治らないということもあります。その点、諸君たち協力隊員のような若い人は、そんなことには平気ですぐに慣れてしまうものです。ですから、ああいうアジア、アフリカのような奥地でボランティア活動ができる者は諸君たち若者しかないと思います。もつともマラソンをしても私より若い若者もいますから、個人差もありますよ。

次に協力隊員は大部分が独身者であるということです。妻帯者でも単身赴任の意志強固な人は隊員として採用してありますが、一般には独身者が多く身軽です。ところが専門家になりますと、前にも話しましたように、タイの農林大臣の最高顧問の専門家やタンザニア道路公団総裁の専門家などたいへんな地位の人もいるように、要するに高度な技術が要求される人が多いわけです。高度の技術が要求される人ということになりますと、年齢好はだいたい四十歳以上で子供もいる人ということになります。子供があれば教育もしなくてはならないし、五十歳過ぎると娘をお嫁にやる準備もしなければならぬ。こんなことで、妻帯をかかえていて身重であり、経費もかかるでしょう。

それから日本国内にある大きな障害の問題です。協力隊員の場合でも深刻な問題なのですが、日本には依然として根強い島国的社会意識があります。外国へ行くとなると諸々の不利な条件が加重されてきます。たとえば会社などの場合、いやな言葉ですが、外国へ出ると主流から外れてしまふとか、あるいは開発途上国に在る間に技術の進歩に遅れてしまふとか、もつとみみっちい話をすれば、ほかの人が昇給しているのに自分の昇給はストップしてしまふということがあります。四十前後の働き盛りの人にとり、これだから人生の本番だと思っている矢先に、開発途上国へ

行くため、これまでの職場を抜けてしまうことはひじょうにきついわけです。

そうした条件等がありますので専門家として海外へ出かけることはたいへんな苦勞がまいりますし、海外へ行くとなると何か問題があつたから行くのだからと思われがちなのが日本の社会意識です。そうした意味で専門家の地位を高めるためには、俗っぽい方ですが、やはり報酬を社会的地位になぞらえる必要があろうと思います。

この点、協力隊員の場合には、まだ若いのだし、報酬と社会的地位というようなことをかなくなり捨てる立場をとり、奉仕精神に徹することに誇りを持つという考え方をとっています。このように専門家と協力隊員の場合、いろいろな制度を作りあげていくうえで哲学が違っているわけです。

そうしたことで、現在専門家については協力隊と発想を異にし、待遇を国際水準まで持つていって、一流の人を開発途上国へ出せるように努力が払われています。さきにも話しましたように、最近専門家の待遇もよくなりまして、海外手当は昨年（四十七年）から一五%以上も上がったし、所属先補填制度も逐次根付きつつあります。日本国内で仮に三十五万円の月給をとっている人が専門家で出た場合は、海外手当とは別に、その三十五万円分を国が会社に補填し従来の給料を継続してもらつた制度です。こうしたことで国内給料も上がっていきますので、近い将来には、国内給料と海外手当を合算しますとほぼ国際水準に達するようになるかと思えます。

しかし、専門家の給料がよくなったからいい専門家が集まるかといえますと、協力隊員を集めると同じように、依然としてむずかしい問題があります。専門家について、「現地の言葉を勉強しようという意欲が少ない」、「言葉を覚えようとしなから現地側との接触が少ない」などいろいろな批評がありますが、これらの点で比較的評判のいい協力隊員だつて、全部が全部はめられているとは限りません。

ともかく、なんだかんだといわれても、専門家は相当高度な技術を持っていることに間違いはありません。ですから、技術協力において、「専門家と協力隊員を組み合わせてやれば、相応りつばな仕事ができるのではないか」という意見がずいぶん多いわけです。現に組み合わせている例もあります。

ところが、この二人三脚はどうもうまくいかない。まずくなったほうが多いわけです。どんなところに原因があるかといえは、まったくつまらないことに起因している。協力隊員は専門家を心構えの点で軽蔑したり、専門家は協力隊員に「ろくな技術も持っていないで」といつてみたりして、まったく夫婦げんかのような感じのものもあります。

専門家と協力隊員があまりにも近接していますと、蚊に食われながら寝ている隊員と、ルーム・クローラーのきいたへやの中に寝ている専門家との間に、どうしても生活の違和感が生じてまいります。人間、神様ではないので。そこで、違和感を解消しようとして、専門家は協力隊員を夕飯に呼んだりしてよけいな気をつかわなければなりません。協力隊員のほうも、飯を食わしてくれるのはあたりまえだといった顔をして、夜中の十二時、一時まで酒を飲んでいゝる。そうなると、専門家の家族の方たちまで迷惑をかけることとなります。そんなことで、専門家と協力隊員がいっしょに仕事することは、嫁さんと姑が同居しているようなものです。

同じプロジェクトで専門家に協力隊員を付けてやるような場合は、私は専門家の人に「お互いに人間ですから一定の距離を置いたほうがいいでしょう」とお願いしています。協力隊員はどうしても民衆指向型ですから、将校面をした専門家の下で使われている兵隊はいやだ、俺は自由に自発的に行動したい、という気持ちがあります。だから、専門家があまり上から抑えつけるようなきついことをいったりしますと、どうしても反発します。だから、隊員の守備範囲を大まかに設定して、あまり細かく干渉しないほうがいいと思います。今後も「専門家と隊員をいっしょにした

らしい」という考え方が出てくるでしょうが、私としては、「そう簡単にいくものではない」という考えのもとにじゅうぶんに吟味したうえで組み合わせることにはしています。

専門家の派遣業種分野は協力隊員の派遣分野とはほぼ同じです。しかし中には隊員にちよつと歯が立たない専門分野もあります。経営とか行政とか、インドネシアの海運関係とか。インドネシアはご承知のように多くの島々を持つた国で、国内貨物輸送を合理化することは、ちょうど明治維新後の日本に課せられたような国家の重要課題になります。そのインドネシアの国家の重要課題に因應するために、日本から海運関係の専門家の顧問団が出ています。この人たちはソウソウたる日本のトップ・レベルの人たちで、インドネシア海運制度の企画・立案にタッチしています。そういう高度なものになると協力隊員ではちよつと歯が立たず、二、三十年の行政経験がいります。

そして、専門家派遣には単発の専門家派遣と、いま話したインドネシア海運関係のようなグループ派遣があります。グループ派遣はプロジェクトの規模拡大に伴ってふえていく傾向にあり、最近では業種別の様相を呈しています。

O T C Aの中には国内事業部と海外事業部というところがあり、前者で研修員の受け入れ業務を扱い、後者で専門家派遣の業務をやっていたのですが、専門家派遣事業がだんだん大きくなるにしたがつてプロジェクト方式のグループ派遣が始まりました。第一が技術協力センターで、いわゆるセンター事業といわれるものです。現在、アジア、中近東、アフリカ、中南米地域にたくさん職業訓練センターがあります。センター事業は海外事業部の中に一つの部門として立ち立てられたものですが、やがて医療協力関係が海外事業部から独立したかたちで医療協力部としてでき、同じかたちで農業協力部ができました。さらに開発技術協力室というのでもできた。

開発技術協力室——ちよつと読んだだけでは何のことかわからない人もいますが、要するに、農業協

力に似ていて、開発途上国における一次産品の輸出商品（たとえばタイにおけるトウモロコシなど）を増産する目的で設けられたものです。国内消費を目的にしないで、海外への輸出商品を開発するところです。トウモロコシの場合、海外輸出のためにいい品質に統一し、大量に生産しなければ輸出できないし、それに船積み港の諸施設まで考えなくてはならない。当時、日本はトウモロコシのほとんどをアメリカから輸入していましたので、タイで日本の消費に適した品質（色とか水分）のトウモロコシを開発することは、輸入先の拡大を意味します。

これはエビについてもいえます。日本はエビの開発技術協力をまだやっていませんが、日本料理に適した見た目のきれいなエビの養殖開発が、どこかの国で行なわれるようになるかもしれません。また鉱物資源についてもそういえます。

以上のようなことで、専門家派遣のカテゴリーは医療とか農業から水産、電気通信へとどんどんプロジェクトが大規模化し発展していく要素があります。また最近では業種別のもから地域開発へと進んでおります。

地域開発が芽生えつつあるのはインドネシアのスマトラにあるランボン地区です。ランボンで農業開発をやるうとすれば、とても農業だけではダメで、同時に医療、教育、交通、運輸などを含めた地域総合開発的なことをしなければ開発はできません。ただ地域総合開発までもつていこうとすれば、ここらへんでそろそろ「日本に何か野心があるのでは？」という受けとり方が現地でされる危険がでてきます。ランボンが日本地区みたいなものになると、インドネシアの中に日本の支配地域ができてしまうと疑われる危険が出てくるのです。だからといって、地域総合開発になれば、中途半端なやり方ではとてもできるものではありません。多くの日本の専門家が各分野にはいり、それに輸送協力、借款といったようなものを加えてやらなければ、とても地域開発はできるものではありません。そこらへんに

これからシレンマが起きてくるでしょう。

インドネシアに次いでアフリカに目を転じてみましょう。諸君もご存知かと思いますが、現在タンザニアにキリマンジャロ総合開発計画というのがあります。これはタンザニア政府がごく熱望している計画ですが、タンザニアは日本にやらせたいといっています。現在のところ、日本に熱意がないのでタンザニアは失望しているところですが、日本の協力があまり強すぎると、それはそれでまた現地側が「日本に野心があるのでは？」と心配する危険がある。いずれにしてもこうした地域開発は今後も出てきますし、協力隊員の派遣要請にもつながってくることも多いと思います。その時は先ほどの専門家との関係も考慮して判断していかなければならないでしょう。

それからもう一つ専門家のことについて話してみましょう。諸外国の場合、現場の専門家と同時に中央官庁の中核部に顧問も送り込んでいます。だから、中央から地方の現場へ発せられるいろいろな指示の中には、現場の専門家の意見が多くとり入れられています。中央官庁にいる顧問と現場の専門家との間には、常にコミュニケーションが行なわれていますので、現場の専門家がフラストレーションを起こすことが少ないわけです。これは反面、その国のたとえば農政部門がある国が支配するという危険が生ずる可能性があります。いずれにしても、現場に展開している専門家たちにとってこれほど仕事がやりやすいことはない。

この点、日本の場合は中央政府の最高顧問的な人は少ないのです。だから現場の日本人専門家にはどうしてもストレスが出る危険があります。それに、現地の言葉や英語の語学力が不足しているために実力の四〇％しか発揮できない場合もあり、技術協力における言葉のハンディキャップは日本の宿命のようなものになっているのです。

(四)

これまで技術協力の大きな二つの柱について話してきましたが、今度は「特殊な技術協力」について話してみよう。それは開発調査です。この開発調査の内容を見ますと、経済協力関係資料によれば、「投資前基礎調査」「海外開発計画調査」「メコン河開発計画調査」「実施設計」等となっています。開発調査とはどんなことかといえますと、大きな観点から見れば資金協力のお手伝いのようなものです。いい方にちよつと語弊がありますが。

前に「なんとか援助をふやしたいのだが、いいプロジェクトがないために日本の援助は伸び悩んでいる」と話しましたが、いいプロジェクトがないことをもう少し詳しく話しますと、インドネシアのランボン地域開発やタイのトウモロコシ増産計画は相当計画的な頭脳と技術がなければ計画案だつて作れるわけがありません。産品の積み出しのための港をどこに造るか、ということを考えなくては全体の計画が立てられません。そして、潮流がどうなっているかとか、過去にそこでどんなことが発生したかなどいろいろな問題も調査しなければなりません。また港の経済的な立地条件から、何万トンまでの船の使用を可能にするように設計するかなど、その地域全体の今後十年あるいは二十年の趨勢を見極めないことには、港湾の近代化はできない。

私はよくいいますが、アイデアならば誰でもできるが、アイデアだけではダメだ。中には素晴らしいアイデアもあります、しかしアイデアだけでは物事は進みません。アイデアをデザインまで持っていくところたいへんな苦労があるわけです。つまり、そのデザインをするのが開発調査の目的です。

その技術は現在のところ開発途上国にはまずない。だからデザイン造りに日本から出かけていくというわけです。

そして、デザインを造るためには一回の調査団派遣で済むことはまずありません。はじめに予備調査をやり、多い時には予備調査を三回もやって、次にフィージビリティ調査をやり、そして、それが可能であるかどうかの дайたいのめどをつけます。その調査も、一回で済む場合もあれば何回もやることもあります。

フィージビリティ調査の最終結論が出ますと、その調査報告に基づいて、日本へ借款を要請したり、あるいはアジア開発銀行などに借款を要請することになります。フィージビリティ調査報告は、その場合要請の裏付け資料となるわけです。

で、フィージビリティ調査報告ができると、次に、その国はどこから資金を調達しようかということになる。日本に頼もうかアメリカに頼もうかと。日本の場合ですと、大部分の場合、経済協力基金から借りることになります。そこの話し合いで貸し付け条件が決まり、利息いくら、償還期間何年、据え置き期間何年ということになります。そして、その時に利息をいくらにするか、償還期間を何年にするかということは、フィージビリティ調査報告の内容によって大きく変わってきます。そのいかんにより借款が無利息に近いかたちで決まることだってあります。

そんなわけで借り入れ条件が決まるわけですが、それが決まるとすぐに開発にかかれるかというところではありません。それは、「これは成り立つ事業である」という結論が出たにすぎないわけです。詳細にどこにどうという工場を建設して規模をどのくらいにするかということになりますと、道はまだまだ遠いわけで、そこに出てくるのが先にちよつと触れました実施設計です。実施設計は資金のめどがたないと出てきません。そして、実施設計が完成すれば入札で業者を選定し、いよいよ工事開始ということになります。

業者が落札し、工事を実施するにあたっては、施工管理ということをやります。この施工管理は欧米ではコンサル

タント会社に頼むのが慣例でして、施工管理業を専門にやるコンサルタント業がひじょうに発達しています。日本ではだいぶ遅れていて、専門家派遣で対処した例がありますが、日本の技術協力で施工管理の事例はひじょうに少ないのです。もともと、実施設計と施工管理は、技術協力としてではなく資金協力の中に含め、借款額の中にコンサルタント料を織り込んでおいて、相手国にコンサルタントを選定させる場合もあり、実施設計と施工管理は技術協力で資金協力の重複部分だということができません。

国際機関のところでメコンのことに触れましたので、ここで参考までにメコン河開発計画の話をおきましょう。私がこれまで説明してきたどれも当てはまらないような、気の遠くなるような話です。メコン河総合開発は主としてメコン河の水利を図ることですが、予備調査の段階でもう二十年にもなります。そしていまだに完全な資料が集まっていないのが現状です。メコン河総合開発は人類の夢であるといわれ、これまで世界各国が協力しながら予備調査をしてきました。ベトナム戦争で中断されましたが、戦争が終わったら再び復活するでしょう。メコン河総合開発の主役は、これまでのところ日本とアメリカでした。

メコンに並ぶものに、ホルネオ島カリマンタンにバリト川というのがあります。このバリト川は日本の学者の血をわかせる名前です。バリト川開発には、メコン河並みの歳月をかけなければならぬだろうといわれています。

タンザニアにキリマンジャロ総合開発計画があることは、先の専門家派遣のところで説明しましたが、この一番最初の調査には協力隊も参加しています。予備の前調査に参加したのですが、その後総合調査団が派遣されたことは諸君もご存知だろうと思います。

この開発調査のところでぜひ説明しておかなければならないことは、開発調査の世界で、日本は欧米と比較してま

まったく異質な体質を持つてゐることです。日本で総合開発計画といひますと国土開発計画が少し似ていますが、この開発計画をデザインしてきた人たちは建設省や運輸省などの人たちです。日本では、そうした計画をデザインする頭脳は、先に話した建設省とか運輸省とかいったようなところに集中してゐるのです。

ところが、アメリカではそうした頭脳が民間のコンサルタンツト産業の中にあるのです。アメリカ政府では、数十億ドルというような大きな地域開発でも、コンサルタンツト会社に委託してやらせてゐます。ヨーロッパでもだいたい同じです。

日本のいろいろな産業が欧米に追い付いてゐますが、日本でもつとも遅れている産業はもはやコンピューターではなく、このコンサルタンツト産業ではないかと思ひます。ある人は「日本の援助は、日本が資金を出してアメリカのコンサルタンツトにやらせてゐるようなものだ」と嘆いてゐました。日本人が英語に弱いことは日本の社会全体の体質です。すから、一朝一夕にはよくなると思ひますが、日本のコンサルタンツトは語学面だけでなく産業としてもまだ育つてゐないといえます。

欧米諸国は昔植民地を經營したことがあり、そういう中で、欧米のコンサルタンツトはシビル・エンジニアリングを専門にしなから、行政とか政治についても経験上じゅうぶんな見識ができてゐるのです。

シビル・エンジニアリングがひじょうに深く政治にもつながつてゐることは、古代中国の治山、治水と名君の關係でも想像がつくと思ひます。エジプトのアスワン・ダムが中近東の大問題になつたことがあります。要するに、アスワン・ダム倒だつたエジプトが、そのダムを建設するために急にソ連寄りになつたことがあります。要するに、アスワン・ダムのような大きな事業をやる場合は、その國の国力を傾注しなければならぬわけで、そうなると思はれる技術屋ではや

れません。そういうシビル・エンジニアリングのバック・グラウンドを持ちながら、たとえば民衆の気質とか、あるいはその国の行政官の癖とか、政治の動きとか、全部がわかったうえで、はじめて総合開発計画のできるコンサルタン
トになれるのだそうです。

その点、過去に植民地を持った欧米諸国はひじょうに強いわけです。植民地時代、いやおうなしにそうした行政をやらせたり、現地人を操つたりしてきたのですから。ところが日本の総合開発計画ということになると、大学の経済学部を出たような人がシビル・エンジニアと合議しています。実践とか経験とかいうバック・グラウンドがまことに弱いわけで、援助の世界で、コンサルタント問題はひじょうに大きな問題となっています。これが技術協力の中の一つの変種である開発調査というものです。

(五)

そこで、この講座の最後に、これまで話してきた順序を外れて、大事なポイントについて話してみたいと思います。技術協力において、これは私の信念ですが、技術プロパーが三〇％、技術以前の問題が七〇％と思っています。明治時代の日本のように、技術の移転や導入が容易に行なわれるようであれば、そもそも南北問題は存在しません。

明治の日本人をあくなき探求意欲にかりたてたものは何であつたかといえますと、おそらく、西欧の植民地にならないために日本を早く西欧に追いつかせなければいけないという気持があつたからだと思います。日本の長い伝統の中に培われた文化のうえに、そういう時代の風潮が加わって、明治の日本人は例外もありません。お雇いの外人”の骨までしゃぶろうと意欲を燃やしました。

もしそういう状態に開発途上国があるのなら、南北問題は今のような深刻な人類の問題としてではなく、単なる技術的な問題として存在するはずですし、それならばコマーシャル・ベースで解決が図れるはずです。明治の日本とはまったく違った精神風土を前提としてこそ南北問題があるのだろうと思います。したがって、技術以前の問題が解決すれば、青年海外協力隊の仕事、諸君一人一人の仕事においても峠を越したも同然であると思います。

“技術以前の問題”について話そうとすれば、それだけでもたいへん長くなりますが、ここでは概略を申しませう。一つは異文化の壁があるということです。私はよく、開発途上国の“ルール”と“リズム”という表現を用いますが、現地へ適応するということは、現地社会のルールとリズムを自分の実感で体感することであるわけです。しかし“適応する”ということは、いつてみれば準備ができたということ、こちらが相手を理解できるということですから、それだけだったら協力隊員ではなく“理解隊員”ということになります。

そこまでいくだけでもたいへんなことでして、賞讃に値するのですが、隊員はそこで停止してはならないと思います。どういえば、自分が抱負として持っている構想に目を向けてくれるか。彼らを引っぱっていくといっても、彼らにとって適切なベースとはどんなベースなのか。彼らの気質に合った進み方をするにはどういう段どりであればいいのか。そういう課題に取り組んでいかなければ協力隊員とはいえないと思うのです。

このことは、相手の人びとの心を読み切ったうえでいろいろな応用問題を解くようなものです。この応用問題は同じ国でも行つた先々で違います。まったく独創的な仕事であります。これは同時に、別な見方をすれば、ひじょうに文化的な香りの高い仕事であろうと思います。相手の心はその社会のルールとリズムに支配されている。そこに存在する価値観といつてもいいし、人生観、世界観といつてもいい。そういうものに左右されています。異文化の社会で

協力するということは、それほど深みのある仕事なのです。

これまでの技術協力では、先進国が独善的に急激な変革を強いて失敗した例が数限りなくあります。失敗とはいえず、その人がいる間は動いていても帰国してしまうとダメになるケースが数え切れないほどあります。意識の壁とは簡単にいいますと以上のようになります。

それからいま一つはマネージメントの壁があるということです。ひじょうにクリエイティブであるとか、文化的であるとか、まるで作家が創作をするようであるとかいいまでも、作家、画家たちは自室にこもったままの一人相撲です。しかし、諸君がはいって行く先は、なんらかのあたりで相手国政府の行政の一部に関与しています。そしてそこには組織があります。そこで、諸君一人一人がなんらかの仕事をしているわけです。

そうすると、日本での仕事のやり方を見てもわかるように、技術者が仕事をする場合、まず事務担当の人が、金を集めてきたり技術者の注文した資材を購入したり集めてきたりします。そして、事務担当者がお膳立てしたらうえて、技術者が力量をじゅうぶんに発揮するわけです。

諸君の場合、そのお膳立てをする事務担当者は現地の人です。そして彼らのマネージメントはあまりうまくない場合が少なくない。たとえば、諸君が雨期を三カ月後にひかえて小さなダムを造っているとします。ところが作業の進行中に選挙が行なわれて資金が来なくなつたので、いまだとばかり突貫工事をやらなければならない一番大事な時期に人夫たちを解雇して作業を中断しなくてはならなくなつたとします。まったく諸君の責任外のことです。諸君は空しく三カ月を空費することになります。極端な場合、二カ年を空費することになりかねない危険がある。

ということは、事務を相手国に依存しているからです。ほんとうは技術協力の前に事務協力を先にやったほうがい

いと思いたいくらいですが、どっこい事務協力ということになると、日本人の場合は言葉の弱さという大きい壁に突き当たる。このへんが恐らく諸君がたいへん苦勞するところでしょう。ここに思いを致して、諸君が幾多の試練に立ち向かつてくれることを祈ってやみません。

日本の進路と協力隊

衛藤 藩 吉

(一) 幼稚化現象

二年ほど前、米国の『プレイ・ボーイ』誌に未来人のマンガが出ておりました。それは公書のため、耳毛、鼻毛がのびており、それがのびない人間は生息できないそうで、そのうえ目がたいへん細く、まつ毛が多く、鼻腔が小さくなっております。理屈をこねたり、ペラペラしゃべるのに便利なように、口が大きくなっており、きわめて首が細く、サリドマイド児のように手足の筋骨はか細くなっております。中で最も特徴的なのは生活の向上により、性的快楽を求めすぎるため、生殖器が肥大していることです。

これはマンガですが、私たち社会学者にとっては、重大な問題であります。人類の歴史は有史以来退歩の歴史だといわれています。この退歩とは、専門用語で幼稚化といい、皮膚を例にあげると、元来人間の皮膚は堅ろうで、寒暑に非常に強いものであったが、知恵の発展により、ワラや毛皮をまとうことを覚えて急速に皮膚が幼稚化していったのです。つまり、温度、湿度に対する抵抗力が弱くなっていったわけです。次に麻、綿、絹、と発見して、ますます皮膚の幼稚化が進行していったのです。

先日、私の友人がゴワゴワした手織りのもめんの浴衣を着ようとして腕を通したときに、スリキズができたそうです。このように現在の人間の皮膚はきわめて幼稚化しているのです。冷暖房設備の完備した企業に勤めている人たちは、寒暑に対する抵抗力がまったく弱っています。この幼稚化の現象は戦後ますます進行しています。元来、人間は自然淘汰されるはずのものであったのですが、文明の進歩により、死亡率が低下してきて、本来なら生きていない人間までもが生存しているのです。このことは、それ自身、現在の価値観では誇るべきことで、一人一人の命を考えると、真にそういえません。しかし、人類全体として考えると、これは大きな社会科学上の問題です。

植民地での支配者、被支配者を比較すると、被支配者より支配者のほうが幼稚化が進んでいる。農業中心の社会では、肉体的幼稚化はさほど進行しないのだが、日本の場合、農業人口の急速な減少で、ますます幼稚化は進んでいると考えられます。とくに青少年にその傾向が強いのです。これはきわめて困った現象で、このまま幼稚化が続くと、数十年のうちに、先進国は音をたてて崩壊していくことでしょう。たとえば、アメリカ人は子供の頃より「車」社会に育っているのです。足腰が弱いといわれています。また、アジア、アフリカ諸国に比較すると、日本の青少年もそうなりつつあるのです。ゆえに、日本人および日本政府は、この問題を大々的にとり上げる必要があると思います。

(二) 国際社会の構造

戦後、日本の第一の国家目標は物資の欠乏からくる、物質的欲望でした。現在、この目標は、近年の高度経済成長の過程の中に果たされつつあります。第二の目標は政治的独立で、これも現在果たされたと考えられます。まだ日本が政治的独立を果たしていないと考える人がいると思いますが、外国の日本の評価を聞くと想像に絶するほどです。

たとえば、日米安全保障条約は、どの国もこれを不平等条約とは考えていないし、中国、ソ連もその非難をやめているのが現状です。つまり、それだけ日本は米國と対等視されているわけで、米國自身も、日本を強力なライバルとみなしてきています。このように、現在の日本は政治的にも独立したと考えられるのです。この二つの目標を達成したのは一九六八年頃であり、一九七〇年の沖繩返還は一つの政治転換点でした。

七〇年代にはいって、われわれは何を目標にすべきでしょうか。それは、人類が幼稚化をたどる過程において、それに修正を加えていくことです。日本はそういう役割を担っていると考えます。

もう一つ役割があります。それは、国際社会を考えると、その構造は頂点に核があり、現在核のカゲが全世界を覆っています。米國、ソ連が保有している核兵器をTNT火薬に換算すると、一六トン入になり、それほどの核の蓄積があります。その核戦略構造は三極と考えられます。人によっては二極半といいますが、最近の米國の発表によると、中共の中距離弾道弾は相当の威力があり、日本、フィリピン、インドをも制圧下に入れているので、ここでは一応三極とします。

国連安全保障理事会においても、米、中、ソの三極です。これらの国が合意すると、英、仏は拒否権を行使しません。

次に、国際政治そのものを考えると、一五、六年前は米、ソの二極でしたが、今は多極化して流動的です。その下に経済関係があり、私は網状だと考えます。しかし、ニクソンおよび周恩来は、五極だと考えています。ニクソンは一九七一年の夏、カンサスシティの演説の中で、米、ソ、中、西ヨーロッパ、日の五カ國が世界を支配し、軍事力より経済力がものをいう時代がくるとして、五極という言葉を使用していました。周恩来も同様な発言をしています。

しかし、私は五極ではなく、むしろ網状だと思います。たとえば、日本は毎日二〇万トンの鉄鉱石と八〇万トンの原油を世界各地から輸入しています。戦前、原料供給国の立場は弱かったのですが、今の立場はきわめて強いのです。アラビアの王様は、石油利権で金の使いみちがないほど金がたまっています。人間、金ができると、衣、食、住をよくする。これを満足させると、次は女をかこい始めます。これも満たされるとすることがない。仕方ないから、人民に金をやり始めます。それでも金の使いみちがないと、どうしようもありません。このような王様に会うと、まったく気力のない顔をしています。このように、原油をもつ王様の発言権が強くなってきています。今年一月頃から、OPEC（石油輸出国グループ）の発言権が急に強くなりました。また、日本はボーキサイト、鉄鉱石をオーストラリアから輸入していますが、そのオーストラリアの発言権が強いです。今のところは日本に対して協力的ですが、オーストラリアがそっぽを向いたら、たいへんなことになるでしょう。このような理由で、私は五極でなくて網状で世界各国の経済関係が広がっていると考えます。それがどこかでほつれると、日本や西ヨーロッパ等の国々は大きなショックを受けるでしょう。

(三) 新興国と忠誠心

さらに、政治、経済関係の下部に目に見えないものがあり、これは人間のもつ心理だと思います。国際社会における心理のシステムはわかりにくいですが、次のように考えます。

まずわれわれはいろいろなグループに属しており、家、日本、スポーツのチーム、町のグループ、外国などいろいろあるでしょう。そこでどのグループとの関係を自分は一番優先しようかという心理が起こってきます。それは「忠

「誠心」とよばれるもので、どのグループに忠実かということです。

たとえば、協力隊が隊員のみなさんにネクタイをしろといったとします。しかし、あなたがたのお父さんはネクタイ反対者だとする。その場合、あなたはどちらに「忠誠心」をもちますか。そういう問題はたえずわれわれの心の中にあります。

新興国の人民のほとんどは、その「忠誠心」の優先順位からいうと、一番先に国家をとります。したがって心理の上からは国家に対する忠誠心は非常に強い。インド人の学者と会議しているとき、ちょっとでもインドについて批判がましいことをいうとすぐ怒る。これはなにもインドに限らないで、韓国もそうだろうし、中国でもそうです。ところがわれわれは小さいときから、自分の国をないがしろにしたり、事実以上に悪くいたりすることになれています。だが、新興国ではそうはいかず、国家に対しての忠誠心はなかなか強いものがあります。だから、一般に、人間の心理というシステムを考えると、ナショナリズムは無視できません。

(四) 日本の構造

さて、ここで日本人の進むべき道を考えてみたいと思います。たとえば、核については、核兵器をだんだん制限してそれを使えないような方向にもっていくのは、われわれの大きな使命であると思います。一九七〇～八〇年代にかけて、核をもてない中小諸国、欧州のドイツ、オランダ、ベルギー等の国々と日本は手をつないで核兵器を制限するような方向にどんどん進んでいくだろうと思います。またそうすべきでしょう。

それから安全保障理事会ですが、これに日本は常任理事国としてはいろいろとしており、おそらく十年ぐらいたつと、

インドやブラジルといっしょにはいるでしょう。日本は国際社会における紛争処理の面での発言権をふやそうとして
いることは事実です。

国際政治は多極化していますが、その中で将来日本がどんな役割を果たすか、これはまだ明確になっていません。
確かにわれわれは経済力をもっていますから相当な発言ができるのですが、日本は自由な国であるがゆえに、国内に
たくさんの阻害要因があります。しかもそれが無視できないのです。国際社会の中に積極的にはいつていこうとする
と、その足を引っばるものが国内に必ずいます。たとえば、ヴェトナム復興に手を貸そうとすると、それは日本によ
る経済侵略になるから、これはけしからんと、必ず反対が出ます。また、シベリア開発への協力は日ソ交友関係のた
めにたいへん結構なことではないかと一部の人々が提案すると、他の一部の人たちが、北京政府を刺激しちやいかん
とって反対します。だから、政治的に日本が国際社会で積極的に役割を果たすのは非常に難しい。そういう状況で
ありますから、これから日本が国際政治でどんな役割を担うかはまだわかっていないのです。

経済成長が限界にきたとジャーナリズムの一部でいわれているが、私企業中心の経済がまだまだ当分続くでありま
しょう。

一つだけいえることは、日本の生産力はおもや国際社会で必要不可欠のものになったということです。例をあげて
みよう。日本は六〇年代に鉄鋼関係企業がものすごい設備投資をしました。そして、大分の製鉄所や名古屋の製鉄所
の場合がそうであるように、少人数で膨大な生産量をあげています。アメリカの古い製鉄所とはまったく違って、人
力を節約しています。昨年、通産省や経済学者は鉄鋼の需要は底をついた、設備投資しすぎた、と盛んにいっていま
した。しかし、どうでしょうか。ここ数カ月でまた鉄の需要が世界的に多くなり、わが国の製鉄業界が生産につぐ生

差をしないと、国際市場での鉄の価格が上がって仕方がない、そんな状況です。一つだけ例をあげましたが、経済のほうでは万事そうなのです。

日本の経済成長はこれからもまだまだ続くでしょう。そうすると、さきほどいきました網状の世界経済のどこか一つがもつれると、日本の経済は非常に困ります。たとえば、日本製品のミシンだったら半分以上、カメラも半分以上外国へ輸出するわけですが、それが売れなくなり、また原料がはいらなかつたら、日本の場合とくに困ります。ということは、われわれの今日の生活を維持しようとするなら、絶対どこの国とも仲よくしなければならぬわけですね。

(五) 森鷗外の「二本足」論

森鷗外は、二本足で歩く人たちこそ、日本の将来の文化を担うことになるだろう、と書いています。

二本足とは西洋と日本ということで、鷗外は、西洋の文化を理解しているだけで、日本のことをなにも知らないことはダメだ。それから日本のことだけ知っていて、西洋のことを知らないのはダメだ。両方の文化を知っていてこそ、将来の日本の文化が担われる、と書いています。

彼の生きた明治の時代は、世界の大部分は植民地であって、まさにヨーロッパに最高の文化があったわけですね。だから鷗外の考え方でよかつたかもしれません。ところが、第二次世界大戦後独立国が急増して、それらの国々と日本は密接な関係をもつようになりました。インド、モロッコ、フィリピン、ケニア、オーストラリアそしてモリシヤス、さらにはマダガスカルとも日本は関係をもち始めたんです。

しかし、それでも、日本はアジアにいながら鷗外のいう二本足の人がアジア、アフリカに関しては、非常に少ない。

ついこの間三月末から四月にかけて、日本政府が東南アジアに対して文化使節団を出しました。その団長が宮沢喜一さんで、大蔵官僚から代議士になられた人で、西洋文明のほうに向いて育った人です。三週間東南アジアを旅行して帰ってきて、彼が受けた第一印象は、日本人の中に東南アジア諸国について知っている人がなんて少ないんだろうということです。彼が帰ってきて、もっとも強調したことは、アジアについての教育をもっとしなければならぬということでした。

私の友人でタイに留学した人がいますが、彼はタイ語と英語が話せる。しかしその他はまったくダメで、ましてや、中国語などとても難しいという。だから一口にアジアといっても、簡単にはいかない。たとえば、ヒンズー語を勉強してインドの社会を知っている人は、より深く日本とインドの勉強をするべきです。

しかし、こうして一つ一つの国を知ることができるようになっても、それはたとえば日本とビルマとか、日本とネパールというような二本足しかできないわけで、日本とアジアという二本足は不可能と私は思います。したがってアジアを知るためには、多くの人が必要となりますが、わが国でそのような人材を育てる所は二カ所しかありません。それはこの協力隊とアジア経済研究所です。

(六) 私の「協力隊」像

このように考えると、われわれがこれから一九七〇／八〇年代にかけてしなければならないのは、相手国をきめ細かく理解する人を多く育てることです。友好関係を作りだしていくことは、日本経済に必要なだけでなく、相手国にとっても必要なことです。

というのは、私がいうまでもなく、開発途上国はたくさん、困難をかかえ、それを自力だけでは解決できません。だから彼らは、外国からの協力を絶対に必要とします。

ところでその協力ですが、一九五〇年代は金さえ出せばいいだろうという考え方でした。しかし一九六〇年代では、金だけではダメで技術協力、その他が必要だという考え方が生まれてきたのです。この考え方はますます定着しつつあります。

では、技術協力の中で、どのような形態のものが一番いいかというと、その形態はおおまかに分けて二つあります。一つは、海外技術協力事業団が受けていているもので、これは、技術者がじゅうぶんな報酬をもらって相手国へ行き、技術を売ることです。もう一つは協力隊で、技術援助ということで、技術の売買はしないやりかたです。

ところで、相手国にとって、望ましいのはどちらかといえば、私たちも調べ、アメリカでもいろいろな研究がなされていますが、圧倒的に協力隊のほうがなんです。

さっきも申し上げたように発展途上国がこれから伸びていくには、お金だけもらって、さっきのアラビアの王様のように使い方を知らないようではいけないんです。しかし、高級な技術を外国人がもってきて、それを現地の人たちが理解できるかどうかという点にも問題があります。まして、現地人はひどい所に住み、外人の技術者は高級マンションに住むということでは、技術の交流がうまくいくはずがありません。その点、あなたがたの場合は、生活を共にし、労働を共にするという基本的なものを持ち、現地人とけこんでいくということで、非常にあちらからありがたいがられています。

(七) マネージメントの能率

それからもうひとつ、私たちの研究で次のようなものがあります。発展途上国は、政治的にいつも不安定なので、経済成長が遅く、社会的に混乱が多いのです。

それでは、その状態をよくするのに何が一番大切かというと、それは共産主義でもなければ、議会主義でもないのです。それは、マネージメントの能率なのです。つまり一番大切なものは現地の人たちがマネージメントの能率を習得することなのです。マネージメントの能率向上、というのは簡単にいえば、よく働くということなんです。しかし、人間関係を悪くする働き方はむだになるので、結局、人間関係をよくする働き方というものが望まれるわけです。

また、組織としての力を上げるという能力も、発展途上国の場合、欠けています。組織がなければ、社会的、経済的進歩は望めないわけで、これが事実上最大の問題なのです。専門家の場合、現地の組織にはいることはまずないでしょうが、協力隊員の場合は、いやがおうでもその組織にはいらなければならないでしょう。そうすると、現地の組織は日本の組織と異なり、隊員から見るといろいろと心外なことが多いと思います。しかしその心外なことが多いからこそ、協力隊の場合、意味があることとなります。協力隊が現地の組織にはいることによって、現地の組織が変わり、少しでもマネージメントの能率が上がる、ということはたいへんなことであり、これが一番大切なのです。

(八) 教育と国家の発展

次に大事な要素は、識字率であります。日本においては、学校教育が世界的に進んでいるが、発展途上国ではまだ

まだです。そうすると、実際の教育は、働きながら行なわれるとか、あるいは村でいっしょに生活をしながら教える、そういう型になるわけです。これについても、協力隊は大きな働きをもっています。発展途上国を変えるか変えないかという決定的なカギは、協力隊員のめいめいが握っていると思われるくらい、あなた方は重大な影響をもつと思います。

たとえば、暮末に長崎へシーボルトというドイツ人医師がきたことによって、日本のインテリの間にもものすごく大きな影響を与えた。明治政府はお雇い外人という西ヨーロッパの一流の人間をつれてきた。これらの人びとが日本社会に与えた影響はたいへんなものでありました。たぶん、あなた方はそういう意味で、発展途上国にとって最も望ましい外国からの協力者になるだろうと思います。

だから、日本の側の利益から見ても、さきほど申しました二本足は必要であるし、発展途上国からみても、協力隊は最も望ましい。外部から「ああしろ、こうしろ」といってもだめであり、内部から変わる必要があります。この内部から変わるために、あなた方、協力隊員の役割は重要であります。

(九) 国際的利害の衝突について

さて、ここで問題は「忠誠心」の問題にもどってきます。つまり、あなた方が海外へ行くと、自国利益と受け入れ国利益が生じてきます。「ここで働くことが日本のためになるのだろうか」というふうな疑問が生じてくると思います。

それからもう一つ問題になるのは、受け入れ国の中にいろいろなグループがあることで、特権者のグループもあれ

ば、農民のグループもあります。どちらに協力すべきか、非常に迷うことでしょう。あるいは、部族同士の戦いの場合など、どちらの側に立つか、そういう「忠誠心」の問題で非常にあなた方は悩まれていると思います。それらに巻き込まれたときにどうするかという解答を、私はもっていませんが、ただ警告だけは発しておきます。

例をあげると、もしあなたがたが日本の利益か、受け入れ国の利益かというところで悩まなければならぬことが生じたら、私は受け入れ国の利益をとってよいと思います。それから、農民の利益か、特権者の利益かで悩んだときは、なるべくそのことに介入しないほうがいい。なぜなら、他国のことだから、それに介入したらそれは一種の帝国主義であり、他国を干渉することになります。しかし、ケース・バイ・ケースでいろいろな判断が出てくるだろうと思います。

むすび——「側隠の情」という感覚

最後に申し上げたいことは、要するに、幼稚化することに対してわれわれは抵抗する組織をもたなければならぬことです。そうでないと、われわれの子供たちは完全に幼稚化した人間になってしまいます。これはよほど勢力しいといけません。

もう一つは、現在多くの問題をかかえている途上国を放っておくわけにはいきません。しかし、この状態を放っておいてもいい、という考え方もあります。それはどうしてかという点、他国のことだからかまわない、立ち上がれないのは弱者なのだから放っておいていい。たとえば、電車の中で老人がきたのに席を譲る必要はない、先に座った者が権利があるのだから、その権利を譲る必要はない、混んでいる電車に乗る老人が悪いのだ、という理屈です。しか

し、これには私個人としては絶対に反対の考え方です。

東大へきた学生には、小学校の頃よりそういう教育を親より受けて育った学生が多く、とくに東京の中産階級の母親にはそういう考え方が強いのです。他人に対する「惻隱の情」がまったく養われていません。こういう考え方で世界を見れば「弱い國は弱い國であり、わが國は働いてここまできたのだ。他國の世話などする必要はない」という考え方になります。また、「世話をしてもだめだ」という考え方もあります。私がいった「惻隱の情」とは孟子がいった言葉で、「忍びざるの心」といって「みかねることがある」ことをいい、「人は生まれながらにして性は善なのである」といいます。たとえば、子供が井戸で溺れているとき、それを黙って見ていられない、というのが「忍びざる心」なのです。

ただ「性善」に関するかぎり、この頃の学生諸君を見ると、私は必ずしもそうは思いません。人の性が善であるか悪であるかは赤ん坊の時からの方で決まると思います。老人が電車に乗ったら絶対に席を譲るといふ心をもたなければ、私はこれからの複雑な国際社会の中で、日本人が信頼されていくことが絶対にできないと思います。

われわれは核兵器をもっているわけでもありませんし、中華人民共和国のように団結した力も持っていません。また、かれらは毛主席に忠誠を誓いますが、われわれは天皇陛下のために忠誠を誓えるかという、てれくさくってそんなことはできません。日本はそういう國柄なのです。こういう國の一人一人がどれだけ信頼されるかといいますと、「惻隱の情」ということが非常に大切になってくるのです。

この「惻隱の情」があれば、発展途上國でいろいろな困難な問題をかかえて苦しんでいるのを黙って見ていられないでしょう。その場合、われわれがやるべきことはまず第一に幼稚化を防いで、第二に「惻隱の情」をもち、第三に

日本にとってもあなたの方のような人たちの活躍、これらが必要であると思います。これは日本の社会は今後、だんだん変化してくるからです。

戦後、権利主義を主張することはよいことである、という教育が行なわれ、現実になんか政治が行なわれてきたのですが、これだけ人口密度が高くなり、活動の範囲が広がってくると、絶えず権利どうしの衝突が起こるし、またいろいろな新しいことに向かおうとすると、それに対して絶えず足を引っ張る勢力が存在してくる、ということ、これから先の日本の社会はどんどん乱れてくると思います。

この乱れてくるときに新しい秩序を作り出すのは、これは若い人たちでなければできません。若い人は乱す力ももっています、また作り出す力ももっています。およそ人間は四十歳過ぎるとそういう力は衰えてきます。だから私などは過去の人なのであって、あなたの方のようなヤング・パワーが日本の将来にとって大きな意味をもつわけです。

また、これから世の中が複雑になってきますと、やたら権利ばかり主張するのではだめで、社会の中で、権利と義務とを両方心得ている人間が多くならなければ日本は滅びてしまうでしょう。

開発途上国に対する「憐憫の情」から、なんとかしてその国のためになりたいとか、とても見てはいられない、といった心情はそのまま日本の国内に反映して、社会的な権利と義務とを心得ている人間の増加につながってきます。

現在、協力隊のOBは一一〇〇名ほどです。これぐらいでは日本の社会で勢力として話にならないのですが、五千名ほどになれば、これは社会に対して強い影響力を及ぼすでしょう。あなた方が努力をしなければ、日本の社会は急速に幼稚化して混乱はますます激しくなり、開発途上国の困難はいつまでも抜けられないでしょう。

明治の人たちは、たいへん簡単に青春の情熱を祖國の進路とともにすることができましたが、それはなぜかといえ
ば、日本が強くならなければどうにもならない、日本が滅びてしまうのではないか、という危機感があったからであ
ります。また、ヨーロッパには汽車もある、大きな軍艦もある、そして大砲もあるが、日本にはそういうものがあ
りません。そこで日本も作りたい。そういうことだったわけです。そのために明治の人たちはものすごいエネルギー
を傾けました。

福沢諭吉の自伝の中に、彼が緒方洪庵の塾で勉強していたときのことが出ています。ある日、ひょっと気がついた
ら自分はふとんをもっていなかった。机に向かって勉強をして疲れると、そのままごろんと横になって寝てしまい、
そして目が覚めると再び起きて勉強をするといった一節があります。私を含めて、協力隊の皆さんもふとんをもたな
いで勉強された方はいらっしやらないと思います。だけど福沢時代の日本の人たちにとっては、そのようなことは珍
しくはなかったようです。

もう一つの例をあげると、田中義一という陸軍大将になった男がいます。彼は青春時代に、士官学校を出て陸軍大
学校の試験準備をしているときに、梅の根っ子を枕代わりにしていたのです。彼の説明によりますと、梅の根っ子は
ぐねぐね曲がっているのに、枕にしているとき、寝返りをうつと頭の位置がずれて、頭が痛くて目が覚めるというの
です。寝返りをするたびに起きて勉強したわけです。そういうものすごいエネルギーを発揮したのです。

日本には、終戦後から一九六〇年代までは、経済的に豊かになりたいとか、政治的独立を果たしたいとか、そうい
った明確な目標がありました。これからは国としての目標はなほだ不安定でよくわかりません。しかし個人にお
いてははっきりしていると思います。前述したように、幼稚化している人類を放っておけるか、という問題がありま

す。第二は、このものすごい高密度の日本の社会の中で、新しい価値観を作り出さなければならぬということ。それは権利と義務をじゅうぶんに心得た、そして「惻隱の情」から生まれるものでしょうし、生まれなければならぬものでしょう。

ちょうど、あなた方はよいときに外国に行かれると思います。それは日本がちょうど今、曲がり角にきたときであり、あなた方の問題意識は非常に鮮明で、海外へ行ったら、その問題をさらに痛切に感じることと思います。そして、日本に帰ってきたときには、次の世代の日本社会を担う新しい型の人間になることでしょう。その意味で、私はあなた方、協力隊に大いに期待しているわけです。たとえ祖国を捨てても、あなた方一人一人が、一個の人格として国際社会の中で通用する、そういう人間になられたほうがよいと私は思います。

執筆者紹介、収録記事発表時期

隊員とともに、幸福とは何か？を考える—— 伴 正一 海外協力隊事務局長

人間性に対する信頼—— 伴 正一 昭和四七年四月号
柏谷甲一 海外協力隊マレーシア駐在員

常 識—— 『若い力』 昭和四三年五月号
丸山静雄 朝日新聞論説委員

お雇い外人の記録—— 『若い力』 昭和四一年八月号
平山祐弘 東京大学助教授

技術協力の先立つもの—— 『若い力』 昭和四八年六月号—— 異文化の理解(1)
高橋 彰 東京大学助教授

経済発展と人間の原点—— 『若い力』 昭和四八年八月号—— 異文化の理解(2)
深海博明 慶應義塾大学助教授

「現地」適応について—— 『若い力』 昭和四八年九月号—— 異文化の理解(3)
中根千枝 東京大学教授

援助の仕組み—— 『若い力』 昭和四八年十月号—— 異文化の理解(4)
伴 正一

日本の進路と協力隊—— 『若い力』 昭和四八年九月号、四九年二月号(開発講座(1)～(5))
衛藤藩吉 東京大学教授

昭和四八年六月十六日協力隊訓練生に対する講話

訓練所における
協力隊講座
第一集

昭和四九年三月二日

編集発行

日本青年海外協力隊事務局

